
相互不認知

鬱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
相互不認知

【Nコード】
N8875H

【作者名】
鬱

【あらすじ】
＊完結しました＊施設暮らしの亮平はある事件をきっかけに男に体を売ることになった。施設の子供に手を出さないことを切欠とした身売り。唯一の救いは山でゆっくり自然を眺めることと子供達と遊ぶこと。しかし数奇な出会いはそれすら奪っていく。

一粒

白い壁。施設の壁はとにかく白い。

といってもこの部屋はタバコの煙によって薄っすらと黄ばんでいる。

僕は視線を移し、窓を見る。

朝露に濡れた向日葵、紫陽花。その美しさに僕は心を奪われる。美しさの前では苦しみも痛みも全てが忘れ去られるのだ。

「亮平……元気ないなー？　ぴくりともしないし、反応ないとツマシネねーよ。もしかしてアノ日？」

そういつて彼は笑う。

もう一人の男がシャワールームから出てきてテレビのチャンネルを変えた。首にタオルを掛けて、片手でビールを空け、飲む。

テレビではニュースキャスターが真面目な顔でローカルニュースと駅前の事件のプラスにもマイナスにもならないことを伝える。

「お前まだやってんのかよ。亮平君も疲れてるだろ。さっさと終わらしてやれよ」

「うるせーなー」

「あんまり長く続けると女連中がボロボロだってまた怒りにくるぞ」

「ちっ、わーたよお！　お……うつ、と」

そう男はいうと僕の中に生暖かいものを吐き出す。体を小さく痙攣させて僕の体を抱き、髪の毛を撫でた。

端的に言えば僕はこの男達に抱かれていた。

いや、そうじゃないな。

僕はこの孤児院で暮らしていて、その職員達に輪姦されていた……が正しいのか。

さっきまで他の男達がいたのだけど自分の“用”を済ませ終えた彼らはさっさと部屋を出て行った。

間違っても僕は決して自分から抱かれに言ったわけじゃない。ただ理由があって抱かれていた。

「亮平ちゃん、一緒にお風呂で洗いっこしようか？」

「……いやです」

「ははっ、相変わらずクールだねえ。オジさん元気になっちゃうよ」テレビを見ていた男が下種な笑みでこちらを振り向く。

僕はタオルで適当に体を拭くと、辺りに投げ捨てられた服を着て、部屋を出る。

フロアリングの床を裸足で歩き、真っ直ぐ自分の部屋にたどり着いた。

まず時計に目がいく。時刻は四時をまわったところ。次に安っぽい学習机の上に置かれた写真立てが目に入る。

何だか僕は申し訳ない気持ちになってその写真立てを伏せた。そして棚からタオルを出して一人風呂に向かい、シャワーの蛇口を捻る。

最初の水はまだ冷たい。だけど僕はその冷たさに体を浸した。

写真。

僕の父さんと母さん。

両親は既に他界している。死因は事故。

身寄りの無い僕は各地の施設を“事情”により二転三転したあと、半ば必然的にこの施設にやってきた。できたばかりの施設な上、自分が一番の年長だということに不安を覚えはしたが何とか適合することができた。

他の施設にない何かがあったのだろうか。

いや、むしろなかったのか。

この施設の子供達は自分が不幸であるということをまったく感じさせないほど明るく、今を楽しもうとする活発な子供ばかり。

本来、相容れない年長者であるはずの僕の手を引き、あれをしてこれを弾いてこれを描いて。

気がつけば無表情だった僕は笑っていた。彼らと一緒に虫を追

かけて、庭に種を撒き、歌を歌い、沢山沢山笑った。

ここで骨を埋めるのも悪くない。そう思った。

それが少し歪み始めたのはある日のこと。

一人の男が僕にちよっかいを出してきた。前々から僕のことを変な目で見てきていた彼は僕を抱かせるといった。

僕はその要求を突っぱねた。

次の日、一番下の女の子が犯されそうになった。

僕は彼を殴り飛ばし、言った。

『警察のご厄介になりたいんですか？』

『亮平がやらせてくれないからしょうがないだろ？』

『通報します』

『……いいぜ、やってみろよ。捕まる前に絶対一人は犯してやる。

それだけじゃねえ、俺の仲間にも犯させる。職員に俺の仲間がいないとも思ってたのか？』

『最低ですね』

『それだけじゃねえ、この施設が問題になって潰れたら施設の子供達はみんなバラバラになる。それがどういふことか分からない亮平お兄ちゃんじゃないだろお？』

そういつて彼は笑う。娑婆に出てきても狙ってやるといつて笑う。確かにそうだ。

問題になれば別の施設に子供達は移転させられる。そして移転先の職員が必ずしも優しいわけじゃない。移転先の環境が必ずしもいいわけじゃない。子供達に暴力を振るうのが恒例化しているところなんてザラだ。

僕はそういうのを見てきたし実際に“そういう目”に遭ってきた。『お前が身を差し出せば俺達は何もしない。それによ、知ってるんだぜ？ お前、院長とできてるだろ。これってスキャンダルじゃないのか？』

『……………』

『それにお前の親……例のヤツだろ？ ニュースで見たぜ。この施

設にもいるんじゃないのか——お前の親にパパとママを殺されたヤツ」

僕はかっとなって男に掴み掛かった。男はそれを笑い、僕の尻を撫でて答える。

『どうしたんだよ、殴ってもいいぜ。警察に通報してもいい。ただそれってお互い不幸なだけぜ?』

『……かみさま』

僕の腕は力なく崩れた。日差しはまだ高いはずなのに震えが止まらなくて、涙が出た。

僕の罪滅ぼし。

だから仕方ないのかもしれない。今日のことも、これからのも。

僕が犯されて、変なものの舐めさせられて笑われてビデオ撮られるのも仕方ないのかもしれない。

それに僕の身ひとつであの子達の笑顔を守れるなら。誰かの笑顔を守れるなら。

「あれ?」

気がつけば僕は涙を流していてシャワーの雨に打たれていた。

どれくらい時間が経っていたのだろう。

僕は急いで体を洗う。平均的な男性よりも長い髪の毛をシャンプーし、注ぐ。

髪についた汚らしいものが上手く落ちない。僕は何度も何度も細かくそれを落とす。

お湯で固まったそれを見る度に何かが胃の底から込み上げてきて僕の顔を赤く染めた。

悔しさと羞恥が入り混じったものが僕のプライドを穿つ。

「何を今更……」

プライドなんて、もうどこにもない。初めからそんなものがあつたかすら分らない。

しかし、憎しみと悔しさだけは確かにあった。

僕は体内も全て洗い流し、タオルで体を拭く。

壁に掛けたからジーンズとティシャツ、フード付きのパーカーを羽織る。

部屋を出ようとして止まり、振り向く。机に向かい、それを起こす。

「父さん、母さん……いってきます」
僕は部屋を出た。

二粒

時刻は五時。

施設のロビーを抜けて少し広い駐車場に出る。

辺りは青いもやが掛かったように薄暗く、夏だというのに空気は冷たい。

僕はスニーカーを鳴らし、前へと進む。まだ時間はある。

道路を横断し、田園地帯を歩く。

野ざらしにされているせいか、色素の薄くなったバスの時刻表。

そんなものを横目で眺め、僕はそこにつく。

少し小高い山。

広葉樹が生い茂り、田舎の年寄りが山菜取りに来そうな青臭い山。今度、施設の子供達を連れてハイキングに出かけることになっていた。だからその下見。

といっても日頃からここは通り慣れている。いちいち山を横断するよりも、ショートカットした方が町へ行くのが楽なのだ。

「よし」

気合を入れて僕は山を登る。急斜面のでこぼこ道は貧弱な僕にはいささか辛いものがある。

転落防止のロープを掴み、いそいそと登る。十五分ほどで頂上に着く。

頂上は開けた場所になっていて、百八十度町を一望できる。もう百八十度は後ろは森になっていて何も見えない。見えたところで元来た田園地帯なので何の面白みもないのだけど。

地味に疲れた僕は青いプラスチック製のベンチにぐったりと横になる。体の筋を伸ばし、欠伸をした。

この時間だけは心を落ち着けることができる。誰もいないし誰にも邪魔されない。

今度は体を起してベンチに背をもたれる。

町はまだ眠っているかのように静かだ。どこかで新聞配達の原付のエンジン音。

僕はおもむろに立ち上がり、森とは反対側の崖っぷちに生えた植物をスケッチするために転落防止のフェンスに近づいた。

ポケットから手帳と父の形見のペンを出し、植物を描き写す。

それは後で調べて、ハイキングの時に子供達にいろいろ教えてあげるため。

「流石に向日葵と紫陽花はいいかな……」

でも花言葉なんか知っていたら面白いかもしれない。僕は花言葉、と手帳に記し丸でくくっておく。

頂上は誰かが種を撒いたのか沢山の花が咲いていて、なかなか美しい。

心なしか百合の花が多い。図鑑で見たことがある赤いユリやピンク色のユリがあった。

僕は屈み、ユリと記すとスケッチをまた再開。

「それは百合ではないよ」

「え？」

僕は振り向く。

チェックのシャツ、下がスカートになったオーバーオール。黒いブーツに黒い長髪。

なんだか偉そうな感じの女が手をポケットに入れながら僕の顔を見つめていた。

「それは百合ではない。鳳仙花だよ。花言葉は“私に触れないで”」
彼女は草むらからガザゴソと出て、僕に近づく。

僕から見て右側に行けば町に降りられる、左に行けば田舎道。でも彼女が出てきた場所は背後の森。

ほぼ九十度の斜面を登ってこない限りそちらから人が来ることはありえない。というか無理だ。

つまり僕が来る前から彼女は森の中に潜んでいたということ。
何の為に？

「君……いつからいたの？ 僕に用？」

彼女は口元を左手で覆い、探偵のように考える仕草をした。

「ふむ、なかなか君は巡りがいいようだね。君にようがあるかどうかの前に私は宣言しておきたいことがある」

「な、何？」

彼女は左手をポケットに戻すと、当たり前のようにいう。

「私はどうやらレズらしい」

「……はっ？」

僕が理解できないでいるのを察したのか、彼女はその言葉を分かりやすく説明する。

「つまりはつまりはそう、同性愛者ということだ」

さっぱり意味が分からない。僕は少し身じろぐ。

もしかして結構危ない人なのかもしれない。

「おっと、その目は引いているな。鳳仙花だけに近寄るな、ということかな？ しかし残念だが私はレズ人以上、君を逃すことはない」とここに断言しよう」

何の宣言だ。

「あの……その、さよなら！」

危険な香りに僕は身を翻し、町の方向へと走る。

しかし僕は直ぐに横転。足に違和感。

何故だろうと見てみると足元に細いタコ糸が引っかかっていた、そのタコ糸を目で追う。

森の方向に伸びていて………最終的には彼女のポケットの中に繋がっていた。

影が僕を覆う。笑みは濃く、圧倒的な立場を誇示する。

「フフフフ、観念してもらおう」

ゆっくりと手が伸びる。僕はそれに目を瞑った。得体の知れない恐怖が黒い魔の手となって僕に伸びる。

そして、彼女は僕の手を取ると起き上がらせたのだった。
あれ？

「へ？」

「まずは友達からだよ！」

変な彼女は純情な乙女だった。

彼女は僕の手を取り、ベンチに座るように半ば強制的にいうと急に固まった。

「……んん？ 君は男性だったのか？ 骨格や筋肉の付き方が女性のそれとは違う」

「いや、まあ……一応」

声だけで十分わかると思うんだけど。

額に手を当て、なにやら思案顔になった彼女は少し間を置くと、眼を開け捲くし立てた。

「では私はレズではないということか！ よかった！ 私のこの気持ちと倫理を天秤にかけ、一週間悩み抜き、それを自分自身のサガと認めたのが先ほどのことだ。しかし私は至ってノーマルかつ生物として何の規範も外れていないのだね。よかったよかった」

彼女はそういい、僕の両手をシェイクハンド。勝手に自己完結された。

「ええつとよく分からないんだけど、つまり？」

「私は君のことが好きだということだよ！」

「へ？」

名前も聞いていない彼女は僕に抱き着き唇を合わせた。少し湿った柔らかい肉が僕の唇の上に押し付けられる。

僕は半ば押し倒されるように、ベンチに背を打ち付けた。

驚いた僕は彼女を突き放す。それでも彼女はハイテンションだった。

「な、なに……」

「うむ、話に聞いていた通りだ！ 確かにキスとは肌と肌の接触行為だけではない！ それ自体に意味がある。古来から人間がこの行為を好んで行ったわけだ。互いの距離をゼロにするというよりも恐

らくは相手と同化する意味合いの方が強いのだろうね」

「あの……話を」

「いや、それよりも私は官能的なこの行為に酷く興奮した！ 難問を解いた時のような高ぶり、振るえ、動悸や眩暈」

最後の方のは病気か何かだろ。

「つまり脳内でβエンドルフィンが多量に分泌され、私は酔っているだよ。わかるかなわかるかねわからんだろう！」

「いや、その」

自己完結されても困る。どこか馬鹿な感じの彼女は拳を胸に掲げ、僕に力説した。

そして僕の頭を両手で固定する。

「ちょ、え！？」

彼女はまた僕に口付けをした。目を開けて僕の泳ぐ視線を捉え続ける。

そして何かが口をのたうつ。ぐにゅつとした柔らかくて熱いものが唇を割り、侵入した。

「んっ！」

「ぷはっ」

彼女の薄い胸を押して、無理矢理顔を離す。そして後退り、強い語調でいう。

「さっきから君は何だ！ 急に人にキスしてきて訳分からないこと口走って自己完結して、何がしたいんだよ！」

僕は顔を真っ赤にして口を拭く。彼女はその言葉に一瞬啞然とし、立ち上がると……笑った。

何故笑うんだろうと彼女を見つめる。そして次にまた何かをされるんじゃないかと身を固める。

「君は何か……か。私としたことがまだ名乗るべき名前を語っていないかったとはね」

「……それ以前の問題だ」

「ふふふふ、ここで名乗ってもいい。しかし私は思うのだよ！」

急に張り上げられた声に少し僕は驚いた。

「な、何を？」

「恋とは謎があってこそそのものだ！ 相手を知らないから知りた
いという気持ち、知ったときの嬉しさ。それらが恋足らしめる要因
の一つである！」

「……つまり？」

「今日はここでは語らない。次までに何か面白いものを考えてこよ
う！」

そいつは彼女は笑いながら森へと駆ける。僕はワンテンポ遅れな
がらそれを追う。

「さらばだ、明智君！」

「ええっ、ちょっとちょっと！」

振り返ることなく彼女は走り、消えた。もとい斜面から転げ落ち
て坂を下っていった。

「……………な、夏だなあ」

熱くなってくるとああいう変質者が沸くっていうし、うん。きっ
といろんな意味で彼女は病気だったんだろう。

少し気がかりなのは彼女が飛び降りた斜面こと、絶壁はなかなか
高い。

大丈夫だろうか、死んでなきやいいけど。

僕はベンチに戻り、溜息をついてメモ帳に言葉を記す。

「……なんかシヤクだけど一応、鳳仙花って書いてこう」

花言葉は“私に触れないで”

二・五粒

少女はソファにもたれ雑誌を見ていた。横には泥だらけの友人。髪の手は乱れ、頬には泥。

彼女は少女にしがみつくとおいおいと泣いた。

「どうしようどうすればいいどうしてしまおう！」

「知らない」

今まで話を聞いていた少女は冷たくそう言い放つと住宅情報誌を捲くった。

彼女は少女の雑誌を取り上げ、横に置くと膝に泣きついた。

「これではどう考えても変質者だ！ 想定のみステリアスだけどころよつと可愛い女の子、とは大きくずれてしまった！」

「変質者っていうよりも色物だよ」

少女は彼女の長い髪を優しく撫でる。神経質な彼女は涙目になり、首を赤く染めた。

「どうすればいいのだ。私は彼と友達になりたかったただけなのに……」

「彼？」

「ああ、彼女じゃなくて彼だった」

「ふうん」

奇妙な境遇に少女は少し笑う。そして言葉を続けた。

「でもあわよくば、とも思ってた」

「うっ、確かにそうだけど……そうだけでも！」

「ラマヌジャン的だね」

「……そうだ。確かにラマヌジャン的ではあった。しかし、彼ほど神秘的でも数学的でもなかった。あれは支離滅裂で何の形もないただの戯言だ」

そう彼女はというと目の前の少女を抱きしめる。目からは真珠のような涙を流した。

少女は首を傾げる。

「泣いてる？ 悲しいんだ」

「服も君が貸してくれたものを着た。髪の手入れも君がしてくれた。話方も手ほどきしてくれた……だけ私は何もできなかった。何も変われなかった。寧ろ嫌われてしまっただろう。それが酷く悲しいのだよ」

「あたしに申し訳ないと思ってる？」

「そうだ……そうなのだ。私は君に申し訳ないと思ってる」

少女は自分にしがみつく彼女を剥し、見詰め合う。そして平坦な口調と顔でいった。

「なら、そのままじゃだめだよ」

「しかし、第一印象は最悪だ！ 人の印象は全て第一印象で決まる。それは心理学的にみても正しいことだろう？」

彼女はそういうと鼻を赤くし、また涙を零す。少女は無気力なまどようしようかと溜息をついた。

普段の彼女はこんな弱い人間じゃない。

自分も恋していた時はこんなにうろたえていたのだろうか。

確かに誰かに助けを求めているがここまで変化してはいなかったはずだ。

「でも最初が最悪ならあとは上がるだけだよ。マイナスというのは概念上の存在であって実世界にはないんだ」

「だがしかし、変なまま話を続けてしまったら私は彼にとって奇行キャラだ！ 私はそれが最も最も恐ろしい！ もっとこう……可愛らしいものでありたいと思うのは間違いじゃないはずだろう？」

「何も選択しないよりも何かを選択した方が自分にとって幸せである確立は高い」

「確率論ではなくもっと実直な言葉で私を慰めてくれ！」

少女は少し考えるように首を傾げ、髪の高い彼女を抱きしめる。

彼女はそれに鼻をすすり、抱きしめ返した。

ゆっくりと少女は語りだす。

「あたしは……あたしはね」

「うむ」

「好きな人をPTSDに陥れたり監禁したりしたけど彼のことを諦めなかった。いろんな人を不幸にして、巻き込んで、最悪なことをしたけれど彼を思うことを、その努力を怠らなかったから今幸せなんだ」

少女は笑い、いろいろ思い出して顔を赤く染めた。その熱に彼女の体がじっとりと汗ばむ。

「そういうもの……なのか」

「そうだよ。世の中、不確定性の上に成り立ってる。だからそんなに気落ちすることない。抽象的な言葉だけど積み重ねていけばいつかは報われるんだよ」

「世界は不定なのか」

「そう」

その言葉に彼女は何かを取り戻し、横に座る。

「失敗を糧にしなくてはならないな……」

「次はメイド服で行けば？」

「君は普段そんなのを着ているのか」

「メイド服は彼の」

一瞬、彼女は眉をひそめる。しかし、目の前の少女はどういう人間かを思い出して考えるのをやめた。

彼女を通常概念で捉えようとするのは間違っている。

目の前の少女は人を殺すことが最短なら迷わず殺す人間だ。

事実彼女は。

恋人すら。

「しかし、次はなんていって話そう」

「それよりも次ちゃんと会えるかどうか分かんないんじゃない？」

彼女はその言葉に凜として答えた。手には手帳。

「それは抜かりない！ 彼は計算と観察の結果、明日もあの山を通る！ 帰りもあの道を通る可能性があるっ！」

「……ストーカーだよ」

「ち、違う！ 列記とした統計学だ」

「でも、ずっと草むらか見つめてた。今日までずっと。来ない日も彼女は顔を赤くして視線を落とす。指先を弄り小さく戸惑ったような口ぶりでいった。」

「だ、だって自分がレズビアンかもしれないと悩んでいたし、なんて声をかけていいのか分からなくて、だけど彼の絵が綺麗で、その用は一目惚れだ、と少女は内心笑う。」

「でもあたしが恋したっていったらあんた馬鹿にした」

「……君が恋など非科学的なことをいうとは思っていなかったのだ。君は常に機械に向かって会話しているような人間だった。そんな人間にどうすれば出会いが？ どうすれば恋などという言葉が？ 私はそれこそ最初、機械に恋したのかと思ったよ。そして君に惚れられた男性に心からお悔やみを………ん？」

少女は彼女の言葉を無視して、読書を再開していた。それに首を傾げる彼女。

平坦な口調が彼女の耳に届く。

「もう、服貸してあげないし、服見てあげない。相談も聞かない」

「そ、それは困る！ 私は服らしい服など持っていない！」

「スウェットがあるよ」

「……あれしかないのだ」

しかもパジャマ代わりに使っているようなもの。

少女はいい物件を見つけたのかページの耳を折り、横目で彼女の顔を見る。

じっと見つめられた彼女は汗を流し、ソファに座りながら頭を垂れた。

「……すまなかった。思ったことを直ぐに口にしてしまうのは私の悪い癖だ」

「本当だよ」

「よし、アイスを取ってきてあげよう！ 君は何を食べる？」

彼女は立ち上がり、足早に冷蔵庫まで歩く。冷蔵庫の中には年中いろいろなアイスが入っていた。

少女は雑誌を見つめたままいらなうといった。

「ん、君ほどのジャンクフードマニアがお菓子をいらなうとはどういうことだ？ 風邪でも引いたかい？」

「……“お腹”に悪いから」

そういつて少女は顔を赤くした。

彼女はミルクバーを口に咥えると手で自分を仰ぎつつ、熱い熱いと少女をからかう。

少女はパタンと両手で雑誌を閉じると立ち上がりいった。

「……やっぱ知らない。服も自分で頑張つて」

彼女は泣いた。

三粒

大分時間をロスした。僕はアパートの灰色の階段を登り、目的のドアノブを捻る。

黒い鉄製の扉は難なく開く。玄関に脱ぎ捨てられた運動シューズが目に入った。

「なーんであたしの後にくるかなー」

1LDKの部屋。

黒いショートカットの藤岡さやかさんはソファでのけぞるように僕をみていった。

口には白い棒が付いたキャンディ。黒いタンクトップにブルーのハーフパンツ。

キャンディを口から出してむくれた顔を作る。

「ご、ごめんなさい」

「はやくこっちきてー」

子供のような声で僕を呼ぶ。でも彼女は大学生で僕の施設の院長だ……といっても仮だけど。

僕は靴を脱ぎ、彼女は僕にお茶を入れる為に席を立った。

「そこ座ってて」

自称、百八十センチ未満の彼女はテーブルにお茶を置き、隣に座る。

小中高と陸上部だったらしく体の線は細く、背は平均男性以上に高い。

彼女は口に入れたキャンディを取ると、口を膨らました。

「もー、折角アパートまで借りたのに何で亮平くんいないかなー。あたしが疲れたら亮平くんがいるってのがいいのにー」

「……でも僕、施設で暮らしてるし」

「え、でも昨日はお暇あったでしょー？ 昨日からこれたんじやないの？」

「昨日は」犯されて「ちょっと子供達が」

彼女はこめかみを押さえてうーんと唸る。そして目を開く。

片手のキャンディが部屋の明かりを鈍く反射する。

「もう、いらなから殺しちゃおうか」

「え？」

何を。

殺すって？

「だってあたしは亮ちゃんが欲しくてあの施設、パパに頼んだんだけどさ。もう手に入ったし、正直顔出すのメンドクサイし、丁度いいかなーって。大丈夫、亮平くんはなーんにも心配しなくてもいいよ。うちの若いの、そういうの詳しいから」

そういつて彼女はまた飴を口に戻す。そして嬉しそうに目を細めて、足を子供のようにぶらつかせる。

ぞっとした僕は彼女を見つめ、枯れる喉で答えた。

「そ、そんなことしたら僕はあなたを……嫌になります」

「え、亮ちゃんあたしのこと嫌いになっちゃうの？ 服とか携帯とか買ってたのに？ 施設での待遇だっていいでしょ？ 望むものは何でも与えてあげてるよね？ こうやってアパートも借りたのに、あたしの独りよがりだったかなあ？ 何か不満でもあるの？」

「……元々この付き合いは！」

彼女の一方的なものだった。

僕が誰で、僕の両親が誰だったのかをバラされたくなければ付き合えというふざけたものだった。僕がこの施設を好きになった頃に持ちかけた彼女は本当に意地が悪いと思う。

一度は断った。

次の日、何処かのゴロツキだらけの事務所に拉致された。そこで僕は血反吐を吐きながら彼女に電話をかけ、イエスと答えさせられた。

人を傷つけ慣れている人間の拷問は治りが早い上に確実にその人間の心に傷跡を残すものだ。僕は知った。

彼女は僕をきよとした目で見つめ、次にっこりと笑う。

「なるほどー、これも亮平くんの泣き所なんだねー。えへへ、ひとついい事知っちゃった。おっけー、殺さないよ。でも亮ちゃんあたしを裏切っちゃだめだからね！」

キヤーと一人で小さく盛り上がり、顔を赤く染める。

何だが僕は苛立って、歯を食いしばった。

馬鹿にされたような気がした。僕の大切なものを踏みにじられたような気がした。

「僕はあなたの事は好きでも何でもないっ……！」

そう強くいう。彼女の目は見ず、視線を床に落とす。

それでも彼女はニコニコ微笑んでいた。

「えー、よく聞こえなかったなー。あたしももう年かもしれんねえ、ふがふが。悪いけど亮ちゃんもつかい言ってくれんかのう」

「……好きでも何でもない」

「あんだってえ？」

「あなたの事は好きでも何でもないです！」

今度はしっかりと彼女の目を見る。七福神の恵比寿のように目じりを緩ました彼女はそのまま大きく口を開ける。そしてそのままガキリとキャンディを噛み砕いた。

いつも通りだけど、どこか抑揚のない声で彼女は喋る。

「あたしのこと嫌いな？ そんなわけないよねー？ そうでもいいけど、もしもそうなら今から亮平くんの足先から順々に刻んでって花壇に撒くか、魚の餌するかしないといけないなー。そんで子供たちはポルノビデオに出演だね。まあ、もしもの話だからね。気にしないでいいよー、だけど本当に起りえる未来かも？ それで……亮平くん、なんだって？」

丸くキラキラした瞳が僕を射抜く。どこまでも澄んだ綺麗な瞳。

しかし一方で口は飴を細かく砕いていく。

彼女はボロボロになった白い棒を僕に口移し。生暖かく甘い香りと紙っぽい異物感が口内を覆う。

首を傾げる彼女の視線から逃れる為に僕は視線を落とした。そしてどこか無気力に答える。

どこか分かり切ったような諦めの言葉。

「……………何でもないです」

「そこは好きっていつてほしかったよ。でもまあ、これから好きになってくんだよね。あたしも頑張らないと」

僕の頬をついばみながら、ゆっくりと耳に回る。耳を舌でなぞり、ゆっくり僕をソファに押し倒す。

「髪の毛切った方がいーよー、はむはむ」

耳を執拗になぶり、口の中で転がす。数分で僕の吐息は荒くなり、耳は熱くふやけた。

足を絡ませて彼女は僕と体を重ねる。

「あたしとするセックス、嫌い？　いつもの演技？　だったら悲しいなーあ」

「……………あっ」

彼女は服の上から僕の胸を指で弾き、赤く火照った耳に息を吹きかけた。

僕は腰が砕けそうになり、声を出す。

「んー、その感じてないんだからっ！　って表情がぐっどだね。でも亮ちゃん、セックスそんな嫌いじゃないでしょ？　いつもドバドバ出すし」

「嫌い、です」

彼女はシャツを脱がし、僕の乳首を舐めるとそのままゆっくりとへそまで舌でなぞる。

そしてズボンを脱がした。

「嫌いな、のは……………自分でしょー」

「……………」

乱れた髪の間から見えた時刻は七時丁度だった。

四粒

陽だまりの猫のように彼女は僕に身を寄せた。

髪は乱れ服は何一つ着ていなかった。そして僕も同様に何も着ていない。

「知ってる？ 子供って自分の過去が辛ければ辛いほど明るく振舞うんだって。あの施設の子供達ってなんかそんな感じするよねー」

「何が………いいたいんですか」

「べっつにー」

そういつて彼女は笑う。

傷の舐めあい。互いが互いに苦しくて辛い思いをしてきた。だからそれを誤魔化すようにしている僕らを笑っている。

そう彼女はいう。

それは見せ掛けだと、偽りだと。

「あたしだけが君を知っていて、君だけがあたしを知ってるんだ」

「僕はあなたを知らない」

「あたしがどんな人間かって知ってるだけでいいの。それは意外は意味ないしね」

膝を丸めて僕の胸に耳を当てて、少し強く抱きしめた。彼女の吐息が胸にかかり、少しくすぐったい。

「あなたは僕の何を知ってるんですか？」

「亮平くんは絵が上手でピアノも引けてー、髪が長くて、背が小さくて、性格も顔もあたし好みってことかなー」

顔を起して猫のようにコロコロと笑う。どこからか出したキャンディを頬張り、より嬉しそうに呻く。

僕は嫌がるさやかさんをどかし、服を羽織る。汗臭いだろうけど、気にしない。

あたしも着せてとせがむ彼女を無視してお茶を注いだ。

「今日、お父さんに会うんじゃないかなかったんですか？」

「今日は亮平くんと一緒の日ー」

「この前も同じことやってましたよ」

「えー、じゃあ亮ちゃん一緒についてきてー」

「お断りします」

「こわいんだ」

「……ええ」

齒を見せて微笑む彼女に僕は当たり前だという。

あなたは八時間連続で殴られ続けた経験がないんだ。

さやかさんはめんどくさそうに背を伸ばし、適当に服を出して着た。僕は車の鍵を渡す。

玄関でサンダルを履くと、彼女は少し屈んでキスをした。

「あっ……」

「んじゃー夜にまた会おー！ 本当はデートしたかったけど、無理っぽいから夜はいいっぱいイチャイチャしようね！」

「いってらっしゃい」

「いってきまー」

ボタンと扉は閉められ、空気が停滞する。一息ついた僕はその場で腰を下ろしうずくまった。

「……………うつ」

情けない。

ちよっと凄まじただけで僕は直ぐに意見を変えた。さやかさんがいなくなる今の今まで彼女を恐怖していた。何も抵抗できなかった。心の底まで彼女にひれ伏していた。

それが酷く情けなくて涙が出る。

全てが嫌だ。僕を縛る全てが。全て消えてしまえばいいのに。全てがゼロになってしまえばいいのに。

洗面台まで僕は歩くと顔を洗った。タオルで顔を拭き、鏡を見る。どこかドロっとした目。

冴えない顔だなと笑う。

僕は家を出て、部屋の湿った空気とは違う外の空気を吸った。外はまだどこか静かだ。ぼうっと歩く。

自分の歩調。自分だけの世界。

誰かに合わせていた分だけ、僕は僕の時間を刻む。

解毒のようだと少し笑う。

これが唯一の僕の救いなんだ。

そのままのんびり歩いて山へと向かった。

この時間じゃまだどこの店も開いていない。そういえば絵の具が切れていたからあとで買いに行かないと。

山の頂上には着物を着た女性がいた。深い藍色の着物、足袋に草履。背筋をしっかりと伸ばした、長い髪の少女。

最初はある変な女の子かと思ったけど、どうも違う。髪型こそ似てはいるが顔は真面目で瞳は鋭い。

彼女は僕を一瞥すると前をまた向いた。

通り過ぎようかと迷い、ベンチは二つあるのだと気がつき、彼女の隣のベンチに腰掛けた。

最初は少し気まづかったけど、彼女をいないものとして考えればそうでもない。

「いい天気ですね」

「え、ああ。そうですね」

驚くことに彼女から声をかけてきた。僕は少し、変な汗を出した。

「あなたも見物に？」

「時間が余ってたので」

「時間が余る……そうね、私も時間が余っていたので。ここは景色も空気も素晴らしい」

それには同感だ。僕は頷き、空を眺める。

薄黄色だった空は青く染まり始めている。

「こちらで一緒にませんか？」

彼女は少し首をもたげ、僕に笑みを零した。そういわれて断れる

ほど僕は無神経じゃない。

少し緊張しながら隣に座らせてもらう。

「そんな緊張されなくてもいいですよ。もっと楽になさって下さい」

「あ、ありがとう」

肩の筋肉をほぐし、息を吐く。彼女はそれをみて少し笑った。

互いに特に喋るわけでもなく、ただ時間を消費する空間。どこかまどろんだその空気が僕を落ち着かせ、眠くさせた。

僕は眠気を覚ますために手帳を開き、絵の具と書いて丸で括る。

「あら、絵がお達者なんですね」

「ん、ありがとう」

彼女は僕の手帳を盗み見たのかそのままの姿勢でいった。

僕は少し恥ずかしい気持ちになって手帳を閉じた。

「そこの鳳仙花でしょう？」

「……ええ」

「花がお好きなんですか？」

「いや、自然全般がなんか落ち着くので好きなんです」

「どちらに住んでらっしゃるのかしら？」

「え、あっちの田舎のそこ」

「偶然見かけたにしてはいい目をしてるのね」

「え？　ありがとう……う？」

「この方に決めました。甚六」

そう彼女はいくとベンチを立つ。ぼけーっと見つめている僕に怜悯な笑みを見せた。

彼女の目が動く。

僕の後ろに。

瞬間、僕の顔にビニール袋が被せられ何かが頭を殴打した。

五粒

目の前が青と白にチカチカと歪む。指先のツルツルとした感覚。僕はまだベンチの上にいる。

目の前が真っ白だ。なぜ？

そうだ、これはビニール。

僕は何とかそれを取ろうと頭のそれを掴む。

取れる前にもう一度何かが頭をスイング。

体はバランスを崩して地面に倒れこみ、自分の唾液が白いビニールを汚し、僕の頬を濡らした。

手のひらを小石が削る。

「甚六、壊してはダメよ。加減しなさい」

「はい」

低い声がビニールを通して聞こえる。

と思った矢先に僕の右足は掴まれ、引きずられる。ビニール越しに顔が地面を何度もバウンド。

そして硬い何かがまた僕の頭に追突する。

「あがつ」

僕の顔は地面にめり込み、手足がしびれた。ガラス越しに聞こえるようなピントのずれた声が頭に響く。

「本当に上手な絵。特徴をよく描けているわ」

ビニールは剥される。脱げる途中で赤黒い何かが白いキャンバスにべっとり張り付いてるのが見えた。

藍色の着物の女性は手帳をパラパラと捲る。

渋い顔をした黒服の男は僕に何かを注射する。少しすると体に力が入らなくなった。

男は僕を背負い、立ち上がる。僕はのけぞる形で藍色の彼女と対面。

「私は桐生呉葉^{きりめうくれは}。その大きいのが甚六」

「……………」

僕は声を出そうとして、かすれた声しか出ないことに気がつき断念した。口はだらしがなく開かれ、涎が僕の顔を走る。

桐生と名乗った彼女は僕が喋れないのを分かっているか何も言わない。

「本当にいい目をしてる。自分は世界にとって必要ない存在だと自覚している目ね、それは」

お前に何が分かる。

そう口に出して言いたかった。しかし、声は出ない。

野を下った先には黒塗りのセダン。僕は後ろの席にシートベルトで固定され、目隠しをされる。

恐らく隣に座っているのが桐生という女の子。男は運転席。不味い。

僕は明らかに誘拐されている。

僕を誘拐してどうするんだ？ 身代金なんて望めないというのに。

「あら、何か言っているわ。この子」

彼女は僕の口元に耳を寄せているらしく、柑橘系の香りが漂ってきた。

絡む舌を動かして僕は何とか声を発した。

「あ……あ……み、みのし」

「ああ、別に身代金目当てじゃないから気にしないでいいわよ。私達はただの人攫い。それ以下でもそれ以上でもないの」

はつきりとした声が僕の耳に届けられる。

僕は何とか動こうとするが筋肉が痙攣するだけにとどまり、何も成すことはできなかった。

それじゃ不味いんだ。

僕がここを離れたら、子供が。

子供達が。

「大丈夫ですよ。ここには二度と戻ってはこれないけれど、大人しくしていれば悪くは致しません」

「かつ……はっ」

「あら、震えているのね。甚六、急いであげて」

「はい」

低い声が聞こえ、エンジンが掛かる。そして唐突に車内のラジオが響いた。

ノイズの乗ったザラザラと耳障りな音。

「ラジオなんてつけてたかしら」

「いえ、つけておりません」

そう男がいった瞬間、ラジオのノイズは消えた。

そして響く声。

『横の田を見ろ』

アイマスクをした僕にはそれを見ることは出来ない。しかし音だけは届いた。

直ぐ近くで何かが爆発する音。

車のバックファイヤーのような破裂音。

続いてパラパラと土の破片が天井を叩く音。

『その車にも同様のものが仕掛けられている。一分待つ。その間に男を置いていけ』

「……甚六、直ぐにこの方を降ろしなさい。分が悪いわ」

彼女は間を挟まず、そういう。

「はい」

僕のアイマスクは剥された。フロントガラスに土ぼこりが乗っているが目に入る。

車内にはどこからか伸びたレーザーサイトの赤い光。

「残念ですね、それでは又の機会ということで」

彼女は全然残念そうじゃない顔で僕に微笑む。

僕は甚六という男に担がれ、道路に寝かせられる。空は青々としていて綿菓子のような雲がゆっくりと動いている。

彼女はごきげんようと会釈。直ぐに車の発進する音が聞こえた。

風の音と草木の踊る音を十分ほど楽しんだ僕を髪の毛の長い少女が見下ろす。

片手には銀色のレーザーポインター。背中にグリーンのバックパツク。

「やあやあ、おはようこんにちはこんばんは」

「……………あっあ」

「薬物を打たれているのかな？　メタンフェタミンか、それとも筋弛緩剤かな？」

彼女は僕の瞼を必要以上に開き、何かを観察する。

「本当は君の尿を摂取するのが一番なのだが、それを選択すると後が怖そうなのでね」

それは正解だ。

「ふむ、眼球は正常だね。ということはアセチルコリンを阻害されていると見るのが一番だ。それともフグの刺身でも食べたのかな？」

僕は何とか首を横に動かしてそれを否定する。

「もしかしてそこら辺に生えている五枚葉の奇妙な葉っぱだったり、色鮮やかなキノコを口にしなかったかい？」

強くそれを否定する。

「ダメだ、ダメだ。ダメじゃないか！　この豊かな日本で拾い食いなんて！　君は人としての尊厳が足りていない」

「……………きのは？」

「さっきの？　ああ、単純にどのご家庭にもある普遍的な手榴弾を爆破させたただだよ。ラジオのジャックはそこら辺のもので誰でもできる。さあ、それよりも休もう。ここには二時間に一本あるかどうかという車に引かれかねない」

彼女は僕の体を起こし、引きずった。

僕は何だか呆れて、痙攣する顔で静かに笑った。

六粒

正直、近くのバス停のベンチで事足りたと思うのだけど彼女は律儀に僕を山頂のベンチまで運んでくれた。

僕が動けないのをいいことに彼女は真横に座り、僕を強制的に肩にもたれさせる。

少し喋れるようになった僕は疑問を口にする。

「君……どうやって僕のこと、を？」

「どうやって、どうやってだと？ 愚問だな。私は常に君を空から眺めているのだよ！ しつこく執拗にな！」

彼女はそういつて笑う。

空から眺めてるとはどういう意味だろう。彼女は天使か何かか？
「上からここを覗いていたら君が暴行されているじゃないか。そこで私は友人のリミッターの解除されたスクーターを拝借し、ここまで走ってきて今にいたるわけだ。ちなみに免許はない」

決まったとばかりフッフ和不適に笑う彼女。

アホだ、アホがいる。

そしてアホに助けられた僕。アホ以下だ。

「しかし、彼らは何だね。見たところ堅気の人間ではない。私以外の女性もたぶらかすとは君は浮気性かい？」

「もって何だ……もって」

「おや、なかなか元気になってきたね！ ようし、今から鬼ごっこかくれんぼか蟬取りをしよう！ いや、寧ろ隠れ鬼蟬取りをしよう！」

「……独りでやれ」

「お気に召さないか。ではクイズだクイズ！ 私の着ている下着は何色でしょう？ フッフ、ちなみに私は白以外もっていない！」

よし、分かった。こいつ完璧に変態かつ馬鹿かつアホだ。

「正解者にはキから始まってスで終わるものをプレゼントしよう！」

不正解にはキから始まりスで終わるものをしてもらうがね！ フ
フフフフフ

「アホか」

僕は溜息一つついて、色鮮やかな花々に目を向けた。
指をゆっくりと動かす。しびれているが何とか動く。

今度は目を瞑り、指でベンチを叩く。コツコツというプラスチックを叩く音が僕には鍵盤の調べに聞こえる。

母さんが好きで父さんがよく弾いてくれた曲。この山の中ではこの曲が映える。

「ふむ、久石譲の summer だね。なかなかどうして上手じゃないか。君は多才だね。しかし二回もテンポがずれた。私が人喰いの精神科医なら君の肝臓をソラメと一緒に調理しているところだ」
僕はその言葉に指を止め、彼女をみた。

何故、彼女は曲名を、僕のテンポがずれたことが分かったのか。

僕にはそれが不思議でなかった。

「さっきの所はこうだ。こうだろう？」

彼女は目の前に両手をかざし、目には見えない鍵盤を叩く。

その滑らかな指捌きから正確な音が聞こえたような気がした。

と思ったら鼻歌交じりだった。そら、聞こえるわ。

しかし彼女の演奏は正確だ。弾きなれている僕にそれが分かった。
そのまま両手はどんどん進み、曲はジャズ調のアレンジが加わる。
そして演奏を終えた彼女は僕を見て不適に笑った。

「うむ、この曲は自然の中ではよく映える」

「……すごい」

「ふふふ、私もまた多才なのだ！ ただの美少女ではなく、そこには謎という属性がつくのだよ」

「けどアホだ」

「……今はアホにしか見えなくてもいいかもしれない。しかし、君はいつか私の凄さに驚嘆し失禁した上で私を惚れ直すだろう！」

「既に惚れているという前提なんだ……」

「む、惚れてはいなかったか？ 私はこう見えても自分の容姿と知能が人並み以上だということに自覚的だぞ。むむ、まさか私に惚れるどころか愛してしまっていたのか！ その気持ちは嬉しいがもう少し段階を踏むべきではないかな？ ちなみに私は最初から君がどストライクだ！」

「……ええっと、とりあえず君の名前を聞いてもいいかな？」

「フッフ、残念だが私の名前は教えられない。それに名前など所詮記号だ。それは重要な要素ではない。必要なのは相手を認識することだよ。そう君も思わないかい？」

よく分からない理論に頭が痛くなる。彼女は急に笑顔を崩し思案顔になった。

立ち上がり、目の前をウロウロ。僕は支えをなくし、ベンチに頭を打つ。

彼女は何か思いついたのかにやりと笑い、こちらを振り向く。

「しかし、互いの呼称は必要なのかもしれない。私のことは……：そうだな。うん、坂之上と呼んでくれ！ 私と君との関係を如実に表したい名前だ」

「し、下は？」

「アリスとでも呼びたまえ！」

「どうでも……いいんだ」

「正直名前などとは必要ないと思っているからね。しかし、私は君のことをはっきりきっぱり亮平くんと呼ぶがね」

内心僕は酷く呆れていたけど、同時に彼女のいう言葉を面白いとも思っていた。

「とりあえず、坂之上さん。僕を助けてくれてありがとう」

ゆっくりと手を使い体を起す。そして首を前に首肯した。

まだ体の節々がしびれるが何とか動く。

その僕の言葉に彼女は固まり、顔を赤くした。そしてあたふたとした。

「よよよよよ、よしたまへ。ひ、人にそう頭を下げるべきじゃ

ない。ましてや私なんかには頭を下げるべきではないよ。うん、そうだそうだ。そ、それに“さん”だなんて他人行儀だ」

「だけど……僕は君に救われた。だから君に感謝したい」

顔を赤くしたまま彼女は目を瞑り、僕に両手を広げなにやら呻く。そして強く息を吸うと目を見開いた。

「よ、よし！ では今夜付き合ってくれ！ それでチャラにしよう！」

「何に？」

「詳細はいえない。しかし、君に見せたいものがあるのだ。それに付き合ってくれないか？」

僕にはそれが分かった。多分、星空。

この山で見る星空だろう。

「ここで？」

「そうだ」

坂之上はアホで変態だけど決して危険な人間じゃない。なんとなくだけど僕には分かった。

辛い思いをした僕には、酷い人を見てきた僕にはそれが分かった。だから僕はそれに頷く。

「分かった」

「……やった！ やったやったやったぞ！ 約束、約束だよ約束だ！」

それを聞いた彼女は文字通り、舞い上がった。

ニヤニヤではなくニコニコと微笑み、僕を抱きしめ手を取って踊った。僕はふらつく足でなんとかバランスを取る。

「では早速準備を始めなくてはならない。今夜の十時にここで私は待っているぞ！」

僕は静かに首肯すると彼女は僕の手を離し、森の側にまた駆けた。吹き飛ばされた僕は文句を飲み込み、彼女を追う。

彼女は崖から下に向けてインディージョーンズよろしく滑車を使い、滑り落ちている途中だった。

黒髪の坂之上はロープを滑り、カラカラと音を立てて森の中へと消えていった。

「ちょっと進歩してる！」

坂之上のアホさ加減に僕は静かに驚愕した。

六粒（後書き）

インデュージョーンズにそんなシーンねーぞとか言われたら凄く困ります。

あと投稿遅れて申し訳ありませんでした。

どうか平に……。

http://utu.edoblog.net/

七粒

日が高い。

時間を忘れて少しベンチで休んでいると、いい時間になっていた。僕は一旦町に戻るべく、足を動かし山を降りた。その頃には結構体の方も自由を取り戻していて、気がつけば僕はコンビニに寄ってタマゴサンドを購入していた。

そして年老いた老婆のやっているアンティークショップで絵の具を探す。店内は曇った大きなガラスから入る光のみで薄暗い。

この店は海外の珍しい絵の具や変わった筆なんかを扱っていて重宝させてもらっている。

三つ目用の眼鏡やら女の顎髭、空のビンに入れられた猫の足音という商品や死んだ人形と書かれた精巧なアンティークドールなど明らかにおかしいなものも売っている。（そして奇妙なことにたまに売れていることがある）

僕はアルマデルと英語で書かれた絵の具の棚を見る。奇妙な図形が印刷されたこげ茶色で横長の箱を取り、チェアーに腰掛けている老婆に尋ねた。

「この……ヘタエルの絵の具っていくら？」

「三千二百円」

店のものに値札なんて貼っていない。ゆえに老婆の聞かなければ値段は分からず、彼女のいう値段が絶対なのだ。

しかし、相変わらず高いな。

「この“竜の髭”って筆は？」

何本の毛で作られたわけじゃない、一本の極太の毛で作られた筆を取る。

鼠の尻尾に似た硬そうな外見とは違い、薄いグレーのその毛はふにゃふにゃと柔らかい。

老婆は僕の方を特に見るわけでもなく、抑揚のない声でいった。

「七十五万円」

「……………」

両手を使い、丁寧に僕は棚に戻した。

とりあえず、僕はヘタエルの絵の具に“ただの画用紙”と書かれた画用紙を買うことにした。

隅に座った老婆に直にお金を手渡す。ちなみに包装なんて上等なものはこの店にはない。

そして適当に頭を垂れ、店を出る。ちりんと扉のベルの音。

入れ違いにスーツ姿にガスマスクの男が店内に入っていたが何を買うんだろう。

それからアパートに戻り、さっそく新しい絵の具を試す。

あの店の絵の具は全て同じようで全く違うのだ。鮮やかさや臭い、硬さ、筆の乗り。全てが違う。

青いラベルの貼られた銀色のチューブを取り、キャップを捻ってパレットに取る。

絵の具を水で薄めて、筆をつける。そして画用紙の一番上に真っ直ぐ線を引いた。

淡い蒼色が一直線にムラなく画用紙に浮かぶ。本当の青空のように真っ直ぐ綺麗な色。

心が晴れ渡るような感覚に僕はぞくぞくとした。もう一度筆に絵の具をつけて青い空を描く、そして緑に黒と赤の絵の具を出して草木を描き、白と赤を混ぜて花々を点描のように描く。

気がつけば白いキャンバスの上にはベンチからみたあの山の景色が浮かんでいた。全体にフォーカスをかけたかのように、淡くて儚げ。

だけど僕にはあの山らしいと思った。

そこでぱっと部屋の明かりが灯される。

「暗いよー」

ふと窓の外見れば黒い雲が空を覆い、降り始めた雨が窓をパラパ

ラと叩いていた。

かなりの時間が経っていたらしい。

「またなんか描いてたんだね」

ニコニコと笑いながら彼女は来たときと同じ服で僕の絵を上から覗きこむ。

僕は恥ずかしくなって、その画用紙を隠そうと思ったのだけど、彼女の長く早い手は僕から颯爽と絵を奪い去っていく。

両手でその絵を広げ、彼女という。

「よくできてるねー。あたし昔っから美術はダメだったから羨ましいなー。これ、写实的って奴？」

「……僕の絵は写実ってよりも印象派だと思う」

画風はエドガー・ドガに近い気がするし。彼のように淡いパステル画も楽しそうだな、と思う。

それを聞いた彼女は絵を置くと、首を傾げた。

「んー、印象派ってあのゴッホとかって人の絵？ あの人絵とは全然違うと思うけど？」

「僕はゴッホほど才能はないよ」

彼のように物体の内側にあるエネルギーをそのまま描くような力はない。あんな風に木々の力強さやむき出しのエネルギーを描ける才能があれば僕は一角の人になっているだろう。

ちなみに僕は彼は印象派だと思っていない。

彼女は一度僕の絵を見て、次に僕に視線を這わしていった。

「お母さんの絵とは全然違うんだね」

「……………」

その一言が僕に暗い影を落とす。僕はそれを誤魔化すように筆をバケツに突っ込み、洗う。

汚れた水を流すために洗面台へと立つ。しかし、彼女が僕の前に立って邪魔をした。

「まだ辛いんだね。もう忘れちゃいなよ、両親のことなんて。覚えてても亮平くんを辛くさせるだけだよー。暗い過去なんか覚えてて

もしようがないってー」

「……僕の母さんと父さんは何も悪くない。今でもそう思ってます」
「へえー」

彼女はにこにこ笑い、道を空けた。僕は横を通る。

瞬間、彼女の長い足が僕の前に出される。僕は上手く対応できずに前に転がった。

体を捻りながらフローリングの床に顔を打つ。空中に投げ出されたバケツは僕の頭上を回転し、その水を零す。

「冷たい……」

「アハハハハハハハ」

彼女は僕を指差して笑う。

僕は彼女を少し眺め、直ぐに起き上がってバケツを拾い、筆を持つ。

よくあること。そう自分に言い聞かす。

気分がよくないことがあると彼女はすぐに僕を苛める。そうしてストレスを解消するのだ。

どうせここで文句いっても殴られるのが目に見えている。所詮、

僕は彼女の愛玩動物でしかない。

こうやってただ漠然としたやり場のない苛立ちが日々、僕を内側から侵食していく。

彼女は子供のような笑みで肩を力強く掴むと、指につけた絵の具で僕の唇を赤く塗った。

窓に反射する僕の顔は唇だけが、血を吸ったバラのように赤かった。

八粒

「……山へ行って、そこでのんびりして、コンビニで時間潰して」
「うん、それでー？」

さやかさんは単純に言ってしまうば独占欲が強いのだと思う。

「それから……雑貨屋に行き、ました」

「で、どこにも他の女の子と会う余地はなかったってことー？」

彼女は僕のことを好きとかじゃなくて、自分のものだからと誰にも渡したくないって感覚で束縛するんだと思う。

「は、い」

「じゃー、この髪の毛は誰のなんだろうーね」

片手で一本の髪の毛を持ち上げて、あからさまに不思議そうな顔をする。

僕のお腹の上に乗る、その表情はどこか嬉しそうだ。

彼女の表情を眺めながら、僕はもう片方の、喉を握りつぶそうとする手に堪えた。

それは僕は夕飯が終わり、僕がソファで山下清のエッフェル塔を眺めていた時に起った。

最初は、音楽をイヤフォンで聴いていたせいか彼女が僕の前に立ったことにすら気がつかなかった。

彼女の存在に気がついた僕は前を通り過ぎるものだと思います、少し後ろに体を寄せた。だけど彼女はニコニコとしたまま僕の前から移動しなかった。何だろうと思い、見上げると彼女は僕のジャケットと黒い糸のようなものを持って何かを言っていた。

僕が「え？」というと彼女は僕の髪の毛を掴み、ボーリングの要領で壁に顔をぶつける。衝撃でイヤフォンが取れ、彼女の言葉が始めて耳に入った。

「これ、なーに？」

息は少し荒く、声は震えている。恐れや緊張じゃなくて怒りで震えている。

鼻血をポタポタと零しながら、僕は彼女の言わんとしていることを理解した。

それは髪の毛で、他の女性の髪の毛で、さっきのアレの髪の毛で。彼女は嫉妬してるのか。

何も答ないでいる僕に苛立ったのか、さやかさんはまた僕の顔を壁にぶつけた。二度三度、それは繰り返され、壁に赤い模様を作った。

頭の隅で綺麗だと思った。

さやかさんは握った髪の毛を離すと、その足で僕の溝を力強く蹴り上げた。胃が破けるような、お腹の中がぐるぐる回るような痛み。

「何で何で何で何でかなー」

そして馬乗りになると首を絞めた。

僕は顔が血で膨れ上がるような圧迫感を感じながらも、ぼうつとしていた。

目から涙は出るけど、辛いとは思議と感しない。

部屋に置かれたブラウン管には黒く僕らが写りこむ。僕は自分のぼうつとした顔を見て不思議に思った。

なんで彼は死ぬというのに酷くつまらなそうなんだろう。

もっと笑えばいいのに。

さやかさんはそこで我に返ったのか手の力を緩めた。僕は咽ながら彼女を見る。

そして僕に今日はどこへ行って何をしてきたのか聞いたのが先ほどのこと。

「……ねえ、お金もあげてるし、好きなもの買ってあげてるよね。あたし、顔もいい方だと思う。体の“具合”だって悪くないでしょ？ 君が望めばあたしは何でもするよ」

前髪が邪魔をしていまいち彼女の表情は見る事が出来ない。唯一、隠れていない口元は笑っていない。

僕は真綿で首を絞められるような感覚にただ耐える。

彼女は歯を軋ませて、僕に顔を近づける。

「なのに！　なんで君は……亮平くんは何も望まないの！？　何も拒否しないの！？　あたしはどうしたらいいのかなあ……？」

「こほっ……さ、あ？」

一度空気を吸って僕はいった。

望みなんていうのは心に余裕のある人がすることだ。

両親が死んだ時、僕の望みはなくなった。

そして心の余裕も。

さやかさんは僕の口腔に舌を這わす。強く熱くそれを蠢かせる。

思っている分だけ。

気持ちの分だけ。

強く動かす。

彼女は熱心に僕の舌と交わろうとする。部屋にぴちゃぴちゃと水っぽい音。

だけど僕はただぼうっと彼女を眺め続けた。舌も動かさず、首に回された手も気にしない。

ただ漠然と全てを受け入れる。

彼女は手を離すと髪を掻き上げ、ニコニコ笑いながらいった。

「……亮ちゃんの心の中って空っぽだねー、なーんにもないや。冷たくてスッカスカ」

「そうですか」

「きつとあたしが今ここで君を殺しても、亮平くんはなーんにも思わないでしょー？　つまらないなー」

そういう彼女はソファに座り、黒いリモコンでテレビをつける。

僕はテーブルに置かれたティッシュで鼻血を拭く。

「何か嫌なことでもあったんですか？」

「べつにー。パパが見聞を広めて来いっていった仕事さー、異様に上手くいっちゃってまたいってこいやーみたいな。まあ、さっきのはそれとは別だけどねー」

「そうですか」

頭にコブができているようだ。少し痛い。

僕は立ち上がり、顔を洗おうと洗面台の方へと行く。
そこで声がかかった。

「本気だから」

「え？」

僕は振り向く。彼女はじっとテレビを見たままいう。

「あたし……本気で亮平くんのこと好きだから」

「そう……ですか」

でも僕は誰も好きじゃないんです。好きになれない。
大切なものはいつか消えてしまうから。

それ以降、彼女は何も語らず僕もまた何も語らなかった。

九粒

さやかさんは酒を飲んで一人で酔い潰れ、寝た。

僕はデジタル時計を光らせて時刻を確認する。

十一時。

「……何やってるんだ、僕は」

外は雨。最初こそ小さかったそれも今では地面をバラバラと強く叩くほどになっていた。

坂之上の目的は多分、星空と踏んでいた僕は十時になってもそれを無視した。何故なら外はその時、既に雨が降っていたからだ。

だけど途中で思った。

彼女はちゃんと僕に“星空を見よう”といっただろうか。

屋外で出来ることなんて限られているし、それは雨の日は大抵できないことだ。

だけでもしも……もしも彼女が馬鹿正直にあそこで待っていたら。彼女のあの飛び跳ねるような喜びようを思い出した瞬間、僕は傘を持ってアパートを駆け出していた。

もはや、傘を持っている意味があるのか分からないほどに僕は濡れている。

だけど一心不乱に山へと走る。

体の奥底は熱いのに雨は僕の熱を奪い、寒気を与える。

それでも僕は体に鞭打って走った。

僕の行動によって僕自身が不幸になるのは構わない。

だけど。

僕の行動によって誰かが不幸になるのは嫌だった。

ある意味それは自分勝手なのかもしれない。

だけど僕は強くそう思う。

暗く、大きな山が見えた。

明かりもない山をカンと記憶を頼りに進んでいく。ぬかるんだ泥が何度も僕の足を取り、地面と顔を対面させようとする。

山独特の臭いが雨によって増幅されて、肩で息をする僕の胸をいっばいにさせた。

通常よりも時間をロスしながらも僕はやっとのことで頂上に辿り着く。

屋上では彼女がベンチに座っていた。傘も差さず、ぼうっと町の光りを見ていた。

山頂にあるのはせいぜい、ひとつの頼りない蛍光灯のみ。それに照らされ、彼女は雨に打たれていた。

誰がそうさした？

……僕だ馬鹿野郎っ。

「坂之上！」

彼女は僕を見ると安心したのかニコニコと笑う。気温が思った以上に低いのか、白い息を吐いた。

「遅い、遅いよ。亮平くん……一時間は大遅刻だよ」

「……ごめん」

「もう、来ないかと思った」

「本当にごめん」

「さながら雨に打たれる私は紫陽花だな」

「……僕にこんなこという権利はないんだろうけど、傘ぐらい持つてこいよ」

「さっきから濡れているのは何も持っていないからか！ 興奮していたせいで雨具を持つという選択肢が頭になかった！」

「やっぱり、アホだ」

白い息は気温が低いんじゃないやなくて体温が高かったのか。どんだけ興奮してたんだよコイツ。

僕は近づいて、彼女の頭上に傘を差す。彼女はそれにありがとうと微笑み、髪を絞った。

長い髪から水がドボドボと滴る。

「これからどうするんだ？ この天気じゃ、きっと星は見えない」
「私が何をするのか分かってたのかい？ ふむ、少し残念だね」
「てっきり雨が降ったから中止するんだと……勝手に思ったんだ」
「フフフ、気にすることはない。雨だろうが曇りだろうが、町の光が強かろうが星は常にそこにあり、光は恒久的に地球に降り注いでいるのさ」

「……つまり？」

「私達に雨も曇りも光りも関係ないということだよ！」

「全然分からね」

「つまり星は光で光りはどこにでも溢れているということだ」

「さっぱり分からね」

彼女は立ち上がると僕の手を取った。そして森の方へ連れて行く。そして崖付近まで来ると彼女はポケットから小型のライトを出してなにやら辺りを探った。

太い幹の上の方に巻きつけられた丈夫そうなロープは下の、のっぺりとした暗闇に伸びている。

坂之上は僕の傘を見ると笑みを濃くした。

「亮平くん、傘を貸してくれ！」

「……いいけど、何に使うんだ？」

「うむ、この柄の部分が重要なんだ。滑車を下に置きっぱなしにしてきたからね！」

「………つまり？」

何だろう、何故か無性に嫌な予感がする。

「フフフフ、こういうことさ！」

坂之上はダンスを踊るかのように僕の腰に手を当てて、ビニール傘の柄の部分をロープに引っ掛ける。

彼女が何をしようとしているか察した僕は眼を瞬かせ、半笑いを浮かべた。

冷たい雨が頬を滑る。

「……………嘘だろ？」

体はその答えを知っているのか指先と足がじんわりと痺れ、冷たくなった。

彼女はただ笑い、何も言わずに地面を蹴った。

足から地面が消える感覚。

皮膚の裏側を虫が這うような違和感が全身を網羅した。

僕は彼女に必然的に抱きつかざる負えなかった。そして僕らは傘の重心の関係か、斜めになりながら下に滑っていった。

「うわあああああああああああああああああああ！」

「フフフフフフフフフフフフ！」

傘の柄はゴリゴリと音を立てて、白いプラスチックの粉を頭上に落とす。

雨粒は加速度的に僕と坂之上にバシバシと力強く当たる。目を開けてられない。

薄目を開き、前を見る。下は暗闇で、地面が見えない。そのせいで僕は自分がとてつもなく高い場所にいるような錯覚を覚えた。

「ふむ、不味いな」

「なにがっ!？」

「うん、これは落ち」

る、といった瞬間僕らは途中で落ちた。

摩擦によって柄の部分が焼け落ちたのか、傘が二人の比重に耐え切れなかったのかそれは分からない。

だけど僕らは確実に暗闇の中に落ちていた。

「なっ……あああああああ」

そして枝葉に揉まれ、僕らは地面に体を打つ。結構低い位置まで来ていたらしく痛いことは痛いけど怪我らしい怪我はない。

僕はゼイゼイと息を漏らし、雨と脂汗と泥を手で拭う。

そんな僕を彼女はライトを照らし、笑った。

「はははははは、何だねその死ぬかと思った、みたいな顔は!」

「そう思ってるんだよ!」

「それに泥だらけだ! フフフフフ！」

「お前もな！」

何が面白いのか僕は分からない。だけど彼女も泥だらけで、髪には葉っぱが纏わりついている。

つまり互いに無様な格好だった。

「まあ、怪我がなくて僥倖だね！」

「あれ、僕は結構傷だらけなんだけど……」

「私は無傷だ！ 腰すら打っていない！」

「なんだろう、この不条理」

僕は少し悲しくなった。

傘のなくなった僕らはもう構うことかと開き直り、雨に濡れながらライト片手に進んだ。

坂之上のガイドに従い、山を出る。山のふもとには流線型で、どこか丸い感じのするクリーム色の洒落たスクーターが横付けされていた。

彼女はそれに鍵を差し込み、エンジンをかける。僕は少ししてはつとなる。

「ちょっと待ってくれ、それは一人乗りじゃ……？」

「気のせいさ、気のせいだよ亮平くん！ さあさあレッツゴー！」

彼女はエンジンを吹かしてにやにやと笑う。ノーヘルかよ。

僕は何だか突っ込みを入れるのが馬鹿馬鹿しくなって、黙って後ろの荷台に座った。

この後どうなるか何となく分かってる。

「では行くぞ！」

「ど、どうぞ」

彼女は予想通り、ハンドルを思い切り回した。

十粒

アクセル全開。

フルスロットルの原付はスピードを緩めるどころかどんどん加速していく。

緑に囲まれた田舎道を抜け、公道に出てもそれは変わらない。

雨のためか道路を走る車の数は普段より多い……といっても田舎なのでそれも数える程度でしかない。

僕らは目立つ。だから坂之上は小道に入るものだと思っていたが、彼女はそのまま公道を走る。

ぎゅんぎゅんとスピードを上げて、車を抜いていく。

僕は雨粒が頬を叩くのを薄目で堪え、彼女のか細い胴回りから手を離さずにスピードメーターを覗き見た。

五十キロオーバー。

「気のせいかなー！」

「何がだいっ！」

「原付ってそんなスピード出たっけ!？」

彼女は信号を無視しながら叫ぶ。雨のせいか、スピードの為かはたまたドップラー効果的な何かのせいか、声が聞こえにくい。

「んー、何を言っているか聞こえんなあ！ フフフフ！」

「お前は南斗聖拳の使い手か!？」

また信号無視。

車体が斜めになるような大きなカーブを描きながら交差点を曲がる。そして片側一車線の道に入ると直ぐに曲がり、細い道に入った。スピードを緩めることなく狭い塀の間を駆け抜ける。僕のパーカーが壁に触れ、小さく音を立てた。

「も、もう少しゆっくり！」

「の、反対だね!!」

「なんでそうなるっ！」

彼女は原付でドリフト走行しながら角を飛び出した。

暫く真っ直ぐ走ると、急ブレーキを掛けた。

僕の顔面は彼女の長い髪に衝突し、鼻を痛める。少し涙が出た。

「今度は何だよ！」

「何、何ってそれは。ついたのさ、目的地に！」

そういつて彼女は原付から降りると振り向いた。雨で重くなった髪が鞭のようになる。

コントロールを失ったハンドルを僕は慌てて掴み、エンジンを切る。

そしてマンションを見上げた。茶色のレンガ調の大きなそれ。

原付など眼中にない坂之上はバシャバシャと水溜りを横断し、自動ドアを潜った。

僕はどうしようと迷い、とりあえず近場の自転車置き場にそれを止めた。

盗まれても僕はしらん。

妖怪水被りお化けとなった僕らはホールの大理石の床の上に水滴を零しまくり、滑りやすくするという作業を足早に切り上げ進む。

ふにゃふにゃした手で彼女は僕の手を引き、認証が必要なホールを抜け、奥へと引っ張った。明るかったホールとは裏腹に向こう側は明かりが弱く、少し暗い。

滑り止めも兼ねているゴツゴツした床の第二次ホールを抜け、僕らはエレベーターに乗る。

その時も僕らは手を繋いでいた。

少し手を離そうか迷う。

だけど彼女の手は僕をガッチリとホールドしていて離せそうになり。自分から言い出すのも変に意識しているようで恥ずかしいのでそのままにした。

そうこうしている間に最上階の五階に着く。彼女は無言で僕を引っ張り、黒よりのグレーの扉を潜る。

「普段、鍵とかかけてないのか？」

「私に守るものは何もないっ！」

「わー、かっけー」

棒読みの僕。

彼女はリヴィングまで僕を引っ張ると一端手を離し、何処かに向かった。

僕はその間、部屋を眺める。インテリアは白と黒を基調としているようで悪くない。ぱっと部屋を眺めただけで、彼女がどういう人間かわかったような気がした。

合理的で、何不自由なく暮らしている。

足りないのは愛。

彼女は白いバスタオルを持ってくると僕に渡す。

「良平君、君は風呂に入っているといい！ その間に私は服を乾かしておいてあげよう！」

「坂之上って意外にリッチな家なんだね」

「んん？ ここは私の家じゃないよ。ここは私の友人の部屋だ。そしてその本人は今、失語症で夜驚症の彼を連れて北海道に旅行中だ。歩くことのできる植物人間を連れて何が面白いのか、私は理解に苦しむね。しかし、それが彼女なりの愛なのだろう」

「なんだそれ。っていうか家使わせてくれるって凄いな」

「彼女はリッチだからね！ どのくらいリッチかというと、食べたいものがあるからといってその日にヘリで現地まで行くような人間さ。いつか彼女は宇宙に行くと思っているんだがどうだろう？」

「勝手に行ってくれ」

彼女は僕を風呂場に案内するとドアを閉めた。

僕は溜息をつき、服を脱ごうとして……止まった。

「何で坂之上もこっちにいるんだ？」

「私も入るからさ！ 寒いよ、早く入ろうっ！」

軽く脳天にチョップして僕は彼女を追い出した。

扉の向こう側で笑うような声が聞こえる。

「冗談さ、冗談じゃないか、冗談だよ！　なあ、本当に私も寒いのだよ。ここを開けてくれ！　せめて先っちょだけでも！」

「……最後のはどういう意味だよ」

「フフフ、どういう意味だと思う？」

「……………」

僕は彼女を無視して、服を脱ぐと風呂場に入った。

十一粒

風呂場は予想以上に広く、資本主義という言葉が体現しているように思った。つまり豪華でデカイとしか言いようがない。

湯船にはお湯が張られている。しかも温泉の素入りらしく、白く濁っていた。

お湯が張られているということは全て想定内だったのだろうか。ガタリと音。

磨りガラスの扉の向こうで坂之上が僕の衣服を洗濯機に放り込んでいるようだ。

「湯加減はどうだい？」

「いや、まだ浸かってないけど……随分と手回しがいいんだね」

「ふむ、随分と警戒しているようだね。それは単純に帰ったら風呂に入ろうと思ってセットしておいただけだよ。最初から家に連れ込んでどうしようなんて………思っていないさ」

「なんで少し言葉につまったんだ？」

しかも、後半声が小さい。

カチャカチャと何か金属的な音がする。そしてくしゅんと可愛らしいくしゃみ。

「さささささ、寒いよ。やはり」

「直ぐに出るからもう少し待ってくれ」

よく考えれば坂之上はバイクの前について、僕よりも濡れていたはずだ。寒くないわけがない。

シャワーで軽く流して、直ぐに出ようと思い、シャワーの蛇口を捻る。

最初は冷たい水が出てくるのかと一瞬身構えたけど、最初から暖かいお湯が出てきた。僥倖だ。

「いやいや、もっと効率的に行こうじゃないか。時間は有限だよ、亮平君」

その言葉が終わると同時にガキッと音がして坂之上がニコニコしながら現れた。

僕は風呂場の鏡に映ったその顔とかち合い、啞然とする。

鍵かけたよな……？

彼女はその凹凸の少ない体を紺色のスクール水着で包み、笑っている。

「一緒に入った方が合理的だと思わないかね！」

「思うわけないだろ……」

「ふむ、男性の裸体を見慣れているわけではないが、これはうん。亮平君、なかなか業物だね！」

「死んでしまえっ！」

セクハラだ。

「恥じることはない。誇り、胸を張れ！ いや、張るのは腰……ふぎゃっ！」

僕は風呂桶にお湯を入れて彼女の顔面にぶっかけた。そしてその間に風呂に飛び込む。

正直、そのまま上がればよかったと後悔した。

「フッフ、既にプレイは始まっているのだね！ そのサディストっぷり、なかなかだよ。私は自分をマゾヒストだとは思ったことはなかったのだけど、君には暴力を求めているように見えるのだね！」

ならば、甘んじて受け入れよう。さあ、存分に調教開発なんでもしたまえ！」

「ふう……」

いい湯だ。

腰に手を当てて高らかに宣言した彼女はわざとらしく咳をついて僕に流し目を与える。

僕はそれを無視して体がじんわりほぐされていく温かみに顔がだらしく緩ませた。

彼女はむうっと唸ると飛び込みの姿勢を作り、浴槽に飛び込んだ。ざばんと小さな高波。

僕の髪は濡れ鼠のようになる。

「ぷはっ！ 坂之上、君は……何がしたいんだ！」

「さあ、私にも全く持って分からないね」

彼女はにっと笑いながら白い湯から顔を出した。まるで水木しげるの描く海坊主のようだ。

僕は溜息をつきながら、体をお湯で温める。彼女も僕の隣に座ると顔を緩ませて、のんびりと顔を綻ばせた。

「ふひー、やはり風呂はいいね。芯から癒される」

「それには同感。だけどいいのか？」

「んん、何がだい？ 私の流麗なる肢体を舐め回すように見ていることかい？ 構わずそのまま見たまえ！」

「変な既成事実を作るな。……星空のことだよ。こんなところで温まっけてもいいのかって」

今も雨は降っているだろう。星空は到底望めそうもない。

彼女はニコニコ笑いながら長い髪を掻き上げる。

「なあに、君はゆっくり湯に浸かって私の美貌とナイスなボディに酔いしれてればいいのだよ」

「……ん？ あ、男みたいなのその平べったい体のこと？」

ぴしり、とどこかにヒビが入ったような音がした。

彼女は立ち上がる。

「フフフフフフフ、亮平君。ならばその身をもって知るといい！ 私の美しさをっ！」

「は？ ……ってうわっ」

そしてそのまま僕に向かってダイブした。そのまま抱きつき、体を密着させる。

彼女を振りほどこうとすると、バランスが崩れてお湯が顔面に浸る。バランスを取ろうとすると彼女が体を密着させてくる。

「はなっ……がぼ」

「フフフフフフ！」

そんなことを十数秒ほど続けていたら、不意に坂之上は離れ、立

ち上がる。

僕はぜいぜいと息を切らしながらその顔を睨んだ。
鼻血を出していた。

「ど、どうした？ 何処かにぶつかったりしたのか？」

彼女は少年漫画のキャラクターのように親指で拭うとペロリとそれを舐めた。そして高らかに言った。

「うん、抱きついていたら何だか興奮してしまった！」

「おっぴろげにいうことじゃないっ！」

「稀にみる正直者と呼びたまえ」

「稀に見る頭の悪さと呼ぼう」

坂之上は浴槽から上がると腰に手を当てて不適に笑う。鼻血が出ているせいで全く締りのないポーズだ。

「このまま戯れてしまつては私は私自身のリビドーを抑えきれない。故に私は一足先に風呂を上がらせてもらおう」

「そうしてくれると助かる」

「うむ、ではお先に失礼っ！」

シュタッと敬礼し、彼女は風呂場から出ていった。僕は溜息をつき、少ししてから風呂場から上がった。

風呂の扉を開ける。

計ったように乾燥機はチープな音を立てて止まった。

十二粒

体を乾かし、元の服を着る。服は完全に乾ききっていないようで、若干まだ湿っていた。

僕はリヴィングに戻る。

「……………坂之上？」

真っ暗だった。

窓もしっかりと遮光されているらしく、暗いというよりは何も見えなかった。

ただひたすらに雨が地面を叩く音だけが部屋に響き渡る。

漆黒の闇の中、僕は手探りで壁のスイッチを探す。

不意に、風呂場の明かりが消えた。

停電か？

いや、そんなわけではないだろう。

鼓動が高鳴り、嫌な感覚が背筋を伝う。

まさか、坂之上は僕をどうにかしてやろうと思っていたのではという感覚。

フローリングをヒタヒタと歩く音。

「じょ、冗談は止めてくれ。心臓に悪い」

「フ…………フフフフフ」

何処からともなく声が響く。壁に反響し、位置がつかめない。自分のいる場所すら分からなくなっていく。

値踏みするように何かが僕の周りを蠢いた。

「…………私が今から、何をするか分かるかい？ 君には想像できるかい？ いや、賢い君なら答えに直ぐたどり着くだろうね。フフフフ」

「…………嘘だろ？」

馬鹿だけといい奴だっと思っていた。

馬鹿だけど面白い奴だっって。

馬鹿だけど友達だつて。

僕の体から何かガスのように抜けて、色あせた別のものになる。それは感情、あるいは信頼と呼ばれるもの。

結局、僕は裏切られる運命にあるんだと決定的な何かを僕を穿つ。

「うっ」

何かが覆い被さり、僕は仰向けに倒れる。

「はあはあ……」

「……………」

僕の目の前には坂之上。

暗く、その姿は見えないけれど、その頬に掛かる熱い吐息と圧迫感が彼女の存在を教えてくれる。

彼女は僕の顔の左右に両手をつき、じっと見下ろすようにしているようだ。

足が僕の足と絡まり、柔らかい重みが僕の半身に掛かる

「正直にいう、すまない」

「何を……するんだ？」

「凄いことをするのさ」

彼女は片手でゆっくりと僕の体を弄った。僕は暗闇から襲い来る刺激に羞恥心を煽られ、下唇を噛んだ。

「あっ……」

「ご、ごめんすまない許してくれ」

「……いいよ、もう」

君の気が済むなら、もうそれでも。

助けてもらったお礼だと思えば、あるいは……。

「こ、ここじゃないね。ど、どこら辺だろう」

彼女はゆっくりと服の上からペタペタと体を探る。胸元から始まったそれはだんだんと腹部に下がり、最後は太ももに掛かる。

温泉の素の柔らかい香りが鼻をかすめる。

彼女の手はゆっくりとした手つきで僕の内ももにたどり着いた。

「おー、あったあった！」

明るい声で彼女はそういうと立ち上がった。重みから解放され、体が軽くなる。

そして次の瞬間、白い光りの線が放たれ、天井や壁に星空が浮かんだ。

「はっはっは、どうだね！ この家庭用プラネタリウムは！ いやあ、風呂場の電気を消して直ぐにこれをつけようと思ったのだけど、暗いせいで君の位置どこるか自分の位置すらつかめなくてね。君と衝突してしまうし、リモコンを落としてしまうし、一体どうなることかと思ったよ！」

「んん？ 無論勿論リモコンを探していたのだよ！」

「ど、どうしたんだい？ 怖いよ、亮平君」

僕は何か恥ずかしさと自身の馬鹿らしさに笑いが零れた。そのまま僕は笑い、彼女の頭にチョップを喰らわす。

そうやって誤魔化さないと僕は自分の醜悪さに押しつぶされてしまうから。

「いた、痛い、痛いよ、亮平君。私の偉大なる英知のつまった頭を殴るとはどういう見だい？　はっ、まさかこれは既に調教が始まっているというのか？　気持ちには嬉しいが今はこの星空を眺めようじゃないか。つ、続きは後からでもいいのだろう？　え、今だけかい？　うーむ、ならば私も女だ。脱ごうっ！」

「んん？　やはりベツトの方がよかったかい？　ならば寢室に行こう！　実地経験はないが、なあにそこは知力と知識でカバーしてみせる！」

「いや、そうじゃなくて……ごめん」

「ごめん？ ごめんとは何を指しているだね？ まさか、私の知らないハードなプレイを要求するつもりか！？ ううむ、いやしかし……うーん」

だんだん目が慣れてきたのか、はては部屋の中心に置かれたプラネタリウムの光りのせいとか、彼女の顔が薄暗闇に浮かんでいる。

その顔はあたふたと忙しく動き、どうしていいか分からないといった感じだ。僕はその顔を見てまた笑う。

「僕、暗闇になった時、君に押し倒された時にそのまま何かされると思ったんだ。君を信じれなかった。心のどこかで君はそういうことをする人間だと思っていたんだ。僕は君を侮辱した」

彼女はあたふたした顔を止めると僕の顔を不思議そうな目で見た。

「別にそれは構わないが……君は、これまで一体――」

坂之上はそこで言いよどみ、口を閉じた。

ゆっくりと目を閉じ、また開く。

「ん？」

「いや、何でもない。何でもないさ。それよりも星を見よう」

何を言いかけたのか僕には分かっている。

――君はこれまで一体どんな人生を送ってきたんだ。

それはそうか。

暗闇になって自分が犯されると思うような人間はそういう経験があるものとして考えるのが普通だ。

普通の人間はそんなこと思わないし、そんなことを言わない。

いや、それ以前の話か。

「坂之上」

最後まで言い切らなかった彼女の優しさに僕の目頭が少し熱くなる。

優しくされたのはいつぶりだろう。

子供達を除けば本当に久しぶりかもしれない。

「んん、なんだい？」

「その……。ありがとう」

振り向いた彼女は、僕の顔を数秒ほどぼうつと見つめ、暗闇の中でも分かるくらい赤く顔を染めた。

十三粒

来た時にあったリヴィングの黒いソファや白いテーブル等の家具は片付けられているようだった。

僕らは床の上に直接寝そべり、天井を仰ぐ。

人工の星明り。

だけど僕らには今はそれが本物で。

そして何より美しかった。

「本当に星空を見せてくれるとは思わなかった」

「フッフ、私は常に有限実行を信念にしているのだよ。できないことは曖昧な返答しか返さないっ！」

「……それは性質が悪いなあ」

そんな下らない会話を交えながら、彼女はレーザーポインターで天井や壁に映し出された星座を指し、語る。

主にそれは神話の話。

日本ではあまり知られていない星座や、それまつわる話を彼女は楽しそうに教えてくれた。

「……という話がある。気になることにこれと似たような話は各国にあって、アミニズムの観点から見ても大変興味深い。私はこれにユングの提唱した集合的無意識というものを感じざるを得ないのだ」

「へえ」

僕は横を向き、薄暗闇で彼女を見つめた。すると彼女も僕の視線に気がつき頬を赤くする。

次第に言葉は少し濁り始め、瞬きは増える。瞳は天井と僕の顔を忙しなく行き来した。

彼女は説明を止め、僕に向き直す。

「な、なあ」

「ん？」

「そ、そんなに見つめられたら私は恥ずかしいよ」

「……他の事は恥ずかしくないのにこれは恥ずかしいんだ」

僕は少し吹き出して笑う。彼女は暗い中、腕を組み言った。

「私にだって人並み程度の羞恥心くらいは持ち合わせているさ」

「じゃあ、何でエキセントリックな行動ばかりするんだ？」

「何をもって風変わりとするのか分からないが、思うに私は理性を開放することで勇気と同等の力を得ているのだよ」

「つまり？」

「つまり、つまりはね。そのままの自分では何も成すことができない。その起る出来事に対処できない。だからこそ理性を捨て、思考を止める。そうすることで勇気のない私であっても勇気があるように振舞えるからだ」

そう高らかに宣言し、彼女はうんうんと自分に頷く。長い髪がそれに合わせて小さく揺れた。

黙りこくる僕に彼女は閉じた片目を開き、首を傾げる。

「……どうしたね。少し分かりにくい話だったかな。私の話は小難しいとよく言われるし、私も幾分かは自覚的で気をつけてはいるんだが……すまない。ああ、今ばかりは自分の知能の高さが恨めしいよ！」

そういつて彼女は自分の頭を鷲掴みにすると左右に首を振った。

僕はそれを好奇心な目で見つめながら静かに笑う。

「いや、言ってること凄くよく分かるよ……」
だって。

それは。

僕そのものだから。

心を潰して。

意思を、感覚を、嫌悪を。

全てを潰して僕は苦痛に耐える。

それを苦痛だという認識を放棄して僕は耐える。

天を睨み、自分を恨み、誰彼構わず憎む。

それはある意味、現実を見ない行為。

だけど、そうでもしないと僕の心はガラスのように砕け散ってしまう。

もしも、坂之上が僕のことを知ったらどう思うだろうか。

彼女は蔑んだりはしない。それだけは分かる。

では笑って受け入れてくれるだろうか。

それとも泣いて悲しんでくれるだろうか。

あるいは声を上げて怒り狂ってくれるのか。

彼女は僕という歪みに対してどう当てはまってくれるだろう、と。

「……坂之上、君は知ってるかな」

「んん、何が何を何だね？」

僕がオカマ掘られてて、女性に飼われていて、家族は蔑まれて大罪人と言われているってことだよ。

「世の中は平等じゃないんだ。不幸な人がいる一方で、幸福な人間がいる。悠々自適に暮らしている悪人もいれば、貧困のせいで今まさに命が燃え尽きようとしている善人もいる。世の中は……平等じゃないんだ」

嫌でも、意識を閉じていても体は刺激に反応する。

変な薬を使われれば、それは嫌でも分からされる。

不幸からは決して逃れられないんだって。

見せ掛けの壁は酷く脆いんだって。

「ふむ、誰がその幸福や不幸の物差しを計るんだい？ 誰が不幸だと幸福だと判断する？ 幸福に際限がないように不幸もまた際限がないのだよ」

「……つまり？」

「つまり、つまりね。人は不幸であり幸福なんだ。不幸だけであり続けることはできないように、幸福もまた幸福のみで存在し得ない。そういう意味では人は平等だよ、良平君」

「じゃあ！」

言葉を荒げる僕に彼女はびくりと体を跳ねさせた。僕はそれにはっとして言葉を落ち着ける。

「……じゃあ、不幸な人間はどうすればいいんだろう。今、自分が不幸だと思っている人は。不幸で幸福、幸福で不幸という言葉で自分を誤魔化せばいいのか？ そうじゃない、不幸は不幸なんだ。そういう人間はどうすればいいと思う？」

「私ならその不幸から抜け出せる道を模索する」

「例えば？」

「例えば、例えばね。信頼たる人物に不幸であることを告げてみる、とか……」

そういつて彼女は僕をちらりと見た。

「あ……」

「んん、どうしたね？」

「あの……」

あのね、ぼく。

ほんとはいやなんだ。

さみしいんだ、つらいんだ、なきたいんだ、かなしいんだ。

「実はさ……僕」

にげてもにげても過去はぼくを追いかけてくる。

“君のお父さんとお母さんは人殺しだ” って。

「良平君が？」

「うん、ぼくね」

大人の人はたすけてくれるところかぼくに酷いことをするんだ。

よわい人間はつよい人間に従うしかない。

それはわかってる。

だけど助けてほしい。

「絵を……描くんだ」

助けてほしいけど……君にそんなこと言えない。

でも、助けてほしい。

気がついてほしい。

なんというエゴ。

なんという甘え。

他人任せ、自分からは何もしようとしない。
何もできない。

「知っているよ」

「そうだったね、知ってるよね。変だな僕」
気づいてくれるはずがない。

そうあってほしくないけど、それが現実。

「変だ、変だよ。それとも自分の才能の自慢かね？　ならば私は私の百の才能を君に披露してあげよう！」

「いいよ、頭痛くなりそうだし」

「一つ目はね、読心術さ！」

「超能力か何か？　初っ端から斜め上な辺り、坂之上っぽいね」

目前に広がる夜空の瞬きまたたの中、彼女は僕の微笑みに合わせて微笑んだ。

そして優しく言った。

「それで、本当に言いたいことはなんだい？」
僕の体に電気が走った。

十四粒

「え？」

間の抜けた僕の言葉に彼女は微笑む。

「言ったら？ 才能を披露するって」

「でも……」

「今言うべきことは“でも”から始まる言葉なのかい？ 違う、違うだろう。それで、君は私に何を話したいんだい？」

「ぼ、僕は」

「亮平君は？」

だんだん薄暗闇は黒い漆黒に戻っていく。そんな気がした。

星の光は消え、闇の中に僕一人だけのような孤独。天から響く声が僕に言葉を施させる。

「君は……何が苦しくて、悲しかったんだい？ 自分のこと？ それとも他人のこと？」

「す、べて」

「そう。では最初……きっかけはいつから？ それはいつから思うようになったんだい？ いつから他人を恐れるようになったんだい？」

その緩やかな調べは僕の体を削り取る。僕は耐え難い不安に膝を抱えて、爪を噛んだ。沈黙は絶え間なく僕に注がれ、焦燥に駆らせる。

「さい、しよは……最初はおとうさんとおかあさんがテレビで人殺しだって言われて、近所の優しかった人もみんな僕らを嫌うようになって、家にいろんな人が押しかけるようになって」

「何故、君のお父さんとお母さんはそう言われるようになったんだい？」

「おとうさんが駅前でコンサート開くから、それを見に着た人があの事件でいっぱい死んじゃったんだ。おかあさんの絵を見に来た人

も死んじやった」

某過激派グループの毒ガス事件。学校や駅前、病院が被害にあったというアレ。

最悪なことにあの日、僕のお父さんのピアノコンサートがあった。その日に合わせて母さんの絵の展覧会もあった。それを見に沢山の人がその町に集まっていた。

更に最悪なことに父さんと母さんはいち早く異変を知らされて生きている。だけどコンサートに来た人、絵を見に来た人はそんなことを露ほども知らなくて、苦しんで死んだ。

そのせいで心無い人、やり場の無い怒りを持った人々は僕らをバツシングした。

最初は小さかったその騒ぎもセンセーショナルなものとして次第に大きなものになり、僕は学校に行けないような事態にまで発展した。

それを僕はゆっくりと語る。

「絶え間ない嫌がらせにお父さんとお母さんはノイローゼになった。それで、両親は冷たくなったのかい？　酷いことをするようになったのかい？」

「おとうさんもおかあさんもつらそうだったけどずっと優しかった。けど、ある日……」

二人は交通事故で死んだ。車で崖に向かって落ちて死んだ。苦しむ暇もなかったらしい。

「自殺だったのかい？」

「分かんないけど、ぼくは事故だとおもってる」

「そう。それで君の家への嫌がらせはなくなったんだろう？」

「うん」
だけどやはりどこかで僕は蔑まされた。父さんも母さんも親戚とは絶縁状態にあって、僕は独りぼっちになった。

否応なしに施設暮らしになった。
そこで僕は苛められた。

常に誰かに。

「それは、何故だと思う？」

「施設の子……おとうさんとおかあさんを見にいつて親が死んだ人が少なくなかったんだ」

「だから施設を転々とせざるを得なかったんだね」

「うん」

「だから今でも他人が怖くてしかたがないんだね」

「うん」

他人に知られることが怖い。

たったひとつの出来事を知ったがために人は大きく変わってしま
う。

優しかった人々は牙を向き、罵倒する恐ろしい何かに変わってしま
まう。

天使が悪魔に。

神の子がただの人に。

親友が敵に。

友達が鬼に。

「怖いから、そうやって震えるのかい？」

「うん」

「怖いから何をされても耐えることを選んだのかい？」

「うん」

「耐えることで君の何かは変わったかい？」

その言葉に僕の中の何かがガラリと音を立てて崩れる。

何も変わってない。

悪くなるばかり。

「何か、変わったかい？」

「何も変わってない……。みんなぼくに酷いことをする」

「だから怖い？」

「うん」

「だから君は何もすることできない、何も変えることのできない自

分が憎いんだ」

暖かくて柔らかい何かが僕を後ろからぎゅっと包み込む。それは優しい香りがした。

耳元でそれは優しく囁く。

「何も変わらないくらいなら、抗え。抗って抗って抗って、それでもダメなら絶望すればいい。泣くのも許す。だけどその後はもう一度立ち上がって走り続けるんだ。何かを掴むまでひたすらにがむしゃらに」

「何かって？」

僕は彼女の腕を掴む。

「何かは何かさ。誰も知らない。知っているのは未来の君だけだ」

「きつとどこかでぼくは挫折する」

「その時は私がその都度、君をこうやって抱きしめて支えてあげよう」

そういつて彼女は笑った。猫のように喉を鳴らしながら。

不適に、楽しそうに。

彼女が言っている言葉はただの根性論だ。スポコンだ。

だけど僕はその言葉にじんと胸が熱くなった。

胸の奥が熱くて何故だか前が見えなくなった。

十五粒

「坂之上らしくないよ」

「らしくないかね？」

「君はそんなにかっこいいキャラじゃない」

「君も泣いているよりかは笑ったほうが君らしいと思うよ」

「そうかな」

「そうだよ」

彼女は僕を抱きしめながら、僕の髪を撫で付ける。

僕と大して変わらない身長のはずの彼女が凄く大きいように感じられた。

それはまるで母親のような。

「あまり……星の話聞けなかった」

「なあに、話なんていつだってできるさ。星空を眺めるのだっていつだってできるさ。話をしたければここに来ればいい。私はいつでもここにいる。星を見なければ空を眺めればいい。星空は常にそこにある」

「明るい時、見たって星なんか分かんないよ」

「それは、それはね。太陽の光が強すぎて見えないだけなのさ。本当は星ずっとそこで光り、輝き続けているのだ」

「……なんかずるいな、その言い方」

「発想の転換さ」

僕は鼻水をずると啜ると立ち上がる。

「そろそろ帰らなきゃ」

「もう十二時か。送っていこう」

「服、折角乾かしたのにまた濡らすのはごめんだ。それに僕も一応男だ、一人で帰れる」

「そうだね、シンデレラだって一人で帰ったんだ。君だって一人で帰れるな」

彼女は暗闇の中、何かを操作した。直後、部屋の明かりがつく。部屋の中央には黒く丸いプラネタリウムの機械。部屋の隅にはテーブルや椅子が移動させられていた。

とりあえず泣き顔を見られるのが嫌なので彼女に背を向ける。

「じゃあ君は王子様？ それとも魔法使い？」

「私はガラスの靴さ。灰被りに幸せを運ぶ、虹色に輝くガラスの靴」
彼女は喉を鳴らしながらそういった。

「捻くれた答えだね」

「意外性があるといってほしいね」

そのまま僕らはリヴィングを出て、廊下を通り玄関にたどり着く。
僕は濡れて重くなったスニーカーを履いた。やはり冷たい。

傘は彼女から借りる。

「また明日」

「んん、明日も会ってくれるのかい？」

意外そうな顔で彼女は目を丸くした。

女の前で泣いた男が次も会う勇気があることに驚いたのか、僕と
いう人間が自発的に会おうとしていることに驚いたのかは分からない。
い。

ただ彼女は心底不思議そうな顔で僕を凝視した。

「だって傘、返さないと……いけないじゃん」

「そう、だね」

「じゃあ山でまた会おうよ」

「ああ、約束だ」

「うん、約束」

僕は手を彼女に差し出す。彼女は一瞬、ぼかんとしたが直ぐに動
いた。

激しく上下に動かす握手を交わす。手首が少し痛むような、そん
な握手。

そこで僕は彼女の手を引く。髪の毛が空中でふわりと膨らみ、彼
女は大きくバランスを崩した。

「なっ……良平君。なん——」

そしてそのまま坂之上は僕に抱きつく。僕は小さくいう。

「ありがとう。本当にありがとう」

今度は僕から強く彼女を抱きしめる。

華奢で、細くて軽い彼女の体を抱きしめる。

それが僕にできる精一杯の感謝。

何にもない僕にできる唯一のこと。

「くくくく、くすぐったいよ。それに感謝だなんてそんなそんな」

「とにかくありがとう」

僕も何だか恥ずかしくなって直ぐに離れた。そして彼女の顔を見ず、ノブに手をかける。

「亮平君、またっ！」

「うん」

ちらりとみた彼女の顔は真っ赤に染まっていて、齒がゆそうな笑みが張り付いていた。

マンションを出る。

外は真っ暗だ。大粒の雨は見る影もなく、今はもう霧のような薄い雨が降るのみだった。

彼女から借りた丈夫そうなモスグリーンの傘を差しながら、僕は夜道を歩いた。

ここがどこか分からなくても、大丈夫。大きな山を目指して歩けばいい。そうすればそのうち知っている道に出られる。

人気のない交差点で律儀に僕は信号を待つ。そして青信号を渡る。これからさやかさんのアパートに行つて、玄関に置いた絵の具を回収したらそのまま施設に帰って……。

「明日か……」

明日どんな顔して会えばいいんだろう。

今更だけど凄く恥ずかしい。

女性の前で泣いたこともそうだし、心情を吐露したこともそうだ。

もつといえ最後のアレもかなりの赤面ものだ。

僕はどうしてしまったんだろう。馬鹿になったのか。自暴自棄になったのか。

それとも彼女に……。

「明日……」

「明日がどーしたの？」

声に僕は振り向く。

横断歩道を過ぎばかりのうらびれた商店街。全てシャッターが閉じていて、白い光りが少し幻想的だった。

そこにいたのは長身の彼女。全身濡れ鼠になったさやかさん。

「あ、あ……の」

「置手紙みたよ、施設帰るんだよねー？　これ絵の具セット、家の前に置きっぱなしだったよー」

僕はそれをおずおずと受け取ろうと手を出す。心臓の鼓動が痛い。何で彼女はこんなところに？　いや、なんで濡れているんだ？　まさかつけられてたのだろうか。

僕が絵の具の入った茶色いケースに触れる一歩手前でそれは消えた。

ブンと空気を躍動させてケースは僕の顔を殴打。

「あがっ……」

僕は物理の法則に従い、横に吹き飛ぶ。歩道から足を踏み外し、道路の水溜りに手をつく。泥水が跳ねて、顔が汚れた。

鼓膜の中に水が入り、嫌な感覚。

ニコニコと彼女は笑いながら近づく。

「あたし、好きっていったよねー」

「……………」

「それなのに……なんでかなー？　何で、君は、あたしのこと好きでいてくれないのかなー」

彼女は屈むと僕の胸倉を掴み、前後にゆする。脳と視界が不規則にシェイクされ気分が悪くなる。

「憎いんじゃないよー、これ。いうなれば嫉妬だよ。好きすぎて好きすぎて好きすぎて、悔しい。分かんないかなー」

「……………」

「まあ、いつか。アレ、誰？」

僕は一度瞬きをして息を整えた。そして震える声でいう。

「し……知らない」

「よかった。じゃー彼女さらって犯して殺してもなーんも問題ないねー。亮ちんの友達とかだったら問題だもんねー。まあ、それはそれで面白そうなんだけどさー」

そういつてニコニコ笑う。さらっと恐ろしいことをいつて笑う。

全て分かっていて、理解していて僕にいう。

僕はそれに対してできることはひとつしかなかった。

「……許して下さい」

「んー、何を？ べっつに問題ないんでしょー、アレ。じゃー、いいじゃないのー？」

「……ごめんなさい」

「何にそんなに謝ってるのか全然分かんないよー？」

「……ごめんなさい、ごめんなさい」

彼女の笑みは雨粒よりも重くて、ただひたすら冷たくて鋭かった。

十六粒

パラパラと雨が僕を濡らしていく。彼女は僕の髪の毛を掴み引きずるとシャッターに押し付けた。

がしゃんと大きな音を立ててシャッターが硬く揺れる。

「なんで……なんで独りでいっちゃうの？ 亮ちゃんはあたしと同じでしょー？ あたしと同じ歪みを持ってるんだよ、分かってる？」

「……………」

「今思うと、一目ぼれなのかなあ。最初、テレビで見た時ね、ご両親の葬式の時の映像見た時、あのどんよりした目見た時……君はあたしと同じなんだと思ったんだよ。誰から必要とされてなくて、自分を無価値だと思ってる目。あたしもさ、昔お母さんが死んじゃった時ね、お父さんが責任感じてあたしに会ってくれなくなった。ヤクザの娘に生んだことに責任感じてたんだねー。必要なものは何でも揃えてくれたし、いうこと聞いてくれたけどあたしは何一つ満たされなかったし、周りはあたしんちがヤクザだって知ってるし……もう孤独の一言だよー」

横になった僕の顔面に向けて長い足が振りかぶられる。そして力強くキック。

鼻をもろに蹴られて涙と血が吹き出た。

「そんな時に亮平くんを見たんだ。ほんの十秒くらいだったけど、すぐ分かったよー。君も孤独で自分が無価値で寂しくて寂しくて、でも人が怖くて仕方がないんだって」

またスイング。唇が裂け、血飛沫が玉になって吹き上げられる。

「……本当はね、近くで君を見てるだけでよかったんだ。友達になれたらそりゃ、サイコーだけど、同じ歪みを持つてる人が近くにいてるってことだけ分かればあたしは何だってよかった。それだけで幸せで満たされてたんだよー、ホント。でもね、でも……亮ちゃん、独りで勝手に歪みを直しちゃった」

平たい靴裏が顔面に真っ直ぐ落とされた。グシャリという音。

冷たい感触と生ぬるい何かが混ざり合う奇妙な違和感。

それは何度も力強く、体重をかけて振り下ろされる。

「最初はあたしよりも酷い目してたのに、子供と一緒に遊んでたらどんどん顔が笑顔になってった。焦ったよー。だってまたあたしは独りになっちゃうもん。君の歪みを共有するどころか、勝手に癒して、勝手にあたしから離れてっちゃう。酷い話だよー」

彼女の顔は笑いながら涙を流していた。ぼろぼろとその雫は僕の汚れた顔に降りかかる。

「だ……だから、僕に」

「そっ、酷いことしたんだよ。本当はしたくなかったけど、本当は辛かったけど、じゃないと君はあたしから離れていっちゃうでしょ？ そんなのやだよ。独りはもうたくさん、独りはもう……もうね」

嫌だ。

そういつて彼女は僕に覆い被さると力ない握りこぶしで強く胸を叩く。ただひたすらその唇は独りにしないでよ、と言葉を紡ぐ。

彼女の気持ちを僕は分からなくなかった。同じ気持ちを持った人がいるならそれを共有したいと思うし、一緒にいたいと思う。僕だって願う。

それほどに孤独というのは辛く悲しく寂しいもの。

さやかさんはそれを維持しようとして焦り、方法を間違えて僕を傷つけた。確かにそれで僕はまた歪んだ。

だけどそれは彼女にまた違う亀裂を増やしたに過ぎない。

合わさるはずのないピースを無理矢理合わせようとする行為。

人を傷つける行為がどれほど心に負荷が掛かるのか。孤独で傷つきやすい僕らはそれを知っている。

一度回りだした歯車はそう簡単に止められるものじゃなくて、彼女も止めたくてもそれを止めることができなくて。だけどひび割れた心は時間と共にどんどん歪みを濃くしていく。

結果、僕らはお互いに傷つき合い、歪み、砕け散るだけ。
なんという悲しい喜劇。

まさに二律背反。

僕はゆっくりと手を動かして彼女の髪を撫でた。少し汚れているけど、気にしない。

何を言えばいいか分からない。だから頭に浮かんだその歌をかすれた声で歌う。

それは彼女が子供に見えたから、かもしれない。

「ね……ねんね、ころーりよ……」

髪を撫でつけ、頬を撫でる。まだ酒が残ってるのか頬はじんわりと熱い。

僕の手を掴み、彼女は唇を噛み締める。そして瞼をふるふると振るわせる。

そして彼女は。

「あ……あああああああ……」

はつきりと顔を歪めて泣いた。

赤子のように。

わんわんと。

辛い分だけ。

その間、僕は彼女の背中をポンポンと叩き続けた。

気が済むまで泣けばいい。

僕は君を見て笑う、君は笑うまで僕を見て泣けばいい。

「ねん……ねしな」

泣き疲れた彼女を屋根のある場所まで運び、少し休憩すると彼女を背負った。このまま放っておけるほど僕の心は凍てついていない。傘を差す余裕はない。最低限さやかさんが濡れないようにパーカーを羽織らせてアパートに帰宅した。

途中何度か、休憩することもあったけど無事ついた。合鍵をポケットから出して鍵を捻る。靴を脱いで、彼女のスニーカーも脱がせ

る。

よく絞った濡れたタオルで彼女の頬の汚れや髪の毛の汚れを落とすと、彼女を布団に寝かせた。

僕はリビングで顔の汚れを落とす。手鏡には酷い顔の男が映っていた。

「変な顔」

酷くぼろぼろで目は泣いた跡。だけどその顔は笑っていた。

少し疲れて僕はテーブルにうつぶせになった。

何だか今日はいろんなことがあり過ぎた。

雨に濡れて濡れられて

泣いて泣かれて。

でも嫌な日じゃなかった。不思議だ。

そう思うと急激に瞼が重くなり、体が虚脱した。

「寝るならせめてソファで……」

でも動けなくて、ここが心地いい。テーブルの冷たさが胸を癒す。まあいいか。そう思って僕は寝た。

十六・五粒

少女は帰宅早々、その小さな口をあんどりと開けた。手からどきりと土産が床に落下し、静寂を破る。

それは友人が目の前で大きなクマのぬいぐるみ相手にキスをしようとしていたからだった。

恋人相手にするように抱きしめ、ソファの上でそれを行おうとしていた。

彼女の方も羞恥と困惑で少女をただ見つめていた。どんなことにも驚かないはずの少女ですらそれを見て、引いた。

「ついに狂ったんだ」

「ここここここ、これは練習であって！ 別にその……」

「じゃあ、上手くいったんだ」

「うむ、抱きしめるという行為は素晴らしい！ 私に両手があったって本当によかったと思うよ。何だろうね、あのいい匂いは。ずっと嗅いでいたい香りだった！」

「じゃあ、ずっと嗅いでいればいいんだよ」

「変人だと思われてしまう！」

「今更？」

むむむと彼女は眉を潜め、ぱっと何かに気がつく。

「はて、そういえば君は暫く帰ってこなかったんじゃないかな。それにきりたんぽがお土産ということは北海道には行かなかったのかい？」

相変わらず目ざといな、と微笑む少女。袋から土産を出し、ガラステープルに積み上げる。

少し疲れたのが伸びをして小さく溜息。

「うん、本当はそうしようと思ったけど、ちょっとゴタゴタに巻き込まれて北海道まで行けなかった」

「だから飛行機を使った方がいいと私はいったんだ。地の上を走るなんて時間と金とエネルギーの無駄だよ」

「そうだけど、いいことあったから」

そういつて彼女はにへつと笑った。なかなか見ることにない少女のレアな表情に髪の毛の長い彼女は物珍しそうに目を丸くする。

「彼の意識が戻ったのかい？ それ以外に君が笑う理由が見つからないが……。それとも美味しいものでも見つけたのかい？」

「いつもと全然変わらない、けど。あたしのこと……。あたしの名前、ちゃんと呼んでくれたんだよ」

「そ、それだけ？」

「それだけ」

そういうと少女は菓子を口いっぱいに放り込み、もぐもぐと租借した。その仕草は少女の照れた時の癖だということを彼女は知っていた。

彼女はお茶を啜り、一息つく。

「まあ、確かに重度の失語症が喋ったというのは――」

「失語症じゃないんだよ。彼はちよつと退行気味の自閉症なだけ」

遮るような少女の言葉に、彼女の言葉は止まる。向きなおし、彼女の横顔を見つめた。

皮肉めいたことを言ってやろうと白い歯はにっこりと顔を覗かせた。

「そうだね。記憶障害で失声症の彼というべきだったかな。しかし、顔はまるで少女のようで男には見えなかったね。君はレズビアンの気でもあるのかい？ おお、身の危険を今更ながら感じてしまう。ここがソドムとゴモラの二の舞にならないうちに退散しなくては！」

「あんたも同じだよ。同じ趣味。神に焼かれて死ぬならあんたも一緒」

「ぐっ……………」

墓穴を掘った。

少女は皮肉に対して何の感慨も抱かないのか、そのまま抑揚のない言葉でいう。

「あんたもいいことあった？」

「そう、そうだ！ 昨日、抱きしめて抱きしめられた！ 風呂にも一緒に入った！」

「凄いんだよ」

私としては大きな一歩だ、と鼻息を荒くする彼女に少女は単純に凄いな、と思った。

自分の時は話しかけることすらできなくて、ただ彼が話しかけてくれるのを尻尾を振って待っていたものだ。

さらにそれから普通に接することができるようになるまでまた大いに時間をかけた。

今もまた時間が掛かっている。

「これから、また発展しそう？」

「しないとしても、私が無理矢理にでも発展させてみる！」

「じゃあ、葉使う？」

「そんなもの使わなくても私の魅力で彼を籠絡させてみせるさ！」

「それが……一番いいんだ。本当は他人を脅すことも殺すこともすべきじゃないんだよ。できることなら普通に付き合っ普通で喧嘩して普通に笑える方がいいんだ」

「私にいろいろ手伝わした君の台詞とは思えないね。今更懺悔づいたのかい？」

「ん、別に。ただ時間が掛かるしそっちの方が楽だなって思ったんだよ」

「フフフフ、君らしい」

少女はその言葉に全く動じない。彼女もまた自分の行動によって起った出来事になんら思うところはなかった。

ただ人が死んだだけだ。

それが何だというのだ。

人はいつか死ぬ。

早いか遅いかの違いでしかない。

それが彼女の、彼女達の思考だった。

少女は取り出したノートブックを操作し、フラッシュメモリにデータを転送する。

「そういえば頼まれてた件だけど、何もつかめなかったんだよ。気をつけた方がいいよ。途中で分からなくなったんじゃないかって、何一つ分からなかったから」

「ふむ、君でも分からないとは。誘拐犯君はなかなか大きな後ろ盾がありそうだね。また彼が襲われると思うと恐ろしく、残念だ」

そんな気配を微塵も見せず彼女は笑った。

「全然残念そうに見えない」

「正直に言えば、あの件で私は彼と急接近できたからね！ 寧ろ、

誘拐犯万歳だ！」

そういつて彼女は諸手を上げて、ニコニコと笑った。

少女はノートブックの電源をオフにしながらそれを見て溜息をついた。

十七粒

若干の違和感を覚えて目を開く。知らない天井……というわけじやなくてどこかで見たことある天井。

さわさわと黒い毛が僕の頬を撫でていた。微妙なかゆみに少し顔を擦り、その毛を掴む。

僕の髪の毛は止まり、さやかさんの手も止まった。

「何……してるんですか」

「君の毛を使ってお顔の掃除ー」

「何で僕、布団で寝てるんですか」

「あたしが運んだよー」

「そうですか」

「そうだよー」

彼女はニコニコと笑いながら僕に密着している。正直、窮屈だ。今は何時だろう。外の明るさからするとそんなに遅く起きたようでもない。

ぽんぽんと僕の肩を叩く細い手。

「ねえ」

「何ですか？」

「えへへ……えいっ！」

「んがあっ！」

目潰しされた。彼女のチョキが僕の目を突く。大した力が込められていたわけじゃないけど、痛いことこの上ない。目尻から涙が溢れる。

下手したら失明とかもありえるんだけど。

僕は優しく目を揉み、再度攻撃が開始されないようにおっかなびつくり慎重に目を開く。

彼女はイタズラを成功させた童女のようにニコニコと僕に微笑みかける。しかし、童女というには彼女はあまりにも大きい。

「……な、何なんですか」

「結婚しよっか」

「え？」

「結婚」

「なんで急に？」

「そお？ 女の子は十六歳から結婚できるから遅いくらいじゃない？」

「……そういう理由じゃないです」

何故急にそんなことを、と聞いたのだけど。

彼女はごろりと僕の上に転がり、馬乗りになる。見下ろされる僕。

「昨日、凄く感動しちゃった」

「何か面白い映画でもやってたんですか？」
しらを切ってみる。

「違うよー、昨日の夜のことだよ」

「僕、何もしてないですけど……」

「うん、何もしてないねー。何かじゃなくてさ、心で通じ合えたって感じ。君の優しすぎる優しさが頭に流れ込んだって分かるかなあ。あの時の思い出でまだ頭がズキズキするー」

「それ、明らかに二日酔いですよ」

僕は彼女をどかして上半身を起す。枕元に携帯電話とパーカーがあった。

僕が脱いだわけじゃないから彼女が脱がしてくれたんだろう。たまたま雑多に放り投げてあるところが彼女らしい。

携帯に表示される時刻は九時。まだ余裕のある時間帯だ。

「君はどこまで優しいねー。昨日あんなことしたのにいつもと変わらない。人に対する評価が常に一定なんだねえ。他人に失望とか評価とかあんまり感じないタイプだね、亮ちゃんは」

「さあ……どうなんでしょう」

それは他人に何も期待していないってことじゃないのかな。

何も思わず、自分だけで世界が完結してるってことじゃないのか

な。

彼女は僕の後ろに回りこむと羽交い絞めにしてきた。重い。そしてくすぐりたい。そして恥ずかしい。

「重たい……です」

「亮ちゃん、今日施設帰っちゃう？」

「その……つもりですっ。午後には帰って子供達と遊んであげないとっ」

「いい旦那さんになってくれそうだねー」

「結婚する前提ですか？」

今日はこのまま山へいって絵を描きながら坂之上と話をしそれから子供達と遊ぶ予定。

そして今夜は。

今夜。

今夜か。

「もっと一緒にいようよー。あたし、昨日のあれでもっと好きになっちゃった。不思議だね、何にもしてないのにー」

「僕と一緒にいてもさやかさんの心は安らがないですよ」

「安らぐよ。今も安らいでるもん」

「……………」

くんと彼女の鼻が僕の耳の裏を走る。

「ね、だから一緒に今日はギリギリまで布団の中でイチャイチャしようよ。今日もいっぱい泣かしてあげるっ」

くんくんがレロレロに変わり、ざらざらにゆるとゆるとした舌が首筋を張った。僕は自分でも分かるくらいに顔がかっと熱くなる。

彼女はノーブラだ。何故、分かるんだよこの野郎。

「……ダメです、不健全です。僕は今日是用があるんです！」

彼女は僕を絡めとるように腕を素肌に通わす。いつもの無理矢理な感じとは違う感覚に内心僕はわっわっとうろたえる。

「これはお願いだよう。ほんとに君のこと愛しちゃったから、だから……一緒にいたいなー。だめ？ 君はあたしのこと歯牙にもかけ

ないって奴ー？ あたしは君の子供が欲しいなあ、それじゃだめー？」

右耳は水っぽくふやけて重い、いやそれよりも熱くて、背筋がゾクゾクする。

彼女の湿っぽい吐息が首筋をかすめる。

「あーあーあー、ドキドキしてるー！ 無理矢理してるよりも亮ちやんこういうねちっこいのに弱いんだー。めんこいのうー」

僕だって知らなかった。

そうこうしている間に彼女の手が僕のジーンズに侵入し始め、唇が首筋をついばむ。部屋にちゅぱちゅぱと生々しい音。

「わっわっわあ！」

「えへへ、優しくしてやるぜーい」

「……あ、朝風呂入ってきますっ！」

僕は半ば強引に立ち上がり、寝室から逃げた。彼女は僕の顔をニコニコした笑顔じゃなくて何だか女性くさいニヤニヤした笑みで見つめていた。

彼女が男ならこいつ、あと少しで落とせるなって顔なんだろう。もしくはどう料理してやろうかと思っている野獣の笑み。

僕はその妙に熱っぽい視線から逃げるように風呂場に向かった。

十八粒

寝起きの体に熱い雨粒がザアザアと音を伴って降りかかる。急な温度の変化に胸がぎゅっとなったけどそれもすぐに慣れた。

僕は無意識に彼女の舌が這った首筋を触る。指の腹でぬるりとした唾液の感触。

風呂場のガラスに映った僕の顔に赤みが差す。まだ耳は熱した鉄のように熱い。

胸がドクドクと高鳴る。

僕は舌を出す。ゆっくりと人差し指をその上に乗せる。ふにやつとした弾力のある柔らかさ。

唇を閉じて舌で指をすくう。

しっとりとした湿りとした感覚に指から鳥肌が全身に伝播した。

「……って僕は何をしてるんだ」

シャワーの蛇口を捻って水を被った。肌を刺すような冷たさは僕の妙な火照りを奪って、冷静なものに変えていく。

風邪を引いてもアレなのですからお湯に切り替え、ほっと一息。軽くシャンプーとリンス。今はそれくらいいいか。

風呂を出て、脱衣所を覗く。どこかに彼女が潜んでいる可能性もある。

だけどそこには何もなく、洗濯機も乾燥機も頑なに沈黙を守っていた。

一枚隔てたカーテンの向こう側からバニラエッセンスの香り。それを嗅ぎながら彼女が僕にあつら誂えた服を着る。

僕の大半の持ち物やお金は彼女からもらった物。

「これじゃ、ヒモだ……」

少し自己嫌悪。

カーテンを開き、リビングに顔を出す。彼女は大きく白いエプロンをしていて、テーブルの上にフレンチトーストを置いているところ

ろだった。ご丁寧に、横にオレンジジュース。

「今できたんだよー」

「あ、どうもありがとうございます……」

「亮ちゃんはシロップもいるんだっけ？」

「フレンチトーストって普通シロップ使いませんか？」

「そーかなあ。あたしいつもバター一掴だけどー」

そういいながら彼女はくると身を翻し冷蔵庫に近……僕はオレンジジュースを吹いた。そのまま咽て、鼻が柑橘系の臭いに染まる。喉の奥がつんと痛むけどそれどころじゃない。

「なっ……!」

「ああ、これー？ 裸エプロンだよーん」

さやかさんはくると僕の前で回ってはにかんだ。僕は目を逸らす。

「……せつかくですけど、朝食入りません。このまま、行きます」

「あーん、うそうそ！ 今、着替えなおすから食べてってよう！」

僕は彼女をうろんな目で見つめながら、椅子に腰を下ろし、フレンチトーストを食べた。

ジーンズに黒いタンクトップの彼女が来るころには全て平らげていて、僕はオレンジジュースをコップに注いでいるところだった。

「もー、食べちゃったの？ あーんしてーとかやりたかったのにー」

「一人でやって下さい」

「亮ちゃんがないない時はいつも独りでイロイロしてるんだよう」

「何の話をしてるんですか……」

食器を流しにつけておく。今日の皿洗い係は彼女だったと記憶している。

必要なものを持ち、ドアノブを捻る。手帳は見つからなかったから、また新しいのを買わないといけない。

「いってらっしゃーい」

「ここは僕の家じゃないです」

「いいのー。そんなつまんないこと言ってるといってらっしゃいのチューするぞー」

「……………いい、いってきます」

本当にそうしてきそうな雰囲気だったので僕は小さな声でいった。
ニコニコ笑う彼女を尻目に部屋から出て、扉を閉めた。

扉の向こう側では一人彼女が盛り上がる声が聞こえた。僕は知らないフリをしてアパートを後にした。

異常気象的な何かのせいかな今日は気温が低い。太陽の光もどことなく弱い気がする。きつと神様が疲れてる僕にくれた優しさ、なんて妄想。

のんびりと町を眺めながら頂上に着く。当然、彼女はそこにいて
ジーンズに黒いティシャツ、茶色のハンチング帽を被っていた。

ベンチに座る彼女は風景を眺めながら、直接鍋からラーメンをすすっていた。

「やあやあやあ！ ようこそ、私の庭へ！」

「なんでラーメンなんて食べてるんだ？」

「お腹が空いたからに決まっているだろう？ 君は馬鹿なのか……？」

ちよつと哀れむような視線に苛立ちが募る。少しむっとして言い直す。

「何でこんなところでラーメンなんてものを食べているんだ？」

「いい景色を見ながら好物を食べれば美味しさは累乗倍なのだよ、これが！ 特許局に出願予定だから内緒だ！」

「アホ」

彼女は山盛りのらーめんを啜りながら景色を眺め、僕はベンチに座り右斜め前にある切り株を鉛筆でスケッチする。

心地のよい静寂、沈黙。

ラーメンを食べ終わった彼女は僕に小分けに袋詰めされたビスケットを差し出した。

「食べるかい？ それともチョコがいいかな？ ハムやベーコンもあるよ」

「君はこれから雪山にでもいくのか？」

「……君、今は夏だよ」

「その哀れむような顔はやめてくれ」

「大丈夫、君はちよっと人よりもIQが低いだけだ！ このビスケットを食べて気を落ち着けたまえ。袋、開け方、分かる、か？」

「カタコトで話すなっ！ 開け方くらい分かるっ！」

僕は奪い去るように彼女の手からビスケットを取り上げ、心配そうな彼女の目の前で綺麗に袋を空けた。ほっと胸を撫で下ろす彼女の顔が非常に腹が立つ。

でもこれも彼女なりの親切心なのかもしれない。自然に会話できるようにという彼女の優しさ。

確かに昨日の出来事は結構というかかなり恥ずかしい部類のものだ。

「飼育員って大変なんだね、亮平君！」

「動物園にでも行ってこいっ！」

「私は遊園地の方が好きだ！」

「なんのアピールだよ」

「君と遊園地に行きたいというアピールだよ」

彼女は白い歯を見せながらにっと笑った。そしてポケットから二枚のチケット。

「ベタかもしれないが、今度私と……私と一緒に遊園地に行かないか！」

「……………え？」

チケットを握り締め、彼女はずいっと近づく。僕はそれを咄然と見つめた。

「行かないというなら昨日、君が泣いたことを言いふらす」

「……姑息だね」

「ネットを使い、君の画像付で泣いたことを配信するぞ。そして私

に抱きついたことも言いふらしてやる」

「……陰湿だね」

「君の選択肢はイエスかハイしかここには存在しない！ 第三の選択肢、ノーを選ぶのならば今から私は君にエロいことをする！」

嫌がらせにノーと言いかけそうになって僕はぐっと言葉を飲み込んだ。

「私に迷惑を掛けたお礼ということでここは一つどうだね？」

「お礼って普通、僕側からいうものじゃないのかな」

「そんなことはどうでもいいのだ！ 意味さえ通じれば問題ないで、どうだね！」

うーんと渋り、鉛筆を持って絵を再開しようと思ったら坂之上の手刀が僕の手を叩く。

彼女の顔は笑っていたが目は笑っていなかった。

「……わ、わかったよ。変な事いいふらされても嫌だしネットで有名になるのも嫌だし、行くよ」

「じゃあ、エロいことはいいんだね！」

今度は僕の手刀が彼女のおでこを叩いた。

十九粒

急に立ち上がり、坂之上はペットボトルを傍に置いてあるグリーンのリュックから出すと、蓋を捻り自分にぶっかけた。

水は滝のように額を流る。彼女の目線は青空。

「わっ……どうしたんだ!？」

「夢じゃない! 夢だけど夢じゃないっ!」

首を僕に向ける。なんだか瞳孔が開ききったような目。

「はははははははははははははははは! 夢、幻ではないのだ! ていつ」

彼女は高笑いを続けながら、自分の手のひらを何かで切った。当然、それはナイフで。当然、桜色の掌に赤い線ができる。

真っ直ぐ定規で引いたようなその線。

「なにやってるんだ!!!」

「フッフッフッフ、痛い! 痛いよ、夢じゃない!」

「その前に傷口!」

彼女は笑いながら僕に手を引かれてベンチに腰を下ろす。僕はナイフを持つ手を慎重に広げた。

「……………」

汗でびっしょりだった。ベンチの上に置かれた遊園地のチケットは握り締められていて、大量の汗を吸っていた。

どうやら相当緊張したらしい。

彼女のバックの中には一通りの応急セットがあったのでそれを使い、消毒し包帯を巻いた。

そして今更ながらちよつと応じてしまったことに後悔。

「……大丈夫か?」

頭とか。

「大丈夫さ。人間、二十パーセント以上の血液を失えば確かに問題だがこれくらいなんともない。いやあ、少し興奮してしまっただけね。」

驚かせたようなら申し訳ない」

「坂之上の奇行にはある程度慣れたけど、今のは驚いたっていうよりも引いた」

「だからそんなに顔が青いのか。妙にそそる顔をしているわけだ！」

「死んでしまえ！」

「私が死んだら君は悲しんでくれるかい？ 悲しんでくれるなら私は笑いながら死んでみせよう！」

「怖いからやめてくれ」

包帯をピンで止める。彼女の手はふにゃふにゃとしていて労働を知らないものの手だ。女性の手というよりは子供の手。

ちよつと触りごちがいい。

「亮平君、くすぐったいよ。君はあれかな、人の手に欲情するタイプだったのかな？ だったら存分に私の手を使ってマス……んぐっ」

「黙ってる」

手で彼女の口を塞ぐ。

朝っぱらから何をいい出すんだこいつは。

彼女はにっと目だけで笑うと両手で僕の手を掴んだ。そして深く鼻で息を吐き、口で息を吸う。

「なんか変態っぽい」

手を離そうにも硬く動かない。次にレロっと僕の指の間に舌を這わせた。

「わーわーわーっ！！」

生暖かい泥濘ぬるかるみに手を浸しているかのような怖気立つ感覚がぞわぞわと駆け上る。舌使いが酷く官能的に蠢く。

「離せ離せ離せ離せ！ はな……せ！ はな……し、て」

彼女はにやにやと笑いながら中指と薬指の間を重点的に責める。くるっと舌が僕の指を包んだと思うと上下にストロークし始めた。柔らかな唇の間から生暖かい吐息。互いに獣のようにふうふうと息を切らす。

指の隙間から見つめる彼女の瞳は熱に浮かされたようにドロドロ

にとろけていた。

不意に舌の先が探るようにチロチロと手の中心を舐め上げる。僕は体をびくつかせた。

今度はざらざらとした舌の腹が僕の手ひらでの字を描く。

僕はため息にも似た喘ぎ声を上げ、自分の声で顔を真っ赤にした。「どう、したね。もう……無理やり掴んではないよ？ フフフフ」

「……………っ！」

よく見れば、彼女の手は消えていて、僕が彼女の顔に手を添えている形になっていた。僕は慌てて手を引っ込める。

「ば……ばっ！」

「馬鹿も何も、今のは手当てのお礼じゃないか。ああ、そうか。手じゃ物足りなかったかな？」

彼女は笑い、ちろりと舌を覗かせる。僕はそっぽを向いて鉛筆を握った。唾液で少し滑る。

まだ胸はときどきとその鐘音を鳴らしていた。

坂之上は少し申し訳なさそうに、とっても笑いながら、僕の顔を覗いた。

「……フフフ、怒っているのかい？」

「当たり前だろ！」

「そうかい」

彼女は僕の頬に優しくキスをした。

「だ、だからそういうのがっ——！」

今度は口。

次が恐ろしい僕は黙り、意地とばかりに絵に集中した。

「フッフッフ、君は可愛いなあ。愛らしいよ、愛おしいね、狂おしいよ」

「……………君は、君はさ」

「うん、私がなんだね」

どうしてそんなに僕に近寄るんだ、と言おうとして違う言葉が出

る。

「君は僕のこと怖くないのか？ 毛嫌いとかしないのかい？」

「んん、欲情はするが恐怖や嫌悪は微塵も感じないね。君が私に襲い掛かってきたとしても恐怖よりも喜びが九割を占めるだろう！」

「そう……ですか」

力強く拳を振り上げ、はっきと言い切った。

やっぱり、馬鹿だ。もしくは色情狂。

「君はこう言いたいのかい？ 僕は人殺しの子供で周りに不幸をばら撒いてきたんだぞ、と。一緒にいると僕と同じような目に遭うぞ、と」

彼女は前かがみになって僕の顔を覗くが僕は真っ直ぐスケッチブックを見つめた。

それは彼女の顔を見るのが怖いから。

ありえないと思う。けど、少しでも彼女の表情に嫌悪感が映っていたら僕は押し潰されてしまう。

視界の外で黒い長髪が風に揺れる。

「……かもね」

「君は両親のことを誇りに思っていないのかい？ あれは誰がどうみても事故で君らはスケープゴートでしかない。両親に責があったとしても子供である君に責任はない。そうだろう？」

「でもさ、やっぱ世間は分かっていても、そうはいかないんだよ。

嫌われている人間ってだけで人は下に見て差別するんだ。坂之上もあんまり僕と………一緒にいない方がいいよ」

少し間が空く。先ほどの心地よい静寂とは違い、息苦しい沈黙。

酷いことをいっているってのは分かっている。

だけど。

だけどさ、怖いんだよ。

人の優しさが。

無償の愛が。

君の笑顔が消えることが。

その原因になることが。

いつか傷つかなくちゃいけないなら、ずっと一人でいい。
彼女はゆっくり優しい口調で僕を諭す。まるで昨日のように。

「君が今までその他の人間になんと言われてきたか、されてきたかは私は知らないし、興味が無い。ただ私という人間は全世界が君の敵になったとしても味方でいる者だよ」

また力強いいう。当然のように、当たり前のように。
人に頼っちゃいけない。助けを求めちゃいけない。

裏切られた時、悲しいから。

でも分かっている、坂之上の言葉は暖かった。

悔しいくらいに実直で熱い言葉だった。

「相変わらず馬鹿だな」

「稀に見る正直者といってくれ」

「……………ありがとう」

「……………どういたしまして」

僕は力なく笑う。

やっぱり人からお礼を言われなれていないのか、坂之上は顔を赤くしながらガキ大将のように白い歯を見せて笑った。

二十粒

「ありがとう、か。いい言葉だね」

「そうかな」

「うん、人を感謝するということも感謝されるということも心地よいものだ。君もそう思わないかい？」

彼女は包帯を巻いた方の手を空にかざし、足をぶらつかせた。どこか子供っぽい。

「僕はいつもありがとうっていう方だかされる側の気持ちは分からないな」

「亮平君！」

急にがしりと肩を両手で固定される。何が起るんだろうと僕は身構えた。

彼女の表情は真顔で、真っ直ぐ僕を見ている。

「……なに」

「生まれてきてくれてありがとう！」

彼女は直ぐに壊顔して僕ににっと笑いかける。

面と恥ずかしい台詞をいわれ、僕は歯がゆさを感じた。

「坂之上って時たま凄い奴なんだなって思うよ」

「うむ、私は事実、脱いだら凄いぞ！」

「裸になってそのまま凍えて死ね」

折角いいことを言おうとしたのに台無しにされた。

彼女はフンフンと息巻いて、服を脱ごうとしたので頭をチョップして止める。

ちらりとへそが見え隠れ。

「そういえば、遊園地っていつからなの？　どこの遊園地？」

「場所は近場だよ。日程は………んん、いつだったかな。少し待ってくれ」

彼女は僕の言葉に、チケットをポケットから出し、皺くちゃのそ

れを上手く引き伸ばす。

「うん、二日後だ!」

「は?」

「今から四十八時間後だよ」

「いや……そうじゃなくて、なんでそんな急に? 普通、一週間後とかじゃないの」

「普通はそうなのかもしれない。しかし、私たちは違う!」

もっともらしい適当な言葉に僕はため息が出る。まあ、明日と発言い出すよりはマシかと無理やり自分を納得させた。

僕はそのままスケッチブックの隅に予定を記す。二日後、坂之上と遊園地。

今週はいろいろなイベントが目白押しな気がする。子供たちと遠足もあるし、休みの日はさやかさんの家に行かなくちゃいけない。

僕に休みはないのか。

「亮平君、ちなみにバナナはおやつに入るからね!」

「……あっそう」

「ちなみにカレーは飲み物だ!」

「君は何の話がしたいんだ?」

絵が描き終わり、一息つく。右手の裏が真っ黒だ。

僕は坂之上から飲み物を分けてもらう。その代わりに彼女は絵を見せてくれといった。

スケッチブックには今描いた絵以外のものもストックされている。

「素晴らしいね! 君は絵の才能があるよ。頭の方は残念だがこれは誇ってもいい! 私が許そう」

「君は何様だ」

「なあ、私にも一枚描いてくれないかい? 将来君が有名人になった時に一財産築けそうなレベルのものを頼む!」

「本当に何様だ?」

スケッチブックを彼女の手から取り上げて、ページを捲る。

恥ずかしいレベルのものはどうやらないようだ。安心。

「好きなの、もっていったいいよ」

「君に今ここで描いてほしい！」

「ん、じゃあさっき描いたこれ……」

「そうじゃない、そうじゃないんだよ。私が頼んで君が応じてくれた絵がほしいんだ」

つまり今ここで描けということらしい。我侭な奴だ。

本当は面倒だったけど、彼女が褒めてくれたことに少なからず気を良くしていた僕は真っ白なページを開いた。

鉛筆を持ち、何を描こうか考える。

折角だから彼女の顔を描くことにした。

「なっ……私を描くつもりかい!？」

「うん、そうだけど」

「私なんか……そんな!」

「動かないで」

「……………よし、私も女だ! 君を信じよう」

鉛筆を立ててアタリをつける。まず目から描き、鼻に移り、輪郭を埋めていく。

坂之上は緊張したのか僕の方を向いたままズボンをぎゅっと掴み、ぴくりとも動かない。

注意してみると彼女の顔のパーツが如何に調和が取れていて美しいのか気がつかされる。

普段はアレな性格だがこうして大人しくしていれば、なかなかどうして。

「ううん、やっぱりここは脱いだ方が……」

「そのままでもいいから」

変態だけど、まあそこは許そう。

髪を描き、十五分ほどで完成させた。今回はあまり描き込みはない。

絵を受け取った坂之上はブルブルと感極まったように震えた。

「ど、どうした？」

「美しい……！」

「気に入ってもらえたなら何よりだけど」

「私の美しさは美の神アプロディーテーですら嫉妬するだろうね！」

「ああ、美しいってそういう……」

僕の絵が、とかそういう意味じゃないらしい。

なんだ、自分の顔に酔いしれてただけか。

「無論君の絵でなければこの美しさは表現できない！」

「じゃあ、もしも僕がキュビズムで君の顔を描いたらどうする」

ブラックやピカソのあの描き方。三次元的ではなく四次元的に物事を捉える描き方。

僕の問いかけが終わるのと同時に彼女は言った。

「うん、今と同じことを私はいうだろうね」

真っ直ぐ僕を見ていて、偽りや世辞を微塵も感じさせない笑顔。

「君は……凄いね」

「私は私のしたいことをし、私の言いたいことをいい、私の望むことを実行する！」

ヒトラーの演説のように力強く声を張り上げた。

ただ彼女は自分是我俣だと言っていないのだけど、なんだか彼女らしいと僕は思った。

くるっと彼女は僕の方を向く。

「そんな私を君は嫌うかい？」

僕は少し考えて、苦笑に似た笑みを零した。

「……いいや、そういう馬鹿なところ、嫌いじゃないよ」

「私も君のそういう捻くれたところも含めて全て好ましいと思う」
互いに顔を見合わせて、僕らはどちらからともなく笑った。

二十一粒

どんなに時の流れが緩やかだとしても決して時間は止まったりはせず、終わりは等しく必ずやってくる。

当然それは僕らにもいえることで、僕は坂之上と別れることになった。

「もう、そんな時間か。それじゃあ、また明日」

「ああ、また明日」

坂之上は町へと続く階段へ、僕は施設へと繋がる階段に向かう。

そして互いに振り向き相手の顔を見る。それに僕は相手も同じことをした、と笑った。

言葉は無粋で、僕は瞳だけでまた明日と声を掛け合った。

転落防止のロープを掴みながら泥道を下る。こちら側は木々が生い茂っている為かまだ前日の雨の名残があつて、草木の青臭さが立ち込めていた。

ふもとに着いたあたりではっと気がつく。片手に持っているそれ。

「傘……返すの忘れてた」

早朝の施設は静かで、人気がない。子供たちは本館から少し離れた花壇のほうに居て、みんなで植物の種を植えているところだった。「みんなおはよう」

その声に笑顔がわっと爆発。泥だらけの手で僕の服を掴みぐるぐると引っ張りまわす。

どこいったのー、あれしてー、今アサガオの種植えてたんだよー、昨日セミいっぱい捕まえたよー。

「亮平君、お帰り」

「はい、ただいま……」

子供たちの近くに監督係の女性。施設の人で僕よりもいくつかが上でいつも僕を好奇心な目線で見つめる人。

ポニーテールの彼女はどこか理知的でアカデミックな香りがした。名前は知らないし、知ったところで意味がないし、そもそも興味がない。

彼女は子供たちに「亮平お兄さんにいいところ見せてあげようね」といって作業に戻させると、近づいてきた。

まず僕の尻を撫でた。

「今日も朝帰りなんだ」

「……子供たちの前です。やめてください」

「どうせ見ても分かりっこないわよ」

「僕の気持ちは……無視ですか」

「いいじゃない、今日も朝まで院長さんと“イイコト”してたんでしょ？　ほんと羨ましいなあ」

手が滑るようにして服の下に潜り込む。背中をゆっくり冷たい手が撫でた。

それを僕は耐える。

拒否権はない。

「ねえ、考えてくれた？　この前の件」

「なんです……か」

「私と一緒にデートしてほしいって話」

「お断りさせてもらったはずです」

背骨を人差し指がつうつと撫でていく。

「それがさあこの前、友達に亮平君のあのビデオ見せた凄く羨ましがってね、それでどうしても、みんなが会いたいていうんだけど」

「あなたは……っ」

目を見開く。

羞恥と苛立ちが入り混じり、歯がギリギリと音を立てる。

ざあっとさざ波のようなノイズが頭の中に響き、胃液がこみ上げて来た。

壁に手をついて、立ち眩みが通り過ぎるのを待つ。

「お兄ちゃん、どうしたの？　おなかいたいなの？」

スコップを持った少女が僕の顔を心配そうに見つめた。それに同調して周りの子供たちもざわざわと騒ぎ出す。

「ははっ、亮平君モテモテだね」

「せんせー、亮平くんびょうき？」

「亮平君は今日は女の子の日なんだよ」

「おんなのこ？」

「子供たちに変な嘘……教えないで下さい」

僕は子供たちに何でもないと言って、足早にその場を離れた。最後彼女の囁いた「考えておいてね」という言葉が耳障りだった。

施設で夕飯を食べて、みんなを風呂に入れる。そしてみんながしてほしいということをしてあげた。

本を読んであげたり、折り紙を折ったり、絵を描いたり。

してあげたとは言うけど実際僕も楽しかった。

各部屋を見回って、みんな寝たのを確認して僕も風呂に入る。湯につかるほど時間はなくて、簡単にシャワーで流した。

ちょっと前に坂之上のところ湯に浸かったけどよく考えてみれば随分久しぶりだったような気がする。

髪を乾かして、時刻を確認。丁度日付が変わった頃。

両親の映った写真たてを一度持ち上げて顔を見る。

この頃が一番幸せで、一番普通に笑えた頃だったなあ。

今も過去もそう大して変わりはないよ。そう頭の中で不敵に彼女は笑った。

僕はそれに大分毒されてきているな、と笑う。そして職員がいる部屋へと足を向けた。

足がふらつき、頭が重い。体はそこへ行くことを拒否してる。

だけど僕は進み、引き戸を叩いた。

明るい声がして戸が開かれる。髪の短い女性が僕に微笑みかけ、手を引っ張った。後ろで鍵がかしゃんと掛かる音。

部屋は畳で、中央に青いビニールシート。横にはタオルやら怪し

い器具が並べられていて、何に使うのか分からない巨大な注射器なんかもある。

そこには院長のさやかさんを除く施設の全女性職員がいた。みな様に目をぎらつかせていて片手にアルコール飲料を持っていた。

何か空気が違う。

さっと顔が青くなる。

「話に聞いてたのよりも多いですし……それに過激なことはいらないって」

「まあまあ、直ぐに何されてるか分からなくなるって」

アカデミックな彼女はそういつて笑った。他の人もそれに釣られて笑う。下世話な笑い。

奥で髪の毛の短い女性がカメラを設置している。別の女性は洋服を取り出した。

後ずさる僕の肩を誰かが掴む。酒臭い。

「お、お願いします。酷いことは……」

「しないわよ。ほら、だから力抜いてこっち来て」

僕はただカタカタと震えた。

二十二粒

人はどうして他人に酷いことができるのか。

彼女ならきつと自分がされるわけじゃないから、とか当たり前のように答えるんだろうな。

みんなが寝静まり、薄っすらと外が明るくなったのを気に僕は起き上がり、部屋を出た。

「……抗えか」

抗ったけど、僕はそれ以上の力で踏み砕かれて、組み伏されて、嘲笑された。

悔しくて悔しくて涙が出る。

自分の無力さと直ぐに諦めてしまう自分の弱さに。

涙を流すたびに感情が希薄になっていくのを感じる。

自分の部屋に戻る前にふらつくその足で子供たちの部屋を覗く。

どの子供たちも気持ちよさそうに寝ていた。

この笑顔を守れるなら。

本当に？

本当さ。

守りたいのは自分だろ？

違う。

違うないさ、自分のことがバレて嫌われるのが怖いからそうして
るんだろ？

違う。

違うのはお前のその偽りの笑顔だろう？　いつまで被害者ぶって
るんだ？　お前は何も変わらない。変わりはないさ、坂之上に惹
かれてるのだって自分が汚くて弱いからだろう？　強くて清らかな
彼女と一緒にいれば自分も同じようになれると思ったからだろう？
そんな幻想を抱いたんだろう？

違う！

違わないさ、お前は本当は世界を憎んでいて、他人を憎んでいて、優しくしてくれた坂之上ですら妬んでいるんだ。さやかだってうっとおしい金蔓としか思っていない。そうだろう。

うるさい！

俺はお前だ、お前は俺だ、僕は俺で俺は僕だ。

お前は違う僕とは。

両親が死んだ時お前はこう思った。「これで苦しまなくてすむ」
って。

そんなことない！

あるさ、だって俺はお前だから。

気がつけば外にいた。

暗闇は既に白み始めていて、僕は少し汗をかいていた。場所は近所のバス停のベンチ。

額の脂汗を拭い、立ち上がる。

「僕、頭おかしいな」

夢遊病とかそういうレベルじゃない。気がつけば人を殺しているようなレベルだ。

そう思うと何だが施設には帰りにくい気がした。

このまま山から飽きるまで町を眺めていようかな。

それで彼女が来たら聞こう。

「なんて？」

僕頭おかしいけど、どうしようって。

道路を横断しようと思ったら車の近づく音。距離がかなりあるから先に渡ろうと僕は進む。

ライトもついてるし、僕が渡っていたとしても気がついてスピードを緩めるだろう。

しかし、車はスピードを上げた。

「え？」

ぐんぐんとスピードを上げて僕の少し前辺りで急ブレーキを踏む。

僕はそれを避けようとアメフトのタッチダウンよろしく横に飛び跳ねる。だけど避けきるには遅く、体の一部は車体にぶつかり、田んぼ道に投げ出された。

二度地面を跳ねて僕の体は動きを停止。

呼吸ができない。血が出てる。誰の？ 僕のだ。

体が自分の物じゃないように重い。動かすたびに骨が軋む。

籠った音が聞こえる。ああ、耳もちょっとやられてるみたいだ。

「……………」

「え？」

少し咳混じりの僕の声。

白と青のコンテラストに染まった眼球はゆっくりと元の正しい映像を映し出す。

僕に誰かが声をかけているようだ。道路から見下ろしている二人。

ごつい黒服の男と少女。その少女は背筋をピンと伸ばし、青い着物を着ていた。

「——きげんよう、亮平さん。ここはいいところですね。空気が綺麗でとても落ち着きます」

「あ……ああ！」

「大丈夫ですか？ お顔が優れないようですけど。甚六、折角ですから車に乗せてあげなさい」

彼女は微笑み横の大柄な男に命令した。

男は無言で僕を持ち上げ、僕を跳ねた車の後部座席に乗せる。動物園の猿を見るような眼つき。

僕は軋む体で拒むも、屈強な彼の力の前では無力だった。足に何かを打たれる。

「あ……うあつ」

「何か言いたいのなら日本語で喋りなさい。ここは曲りなりにも日本ですよ」

僕の手と足に手錠をかけながら、彼女は少し首をもたげ、僕に優

しい笑みを零した。

二十三粒

車の揺れと共に僕の鼻血はポタポタと膝を濡らす。それに気がつき桐生呉葉と名乗った少女は僕の鼻をべろつと舐めた。

そのまま舌は頬と首を滑る。

「あなたの手帳、読ませてもらいました。私的で詩的な文章と絵。とても面白かったわ。特に木漏れ日を漂い、泳ぐアゲハチョウなんという表現が……聞いていますか？」

「はっ……はあっあ」

「舌が回っていないわよ。薬のせい？ それとも恐ろしくて恐ろしくて、しょうがないのかしら。大丈夫よ、亮平さん。あなたは決して逃げることはできないから」

彼女は僕の体に触れた。僕は触れられる度に何かされるのじゃないかと体をびくつかせた。

「答えてくださらないと、私の独り言になってしまうじゃない」
指を僕の口に入れ、体の痣を押した。鈍痛が体を刺す。

「あぐっ」

「生きていることが実感できないのでしょうか？ 痛いということは生きているということなのよ」

知っているさ。それくらい。

「こっつこっこれか」

「これからどうなるのか、ですか？ そうね、あなたは行方不明になって私達の楽園でその寿命が尽きるまで暮らすことになるわ」

「……………あああ！」

重い首を持ち上げて、彼女を見る。彼女は僕を見ず、真っ直ぐ景色を見つめていた。

彼女は微笑を携えながらいった。

「大丈夫ですよ。子供だろうが何だろうが亮平さんを縛っているものは直ぐこの世からいなくなります」

優しそうな笑みなのにその言葉は酷く冷たかった。

僕は胸が潰れそうになって息を切らす。汗が鼻血のようにぼたぼたと膝に落ちた。

こいつは、この目の前にいる女性は本当にそういうことをするタイプの人間だ。

するといったら本当に殺すだろう。

だからこそ恐ろしい。

「はっ……はっ……はっ！」

「胸が苦しいのかしら。そんなに怯えた目をしたら私、我慢できませんよ？」

きゅうつと唇を曲げてその表情は嗜虐的なものへと変わる。どくどくと彼女の鼓動が鳴っているのが分かる。

像に踏まれる蟻はこんな気持ちなのかもしれない。

諦めに似た絶望感。災害に似た気持ち。

白い手が僕の顔にゆっくりと近づく。

しかし、それは車の停止と共に、動きを止めた。

「到着致しました」

「……相変わらず空気を読まないのね」

僕はまた担がれた。港の貸し倉庫。その一つに入る。

中にはビニール製のテントが張られていて、そこにはいろいろな機材が並べられていた。室内は消毒薬の香り。

奥から白衣を着た男が現れ、遅まきながらここは非合法の病院なのだと理解した。

僕はそこであらゆる診察を受けた。

「おいおい、何こいつに打ったんだよ。数値がめっちゃめっちゃねえか」

「モルヒネだ」

「はー？ 馬鹿かつーの。腕と足へし折るくらいにしてくれると助かるんだけどなあ、いろいろさ」

「問題は？」

「特になしの健康体。脳も肉体もオーケー。車に轢かれたってのに、ひびで済んでるとか奇跡だぜ？」

新たな薬を打たれた僕をまた担ぐ。部屋の隅で大人しく座っていた彼女は僕を見るとにっこりと微笑んだ。

「ごめんなさい。検査なんて必要ないと私は言ったのですけど、甚六がどうしてもというので。でもこれであなたも私達の樂園に来れます」

歩きながら彼女はそう語り、港の隅にある大きなクルーザーに僕を乗せた。

白髪交じりの屈強な老人は二人に挨拶をし、僕を残念そうな目で見た。これから死地に向かう者を見るような、どこか哀れんだ表情。船は陸を離れ、風を切りながら海を走った。僕と彼女は地下の小奇麗な部屋にいた。甚六と呼ばれた彼は甲板に出ている。

僕の口はだらしなく開き、口端から唾液を走らせる。彼女はそれを舌ですくって飲んだ。

「ろこ……へ」

「素晴らしいところですよ。病気も争いもないのどこで美しい島」

「か、えひ……へ」

「帰して？ どこへ帰るといふのかしら。あなたを虐めていた人達のいるところ？ あなたを犯していた人達のいるところ？ あなたの心を殺した人達のいるところ？ そこにあなたは本当に本心から帰りたいといえるの？ そう……今あなたが目を逸らしたように答えは既に出ているでしょう」

「れ……も……」

「あなた自身もそれを望んだことでしょうか？ 生きているようで死んでいる地獄から抜け出したい、そうこれに書いてたのはあなたでしよう？」

そういつて彼女は僕の手帳を出してヒラヒラと横に動かした。僕はそれを取ろうと動き、床に倒れた。

少し動いただけで心臓がバクバクと高鳴った。何か危険な薬を打たれているのは確実だ。

彼女は僕を起こすことなく、老獪さを感じさせる表情で笑った。そして今度は見せ付けるようにゆっくりと舌なめずり。

「あなたの価値は抱かれるだけじゃないわ。下種な人間たちはあなたにそう評価を下し、そうあなたに思わせてきた。本当はもっと素晴らしい才能があるというのに」

僕の服を脱がして、胸の上に耳を落とす。彼女は僕の心臓の音を聞いているようだ。

「絵の才能？ 詩の才能？ 音楽の才能？ いいえ、そんなものじゃないわ。あなたは私達の救世主なの。私達だけの救世主」

そういつて彼女は何度も何度も僕に頬擦りをしたいとおしむように。愛でるように。愛するように。

摩り、舐め、噛んだ。

僕に頸木を打ち付けるかのごとく。

二十四粒

「そろそろ霧を抜けた頃かしら」

どうということだろう。

僕の疑問を感じ取ったのか彼女は僕を見上げ、笑った。

「私達の島、すなわち東女国は常に濃い霧で覆われているの。そうね、常に台風の目の中心にその島があると想像してもらえればわかり易いかしら？」

長い髪を掻き上げ、また僕の胸の上に顔を落とした。鼓動を子守唄に彼女は目を閉じる。

僕はこれからどうなるんだろう。

この人は僕をどうするつもりなんだろう。

ああ、坂之上と遊園地に行く約束守れないなこれじゃ。

施設の子供達は無事かな。

痛いことされなきゃいいけど。

震えが止まらない。膝がガクガクする。

僕の震えを彼女は心地良さそうにしている。

起き上がるうにも手に力が入らない。入れようとするのと体の内側からくすぐられているかような感じになって力が抜けてしまう。

どこか体の感覚も曖昧だ。息も重い。

「あなたは」

そう声が聞こえて少し体が跳ねた。彼女は目を瞑ったまま構わず続ける。

「あなたは孤独の辛さをよく分かっている。他人の恐ろしさをよく知っている。私もそうです。あなたと私は似ているわ。自分が他人と違って他人と圧倒的にずれた位置にいることを理解している。他人自分、全てが煩わしい。だけど他人が恋しい。エゴよね。……で、きることならこのままあなたとどこか遠くに行きたいわ。あなたとならどこだって行ける。そんな気がする」

猫がじゃれるように彼女は僕の顔を覗く。

僕は物言わず、口を半開きにして涎をだらしなく零すだけだ。それを彼女は舌ですくって口に戻す。

唇に舌が触れ合う。僕の吐息が彼女の口に、彼女の吐息が僕の口に入る。

まるでそれはキスのような。

船のエンジンが止まり、黒服が僕らに声を掛けた。

「着きました」

「いいところで……もう」

クルーザーは僕らを下ろすと、直ぐに元の方角へと引き返していった。

小さな港のよう場所は工事現場で使われているような鉄パイプで立てられた簡易的なもので、作りは些か頼りなかった。

岩を駆け上がり、進むと牛車があった。黒く力強そうな水牛が気だるそうに枯れ草を食^はんでいる。

僕らは荷台のような箱状のそこに入り、甚六という男は前の運転席に座る。

彼女は華奢に見えて実は力があるのか、僕のもたれる重みにぴくともしなかった。

中から見える景色はどこまでも緑が続いていて、左右の森は薄い霧が掛かっていた。

空は青く、巨大な緑の山々が雲を刺すようにしてそびえ立っている。牛は森と森の狭間の、曲がりくねった小さなあぜ道を早くも遅くも無い速度で進む。

僕は彼女に無理やり指を絡められながらそれを眺めた。その手を離そうにも痙攣するばかりで役に立たない。

暫くすると急に開けた場所に出た。田園が広がり、あちらこちらに日本的な古い家々が見て取れる。畜産をやっているのか農場のよ^うな場所も見えた。

山々が外壁のようにその集落を囲い、近くで川のせせらぎが聞
えた。

「ようこそ、私達の楽園へ」

彼女は微笑みながらそういった。

若い女性の姿が多い。雰囲気は昭和を感じさせるもので、装飾性
よりも機能性を重視したような服装だった。

彼女達は牛車を見ると大きな声でお帰りなさいと手を振った。桐
生と名乗った彼女は顔を出して彼女達に手を振り替えしていた。

不思議なことに子供やお年寄り、男の姿はない。

暫く進むと、川を挟んだ向こう側に一際大きな屋敷が見えた。白
い壁と大きな両開きの門。

怜悯な雰囲気はどこにいったのか彼女は僕に朗らかな笑みで「あ
れが私の家です」と答えた。

門の前で彼女は男を下げさせると、僕を肩で支えながら中に入っ
た。その頃には僕も僅かながらも体が動くようになっていて、ゆっ
くりと歩いた。

彼女はやはり見かけ以上に力があるようで、僕を容易に支えてく
れた。

中に通され、布団の敷かれた部屋に通された。

枕は二つ。

「あっ……」

不意に支えがなくなる。僕は布団の上に零れ落ちる。

茶色い木目の天井が目の前に広がる。横は景色を遮るものが無く
て、美しい庭が広がっていた。

背の高い竹藪が広がり、小さな池と苔の生えた味のある岩。ヒラ
ヒラと風に舞う笹の葉。

僕はそれに見とれながらこんな状況じゃなければ、絵に描きたか
ったなあと思った。

彼女は衣擦れの音をさせながら僕を見下ろした。青い着物は雑多

に脱ぎ捨てられていて今、彼女は白い着物一枚だった。

ゆっくりと障子を閉める。

「いい庭でしょう。私の自慢の庭よ」

「う、ん」

そして香を焚いた。独特の酸味があった甘い香りが部屋に漂う。

ああ、これは、僕を犯した男が吸っていたマリファナの匂い。

それから彼女は注射器を取り出し、空気を抜く。針から零れた水滴が畳みの上にぽたぽたと落ちた。

「あなたは私のことを卑怯だと……はしたないと思うかもしれませんが。でも私、こう見えてもまだ男を知らないのよ」

「あっ……そう」

黒いゴムホースが左腕を縛る。彼女は僕の静脈を一舐めすると針を近づけた。そしてにっこりと笑う

「その強がっている顔、凄く綺麗だわ」

ぷつつと針が体の中に入り、何かが血管を滑り落ちていく。

体の内側から冷たい刃が肉を食い破っているような刺激。全身を氷柱が串刺しにしているような感覚。

彼女は僕にしなだれ、ふうふうと僕に熱い息を吐きかけた。

「今、私とても興奮しているわ」

二十四粒（後書き）

この島編からちよつとありえない（いままでも当然ありえないんだけど）話が出てきます。
あと次はエロです。

二十五粒（前書き）

ガチエロ注意。読まなくても本編には関係ありません。
苦手な方、その他もろもろの理由でアウトな方は見ないように。

二十五粒

呉葉は自分の帯を使い亮平の両手を頭の上で縛った。肩掛けの白
衣着物の隙間から薄っすらと赤く染まった肌が顔を覗かせる。

彼女の手も震えていた。それを誤魔化すように呉葉は枕元に置か
れた盆から酒を取り出し煽る。

「その顔、苦しいのかしら……？ それとも気持ちがいい？」

「わから……ない」

独り言のように空ろな目で彼は言った。

亮平は長距離を走らされた犬のように息も絶え絶えだ。瞳孔は開
ききっている。

もう一度酒を口に含み、呉葉は口移しをした。舌を絡ませながら
唾液と混ぜ、飲ませる。口端から雫がだらしなく零れるが気にしな
い。

彼は自分がどうなっているのか分からなかった。

夢のようにも思えるし、現実のようにも思える。

かと思えば映画を見ているようなそんな客観的な感じもする。

意思を放棄して亮平は本能に委ねた。考えるよりも流された方が
楽だから。結果それで傷つくことになっても自分の選択ならば、納
得できる。

彼は舌を返し、こくこくずるずると生ぬるい液を啜る。

呉葉は舌が返ってきたという以外な事実に一瞬困惑した。しかし、
持ち直し舌を丹念にかき混ぜる。彼女の思いの丈を内側に塗りこむ
かの如く。

頬を搔き、歯茎を撫でる。舌を引っ張り合い、甘く噛んで自分の
口に誘い込む。

彼女はゆっくりと亮平の服を剥きながら、卑猥な音を立て続けた。
彼が半裸になると、太ももを彼の股に埋め、ゆっくりと上下させる。
熱くて硬い。

その情動は自分に向けられた物なのだと思うと嬉しくてしようがなかった。

どこが感じるのだろうと呉葉は探るように首筋を舐め、唾液のついた指で耳を弄る。片手で甘く彼の胸を撫でた。

「わっあっ……あっ」

反応を伺いながら少しずつ調べていく。耳を舐り、乳首を舐め、噛む。

脇の下は少ししょっぱい。

その姿はいつもの大人びた彼女とは違い、年相応の少女のそれだった。

亮平は舐められた箇所から自分が溶けていくような感覚に眩暈を覚えた。

まるで自分が熱せられたフライパンに落とされるバターになったようなそんな感覚。

気がつけば亮平の目の前に白い尻が広がっていた。舌が内ももを這う感覚もする。

呉葉はそそり立つそれに半ば無意識に飛びつく。獣のように涎を垂らし、口に含んだ。

舌で首の部分の汗をこそぎ、アイスを啜えるように優しく上下させる。

「……うーっ！ うーっ！」

口から離すとそれは赤く自身を充血させ、ビクビクと震えていた。その下の袋も口に含み、丹念に舌でしわを伸ばす。頬を叩くそれに笑みを零す。

亮平はどうすればいいのだろうと思い、いつもさせられているようにしようと思った。

そうしないと打たれるから。

おずおずと舌を出して頬を濡らす溝を舐め取った。

「んっ」

びくりと相手が震える。今度は深く舌を差し込む。

「……あっ」

さらさらした液が舌に零れた。

次は赤く充血した突起を啄ばみ、ちゅうちゅうと吸い付く。舌で撫でることも忘れない。零れる雫は量を増して、彼の顔を汚した。

呉葉は小さく喘ぎ、息を荒くしながらそれをしゃぶる。お返しとばかりに喉の奥までぐうっと差し込んだ。

「……………っかは」

柔らかく生暖かい締め付け。ざらりとした舌の上を滑る刺激。

亮平は急に頭の奥をがっんと殴られたような刺激に見舞われた。

腰が浮き、内股になる。汗が吹き出た。

痛みを伴うような射精。全身が砕け散るかのような快楽。血の流れが耳の中を走り、心臓が割れ鐘の如く打ち震える。

呉葉の喉の奥がっんとする青くさい臭いに犯される。ぬめついた液体が直接胃にどろどろと落ちていく。

しかし、動きをやめずより一層、激しく彼を責め立てた。口の空気を抜いて、指をしゃぶるように動かす。舌で何度も先を撫で回す。赤く膨れ上がり、びくびくと跳ね回るそれを押さえ込む。

ただ快楽の上に快楽を重ねる行為。

亮平のそれが動かなくなったのを確認して彼女は、ずるずると啜り、奥に残ったものを飲み干した。

「ふはっ……息が臭いわ」

そういつて彼女は笑った。亮平は放心したように枕を涙で濡らした。スンスンと鼻を鳴らし、小さくすすり泣く。

何故涙が出るのか分からない。

ただひたすら恥ずかしくて、男としての尊厳を犯されたような気がした。

その顔を見て、呉葉はゾクゾクと顔を赤らめる。

そして零すようにしていった。

「か、可愛い」

はだけた胸、桜色に上気する美麗な顔、それに涙が加わり、冷た

い顔は夢げな表情へと進化した。

呉葉は狂ったように飛びつき抱きしめた。汗ばむ肌に髪が張り付くが気にしない。

肌を強く啄ばみ自分の物だという赤い記しを幾重にも刻む。

手のひらに唾液をつけて、亮平のそれを丹念に揉み解す。

直ぐにそれは硬くなり、彼女を喜ばせた。

彼女は先ほどのものよりも強い薬の入ったバイアルを取り出し、注射器で液体を吸い上げる。

そして亮平にもう一度それを打った。

「……はっ……あああ！」

亮平は平常を保とうと呼吸を一定にさせる。しかし、体は彼の意思とは無関係に熱を帯び始めた。

自分のふうふうという吐息と心臓の鼓動が酷く煩かった。

彼女はそれを楽しそうに眺め、自分の股を弄った。

手がぬらりと光る。それを亮平の鼻の下につける。

「お前のご主人様の臭いよ。ようく、覚えておきなさい」

その指を口に運び、舌で液をふき取った。そして股を開き、ゆっくり腰を落とした。

ずきりと痛むが気にせず入れる。思ったよりも痛みは無い。

彼の顔を眺めながら呉葉はゆっくりと腰をグライドさせる。

亮平は恥ずかしさから顔を手で隠そうとする。しかし、彼女がそれを許すはずも無く、遮られる。

「うっ……うっ……」

「そんな、顔も、するのねっ。かわいい、らしいわ」

すすり泣く亮平を見る度に呉葉は顔を赤くし、激しく腰を動かした。

少年の上で少女が踊り、うねる。

薬のせいかな、香のせいかな、もはや分別がつかない。

ただ彼女達を快楽が支配し、快楽のみが言葉だった。

「うーーーーーっ、うーーーーーっ！」

「はっはっはっ……」

ぎゅうっとな彼女の中は亮平のそれを絞り上げ、熱い液を吐き出させた。

亮平は息を止め、全身に鳥肌を立たせ、肩を縮める。

串刺しにされるような快楽が延々と続く。

恐怖を覚えるような、脳を焼き切るような射精。

彼女は背を仰け反らせ、自分を襲う快楽の波に体を委ねる。中は痙攣し、彼の射精を長引かせようと擦り上げた。

ひと段落着く。

彼女は放心状態の彼の唇に舌を差し込んで髪を撫でた。

先ほどの貪るようなそれではなく、情熱的なキス。

そして優しく髪を指でとかし、撫でる。

主人が飼い犬を愛でるように。

「いいこね、本当にあなたは……最高よ。だから」

呉葉はそのまま注射器を手に取り、もう一度彼の腕を持ち上げた。

「もっと楽しませてちょうだい」

二十五粒（後書き）

濡れ場が一番力入ってるってどういうことだろう。

二十六粒

僕は気がつけば蒸れた部屋で天井を眺めていた。体が酷く重く、骨と筋肉がぎりぎりど軋んだ。口の中が生臭い。

夜なのか、部屋は薄暗い。

汗臭い布団をどかす。僕は裸だった。枕元には空になった小さな小瓶と注射器。

それを見た瞬間、ぞわっと鳥肌が立った。

そしてカメラのようなフラッシュが頭の中で光り、断片的な記憶が甦る。

「あっ……うっう」

体が条件反射的に反応して僕は口を押さえてうずくまった。注射痕がズキズキと痛む。

その時、すうっと襖ふすまが開いて彼女が現れた。

桐生呉葉。

「あら、目が覚めたんですね」

少し髪が乱れていて、表情に疲れが見える。白い着物を着ていて、お盆の上にランタンと大きなオニギリ。

「ごめんなさい、この部屋は電気を入れていないの。その方が風情があるでしょう？」

部屋にランタンをぶら下げ、外の襖を開ける。

満月が空に浮かんでいた。銀色の小さな星々がきらきらと光り輝いている。笹がふわりと揺れて風と歌う。

確かに風情があった。

僕の横に腰掛け、おにぎりを僕らの前に置いた。

「ほら、疲れたでしょう？ 自分ではあまり作らないからこういうのは苦手なだけど、多分大丈夫よ」

「で、でも」

躊躇う僕のことを無視してお腹はくうつと音を鳴らした。彼女は

首を傾げ、目でどうぞと施す。

僕はおずおず手を差し伸べた。

「え？」

「うふふ」

その手を彼女は掴む。そして自分の元に引き寄せて、強引に口付けしてきた。

首をずらそうにも彼女の僕を掴む手は硬く、唇をつぐもうにも彼女の舌は容易に割って入った。

僕の唾液を飲み込み、代わりに彼女の唾液を飲まされる。舌は逃げる僕の舌を追いかけて捕らえ、踊る。

ゆっくりと太ももを白い手が滑っていく。

僕は彼女の胸を押して、どうにか離れた。

腰が砕けて、息が苦しい。

「はあはあ……」

「普通の顔の亮平さんも可愛らしい」

「も、う……こういうことは、やめてください」

「あらあら、少し前まであなたは私のことをお母さんと呼んでお乳を吸っていたのに、そんなことをいうの？」

かっ顔が赤くなる。ずいっと彼女は近づいて僕の瞳を覗き込んだ。ゆっくりと舌なめずり。

「私のこと嫌いなのかしら。私は好きよ、亮平さんのこと」

「な、なんで僕を」

「簡単に言えば私と同じように歪んでいたから、かしらね。言い方を変えれば私と同じように孤独だったから。あなたの日記を見た時、私の中の足りないピースがぱちりと合わさる音がしたわ。この反応ひとつひとつが愛おいしいという感覚、あなたにも分からせてあげたい」

ゆっくり流れるように僕を押し倒す。慣れた手つきで首筋に舌を這わす。ざらりとした感覚。

頭に何かが詰まったような感覚がして、体が上手く動かない。僕

の体が僕の物ではないような違和感。

「だ……め」

「でも無理やりされるの、好きでしょう？」

「……………あっ」

両手を組み伏せられ、耳に舌が這う。

彼女が僕にまた口付けをしようとした時、僕のお腹はまた鳴った。それに彼女は目を丸くし、次に噴出した。

「うふふ、そうね。そういえば私もまだ、朝から何も食べてない。

ご飯にしましょうか」

「……………うっ」

起き上がり距離を取ろうとする僕の頬にキスをして、にこっと微笑んだ。

「塩味ね」

窓の外を眺めながら僕はオニギリを頬張った。彼女も横で僕と同じようにオニギリを食べている。

池に映った黄色い満月。手に届きそうで届かない星々。香る草木の臭い。風の音。

確かに彼女が自慢とだけあった。夜も昼も美しい庭というのはなかなか無い。

「亮平さんは……帰りたいと今でも思っているのかしら？」

「どうでしょう」

正直帰りたい、とは思っていない。確かに坂之上と下らないやり取りができないことや子供達と会えないことは少し寂しいけど、それだけだ。

もうきつと死んでしまっただろうな。そんなことを彼女も言うてたし。

人は悲しすぎるとそれを通り越して何とも感じなくなるというけど、そういうものののだろうか。

確かにぽっかりと胸の中心に穴が開いたような感じはあるけど、

それはきつと他の何かで埋めてしまえるような気がした。

こうやって人は辛いことを乗り越えていくんだろう。

「明日はこの里を紹介するわ。何も知らないと不自由するでしょうし」

「……うん」

確かに、何か知っておかないといざという時に困る。

準備もなしに逃げ出すことなんてできないし。

「服は洗っていますから、今日は着物を着て頂戴ね」

「洗濯機、あるんだ」

「クーラーも扇風機も冷蔵庫もありますよ。私はどれもあまり使いませんけど」

もしかしたら結構簡単に逃げ出せるかもしれない。

明らかにここにいたら僕はさっきみたいなことをされるだろう。

それは明らかだ。

確かにこういう場所で暮らしたいと思ったことはあるけど、そういうことをされるなら僕はいらない。

ただ、一度でいいからこの風景を絵に描きとめておきたいと僕は思った。

二十七粒（前書き）

エロ注意。シナリオには最後の部分以外関係ありません。

二十七粒

オニギリは塩味で、ごま油の香りがして美味しかった。具は甘く蜂蜜でつけた梅干。

僕のお米でべとべとになった指を彼女は音を立ててしゃぶった。

「ぷはっ……どうしたのかしら？ 顔が赤いわよ」

「あの……そ、の、桐生さん」

「呉葉、でいいわよ」

「呉葉さん、お風呂とか……ないんですか？」

「あら、お風呂に入ってしまうの？ わたし、あなたの汗の臭い、凄く好きなのだけど」

そういつてスンスンと鼻を鳴らして鎖骨を舐める。うっと僕は震えて、身を引いた。

後ろは壁でもう逃げる場所はない。

彼女は四つんばいで僕に近づく。月明かりが彼女を照らし、生々しい曲線と微笑を僕に見せた。

そしてそつと僕の耳に囁く。

「あるわよ。お風呂」

「できれば……使わせて欲しいです」

「そうね、こんなにも女の匂いと白子の匂いをプンプンさせてたら、明日笑われてしまうものね」

急に彼女は立ち上がり、僕の手を引っ張って無理やり立たせると、どこかに向かった。夜目が利くらしく、真っ直ぐ進む。

モザイク調のガラス戸を引く。そこには洗面所で洗濯機が置いてあって、どうやら脱衣所のようなだった。とすると右手の小さな扉はトイレか。

彼女は雑に服を脱ぎ捨て、僕を風呂場へと引き込む。

「ちよつと、一緒に入るなんて……」

「嫌なら、外の川で体を洗ってらっしゃい。夜だから涼しいでしょ」

うね」

「そ、それは……」

虫とかに刺されそうだし、何より人に見られたら僕はどう言い訳すればいいんだ。

川で体を洗ってました。

これじゃ変態の言い訳だ。

「それに今更裸なんかを恥ずかしがってどうするの。それ以上のことをしたというのに」

「……………でも」

僕が言葉に詰まっているをおかしそうに笑い、手を引っ張った。

彼女のは正論で僕は反論できなかった。

大きな檜の風呂。壁はタイル張り。既にお湯が張ってあるらしく、蓋から湯気が零れている。

「甚六、仕事が速いわね」

そう彼女はいうと風呂桶で風呂のお湯をすくう。僕に風呂椅子に座るようにいうとざあっと頭から流した。

もう一度すくい、流す。またすくうと今度は自分にかけて。肌をお湯が滑る。

彼女は堂々としているが僕は酷く恥ずかしい。

濡れた髪を掻き上げ、彼女は大きな鏡の水滴を吹く。

「ほら、亮平さんの体にいっぱい印がついてる」

赤い虫刺されのようなキスマーク。首から始まり胸、そして下半身へとそれは続いている。

「あらあら、そんなに恥ずかしそうにして。私にもついているんですよ？ あなたがつけた印」

ほらといって彼女は自分の胸についた赤い印を僕に近づけた。僕はそっぽを向いて、垢をこすするためのタオルを探す。

しかし、見つからない。

「あの……」

「これを探しているのかしら」

彼女はそれ泡立て、にっこり微笑む。僕は彼女の体を目に入れない様に下を向いた。

「貸して、もらえませんか……」

「私がやりますよ」

「一人でできます」

「二人でもできますよ」

「そういう問題じゃ……」

「私にやらせてくれないのならこの体をスポンジ代わりにしようかしら」

「ううっ……」

僕は大人しく椅子に座る。無駄な足掻きと思いながら目を瞑った。彼女は絶妙な力加減で僕の体を擦っていく。意外にまともで少し驚いた。

途中で止まる。何でだろうと思って彼女の顔を見た。

「ごめんなさい、ほら。中からあなたのが漏れてきちゃった」

彼女の股を濁った液体がつうつと伝っている。ごぽっという音と共にまた沢山のそれが溢れた。

「ずっと締めていたんですけど、漏れてしまいましたね」

「君は……っ!」

「うふふ、洗って下さる?」

鏡に映る僕は顔を赤くして、羞恥に打ち震えていて、彼女はそんな僕を嬉しそうに眺めていた。

結局僕らは交代で、洗うことにした僕は殆ど終わっていたので残りを全て終わらせるのに十分も掛からなかった。

湯に浸かって肺の中を吐き出す。芯から温まる気がした。

彼女も少しして湯船に浸かる。悲しいことに風呂場は広くて、湯船も人が四、五人は入る余裕があった。

そのまま僕にしな垂れかかる。

「これほど充実した日は今まで生きてきて初めてかもしれないわ。」

見て、肌がつるつる。あなたとしたおかげかしら」

「知りません」

知りたくも無い。

「……ここにいるのは嫌？　ここが嫌い？　私が嫌い？」

「イヤです。嫌いです」

「それは元の場所よりも、元の人たちよりも？」

「……………嫌いです」

「そう」

彼女は笑い、背筋を伸ばす。当然、答えるまでに間があったのなんて彼女は気がついていいるだろう。

考えてみればここは僕を知っている人間はいなくて、僕を否定する人間もいなくて、僕を虐めようとする人間もいない。

僕の両親のことを知っている人はいるのだろうか。もしも、知らなかったらそれはまさにゼロからのスタートだ。

この桐生呉葉という少女さえいなければここは最高の環境になるのかもしれない。

少なくとも僕を殴って無理やり犯そうとする人間はいないだろうし。

「どうしたんですか？　少し顔が嬉しそうね」

「何でもないです」

明日周りの反応を見よう。

蔑まれてきた僕は他人の視線には敏感だ。もしも相手が僕のことを知っていて、そういう目で見るのなら直ぐに逃げ出そう。

じゃあ、そうでなかったら？

そうじゃなかったらお前はどうするんだ？

さあ、分からない。

でもそれを嬉しいと、ありがたいと感じるかもしれない。

二十七粒（後書き）

お風呂はお約束だと思っんです。

今日のは文章が酷いので後日修正予定。

二十八粒

風呂から上がり、僕らは同じような白い着物を着た。帯の締め方が分からなくて、彼女に締めてもらった。

今は納涼ということで縁側に座り、月を眺めている。団扇を渡され、風を扇ぐ。片手にはミルクバー。

「あなたのと違って甘いわね」

「……………」

しれっとそういうセクハラを僕にする。当然、僕は無視して星を眺めた。

なかなかこんな綺麗な星は見ることはできないだろう。

「……元いた場所で、彼女でもいたの？」

「何を急に……」

急な問いかけに僕は驚く。だけど彼女の目は本気で、じいっと僕の反応を窺っていた。

嘘は許さないといった雰囲気。

「いるわけない」

「本当に？」

「嘘ついてどうするんですか」

少し考えるような顔をして、彼女は笑った。

「なんで私、こんなこと聞いたのかしら」

「さあ？」

「ふふ、おかしいわ。……………ちなみに私も恋人はいないわ」

すうっと横に近づく。僕の片手の上に手を添えた。

僕は何か変な空気に腰が引けた。普段とは違う焦りが汗となって額を滑る。

「ねえ、私達……似ていると思わない？ 互いに孤独で、でも人が恋しくて。なのに人が恐ろしくて。似た物同士、一緒にならない？」

私好きよ、あなたの顔も考え方も喘えいでいる時の声も、全部全部」

「耳を舐めながら言わないで……ください」

「……ねえ、どうかしら。悪い条件じゃないと思うの。ここで人並みの生活をしたならそうするべきだと思うわ」

肩にもたれて、そういう。少し脅しの入ったその言い方に僕は苛立つ。

彼女からゆっくりと離れた。

「悪いんですけど、僕そういう言い方する人嫌いです」

「なっ……!! あなた、私の誘いを断るといの？ 姫巫女であるこの私の！」

「君が何者だろうが僕には関係ない。ただそういう物言いの仕方は人として間違ってるし、相手と対等でいようという意味を感じないよ」

彼女の顔に赤みが差した。ふるふると振るえる。

何も言わないのはきつと言いつ返しえないから。僕はそのまま星を眺めながらアイスを頬張る。妙に甘い。

パンと呉葉さんの手が僕の手を叩き、アイスが棒と共に地面に投げ出された。そして僕の両手を押さえながら押し倒す。万歳してるような形。

「私と付き合いなさい」

「僕に酷いことをしたとか、そういう気持ちはないんですね。呉葉さんは何を焦っているんですか？」

「……犯しますよ」

「どうぞ」

星空が凄く綺麗だ。月が丸く僕らを笑って見ている。

彼女は手を離し、髪を掻き上げた。立ち上がり、家の奥へと進む。

「後悔しますよ」

「君が僕に？ 僕が君に？」

「……………」

僕らは顔を見合さず、互いに詰めすぎた距離を少し離れた。

早速、後悔した。嫌がらせの如く、布団は一つしかなくて、勿論僕らは隣で寝ていて、互いに背を向き合って横になっていて。

「ううっ……」

彼女のすすり泣く声でまったく寝れない。

呪詛のように僕に震える声を聞かせる。天井の木目を眺める作業もう飽きた。僕がうとうとすると彼女のかかどが僕のひじを蹴り上げるのだ。

やっぱそうしなきゃだめなんだろうか。

いや、でも。

ううん。

向き直し、ゆっくりと近づいて、髪を撫でた。少し汗ばんでいるのか熱い。

彼女はびっくりと一瞬震えたが直ぐに落ち着く。

彼女も振り向いて僕を見る。薄暗闇の呉葉さんは鼻が赤くて、目から真珠のような雫をポロポロ零している。

「私と番に……なってくれのかしら？」

鼻声でじっと僕を見つめる。

「それはだめだけど……友達になら」

妥協した。

僕は今妥協しました。

ずうっと鼻を吸って彼女は僕の胸に飛び込む。

「優しいんですね。それとも他人を傷つけるのが怖いのかしら？」

「他人に嫌われるのが怖いんだ」

「そう」

「君はそういうことって……ない？」

「その前に他人との接し方が……私には分からないわ。だから他人と一緒にいようとするんじゃないくて、拘束してしまおうとしてしまのね。私は」

「距離感が掴めない？」

「そう、ね。近づき過ぎたり……遠すぎたりしてしまおうわ」

「君は偉いよ。自分から近づこうとしてるんだから。僕はそれすら思わない」

胸の中の頭を撫でる。くすぐったそうにそれは腕の中で震えた。

「でも、他人は私と違うわ。私と考え方……脳の仕組みが違う。結局、相容れない」

「それは少し分かるな」

「……あなただけが私のことを分かってくれる」

「どうして？」

強く彼女は僕を抱きしめる。僕もそれに答えを返すように少し強く抱きしめた。

華奢なガラス細工。そんな抱き心地。

僕の腕の中の彼女は今にも崩れ落ちそうだった。割れてしまいそうだった。

「あなたの手帳を覗いた時、あなたの書いた小さな言葉が私にはよく分かったわ。あなたのその時の気持ちも辛さも喜びも。情景が脳裏に浮かんだわ。まるで自分の言葉、自分の記憶のように」

気がついたら好きだったと彼女は小さくいった。

そして私を嫌いにならないでと、私から離れないでと。

零れた水を必死にすくうように震えた手は僕を掴み、服にしわを残す。

僕は彼女の背中をぽんぽんと優しく叩きながら歌った。

「ねんね、ころりよ」

言葉が続けることに彼女の力は緩み、すすり泣く声は静かな寝息に変わった。

二十九粒

目を開ける。彼女はどこにもいなくて、彼女の寝ていた場所も冷たかった。

ふわりと鼻をくすぐる味噌汁の匂い。ぐうっとお腹がなった。そういえば昨日、僕はおにぎりしか食べてない。

僕は立ち上がり、布団を畳む。しまう場所が分からないから隅に積んでおいた。

昨日は直ぐにここに連れてこられて、夜は引きずられたせいで見ることができなかったけど、この家はなかなか広いらしい。

襖を二回ほど開けて、僕は奥に進んだ。台所らしい場所で彼女が割烹着姿で忙しく動いていた。

味噌汁と魚を焼く匂い。

「おはようございます。直ぐできるから、顔洗ってらっしゃい」

「うん」

脱衣所に向かい、桶に水を張り顔を洗う。

なんだか長年連れ添ってきた妻みたいな反応だった。僕も特に違和感なく反応したし。

うがいをしてタオルで顔を拭いた。

台所を覗くともう彼女はいなかった。

「こっちょ」

声のする方に進む。台所の直ぐ傍に部屋があった。引き戸で区切られている。

中は畳みで四角くて丈夫そうなテーブルが置いてあった。

彼女はそこに座り、僕に目で僕にも座るように施す。

座布団の上に座ると、既に茶碗と箸が置かれている。目の前には脂の乗った鮭のハラミと白菜の漬物。

「はい」

差し出される白い手。

「え？」

「お茶碗」

「ああ、はい」

呉葉さんは茶碗を受け取り、ご飯をよそう。次にお味噌汁。白味噌に油揚げと大根を細く切ったものが入っていた。

急に彼女がぱんと手を合わせる。僕もそれに倣って合わせる。

「いただきます」

「い、いただきます」

「どうかしたんですか？」

「いや、料理するような感じには見えなくて……」

「昔、母の手伝いをしてましたから、一通りのことはできますよ。」

……といっても最後に手伝ったのはずっと前のことなんですけど」

「そういえば……昨日大人や子供を見なかったけどどうして？」

味噌の香りが口に広がる。大根は柔らかくて歯ざわりがいい。

「大人は寿命で、子供はみな病で死んだわ」

「……………あの、ごめんなさい」

「いいのよ、あなたは何も知らなかったんだから」

彼女は上品に味噌汁を啜り、漬物を口にした。

美味しいと僕に微笑む。

「そういえば随分と久しぶりね、他人とこうしてご飯を食べるのなんて」

「そういわれてみれば僕もだ」

「あら、施設では子供達と一緒にご飯を食べていたんじゃないんですか？」

「子供達が食べてる間はみんなの世話で全然。落ち着いてご飯を食べられるのはその後」

もうあの騒がしい朝は二度と拝めないのかと思うとやっぱり胸の奥が痛んだ。

でも、死んだ人間にどうこう思ったってしょうがない。ぐずぐず言っていると余計に辛くなるだけだ。

だけどやっぱり痛い。

僕は胸、心臓の部分を押さえて息を吸う。気がつけば隣にそれを行った犯人がいて僕の背中を摩っていた。

「はは、おかしいな。子供を殺した犯人が僕の背中を摩ってるなんて」

「……正確には私の指示じゃないわ。昔からのルールで、こればかりは私でも変えられないの。ごめんなさい」

僕は無理に笑って気にしてないと心の籠らない声を発した。

食事を再開する。気がつけば彼女は正面から僕の横に移動していた。

最初は僕の体を気遣うようだったそれも気がつけば「背筋をぴんとさせなさい」とか「ちゃんと茶碗を持つ」などの母親のようなもの変わっていた。

食事を終わったあとは僕が食器を洗った。

誰かに何かしてもらったら必ず別の形でお返しをするというのが僕の中のルールだ。

彼女は傍でお茶を飲んで僕を見ていた。

「水や電気はどこから来てるの？」

「当然、浄水場と発電所があるわ」

「ここは大人もいないのに何で余裕があるの？」

下手したら日本の田舎以上に設備が整っているのかもしれない。どの家ものどかさそうで、貧困とは無縁そうだったし、強ち間違いじゃないのかも。

「亮平さん。もしも、虫歯や癌の治療薬がこの世に存在しているとしたらどうしますか？ 若返りの薬も強ち夢じゃないとしたらどうしますか？」

少し声色が変わる。なんだか空気が張っているような気がした。

僕は彼女を見ずに作業を続ける。

「なんとも思わないかな」

健康で若い僕には関係の無い話だ。死んだ人を甦らせることがで

きるというのなら別だけど。

「そうですか。まあ、そういうことです。私達は世界から保護されているといっても過言じゃないんですよ」

もしかしたら、僕がみたこの村はほんの一部にしか過ぎないのかもしれない。

島の裏側に巨大な研究所みたいなものがあってもおかしくない。

自分が末期のがん患者でお金持ちだったらその薬にいくら出すだろうか。世界のがん患者はその薬が存在していると知ったらどう思うだろうか。

そう思うというろ納得できるような気がした。

気がつけば彼女と縁側に座り日向ぼっこしていた。布団を干していてひと段落ついたら、彼女がお茶を入れてくれて、今に至る。

彼女は僕の膝の上でくうくうと寝ている。眼球がピクピクと動いてる辺り、熟睡してるようだ。料理を作るために朝早く起きたせいなのかもしれない。

そんなことがあって、今更起こすのも何だか悪いような気がして、僕はそのまま放っておくことにした。

髪を撫で、頬を摘む。くすぐったそうに少し彼女は身をよじった。

「こうして僕は適応していくのです、と」

しかし、見ていて飽きない庭だ。奥にも続く道があるらしく、何だかとても面白そうだった。

池を二匹の鯉がゆらゆらと泳いでいる。竹は風が吹くごとに体をしならせ、ざわざわと揺れる。

日本的な情緒溢れる雰囲気。

風が吹き、笹の葉が彼女の頬に掛かる。僕はそれをそっと摘んだ。彼女は薄っすらと目を開ける。次に顔を起こして僕を見た。

「あ……私、寝ていましたか？」

「おはよう」

「……………ごめんなさい。今日はこの里を紹介するという約束でし

たのに」

「いや、別に僕は構わないけど」

「今すぐ行きましょ……あっ」

「わっ」

彼女は立ち上がりうとして、足をふら付かせ、僕に倒れこんだ。それを抱きかかえる形で後ろに倒れる。

顔が近い。

「早くいなくていけないのですけど……このままでもいいと思う気持ちもあるわ」

「そうかな、僕は早くどいてほしいけど」

彼女はゆっくりと僕に顔を近づけて鼻と鼻を擦り合わせる。唇は合わせない。

相手の吐息が僕の口に入る。または逆か。

僕が彼女の匂いを嗅ぎ、彼女は僕の匂いを嗅いだ。歯を磨いた後だし、顔も洗ったはずだけど何だか妙に恥ずかしい。

呉葉さんの瞳は僕を逃さない。何度もキスのように鼻を擦り合わせてくる。何故か息がどんどん荒くなっている気がする。

おでこが合わさる。

「早くどかないといけないわね」

「うん」

「このまましたら私も止められないと思うの。それこそ猿のようにね」

「うん、だから……」

「でもキスくらいは許されるんじゃないかしら」

そういつて何度も舌なめずり。はあはあという吐息がふっふっという発作的な呼吸に変わっている。

「多分駄目だと思うよ。目が据わってる」

「そうね、私も駄目だと思うわ。……だからぎゅうっと抱きしめて頂戴」

「え?。」

「そうしてくれれば我慢できるわ。さ、早く」
僕はうんと唸り、恥ずかしさとそれでいいのだろうかという迷いを持ちながら彼女を抱きしめた。

二十九粒（後書き）

なにこいつら。

三十粒

彼女が途中、僕の鎖骨に吸い付くというアクシデントがあったけど、どうにか僕らは通常に回帰した。

村を案内される。

牛車を出すか、と聞かれたけど歩いた方が楽しいような気がしたので僕はそれを断った。

来る時には気がつかなかったけどビニールハウスなんかも見える。話を聞くと果物や野菜を作っているらしい。農場では主に牛乳を作っているんだとか。

「やっぱお肉食べるためには屠殺もここでやってるの？」

「そんな怖いことを私達がやるわけないでしょう。外注ですよ」

基本的小金も時間も有り余っているので暇つぶしの面が強いのだと彼女は言った。

暫くいろんな場所を覗いていると学校のような施設についた。当然人が居て、過疎地のごとく少ない生徒数。

生徒のみんなは外からくる人が珍しいのか僕を見に呉葉さんに挨拶しにきた。

僕はきやあきやあ人に揉まれ、どうしていいか分からず呉葉さんの後ろに隠れた。

「よければ、私たちの授業も見えて行ってね！」

「……あ、はい」

休み時間が終わったのとことで彼女達は手を振って、古い校舎に戻っていった。

「どうでした？」

「……なんかパワーあるね」

「可愛い子たちでしょう？」

「うん、かわいらしいね」

「それは私よりも？」

「え？」

「どうなんですか？」

「……お、同じくらいかな」

「そこは君が一番だといってほしかったわ」

微笑みながら彼女はいう。

僕はちよつと校舎に入り、授業を覗かせてもらった。

不思議と生徒も教師も女性しかない。

「いいか、ヒッグス粒子というのは素粒子の自発対象性の乱れが……」

別の教室。

「デデキントゼータ関数はこの K が有理数の場合に限り、リーマンゼータ関数に……」

また別の教室。

「はい、デキストロメトルファンです」

「正解」

僕は眩暈を覚えて校舎から出た。彼女曰く中等部の内容とのことだが、明らかにそのレベルを逸脱している。

一生掛かっても彼女達に追いつくことはできないだろう。

果樹園を覗くと、忙しそうに日焼けした女性が動いていた。

呉葉さんが声を掛けると作業を止めて、近づいてきた。

恐らく年のころは僕らと同じだろう。

下働きと思わしき少女がやっと休めるといった顔で安堵のため息をついた。

「なーに、休んでんだよ。お前はちゃっちゃと動け！」

おかっぱの少女はなみだ目で大きなプラスチック製の箱を抱えて走っていった。

「いやー、すまん。で、なによ」

笑いながら首のタオルで汗を拭く。

意思の強そうな瞳にショートカットの髪、黒いティシャツで下半

身だけつなぎ姿。

「例の件です。こちらが、亮平さん。ほら、挨拶なさい」

「あの、どうも……」

「ああ、アンタが例の……」

好奇心な目線で僕を見る。少し僕の胸が跳ねた。

例のってどういう意味なんだ。何か僕のことを知っているのだろうか。

「アンタさ……」

「うん」

「モモ喰う？」

「え？」

ここで育てているのはモモなのだと思葉さんが僕に教えてくれた。先ほどから匂う甘い香りはモモの香りだったのか。

「この紙袋に入ってるのがモモなわけよ。果汁たっぷりでうんまいぞー！」

にっと人懐っこそうな笑みで僕に語りかけた。結構いい人なのかもしれない。

僕に美味しいモモをご馳走してくれるとのことなので、僕はそれにつられて、彼女についていった。

「待ちなさい、瑞樹！」

「何だよ、姫巫女。……あたしになんかお願いに着たんだろ？ だったら、あたしの機嫌は悪くさせないほうが得策じゃないのか？」

ミズキと呼ばれた彼女は思葉に振り向かず、そういった。

二人はあまり仲がよくないのか、互いにどこか余所余所しく、冷たい声だった。

「分かりました。ここで待っています」

「そうしなよ、お姫様。それにどうせ、モモを取ってくるだけだ」

少し離れた場所に森の中にそのモモの木はあった。近くから川のせせらぎが聞こえる。

「ここのはあたしの個人用でとっておきなわけよ」

黒くて重そうな鍬を受け取り、チョコキンと実を傷つけないように切った。簡単なことだけどやったことがなくて少し緊張。

袋越しにも香りが高いのが伝わる。

「それでさ、亮平くんだけ……アンタ、もうあの女に喰われたんだろ？」

「……………え？」

「隠さなくていいぜ。そんなに女の匂いをぶんぶんさせてりゃ、誰でも気がつくって」

少し近寄って瑞樹さんはおかしそうに笑う。

僕は一度唇を濡らして、顔の赤みを抑える。

「……そんな、僕は」

「ありゃ、そんなに焦るとは思わなかったな。外で散々そういうことされてきたんだろ？ 今更恥ずかしがってどうすんだよ」

「なんで君は」

「この奴らはみんな知ってるぜ。お前の日記のコピーをみんなで回したからな。審査でどういう人間か知るため……ってその顔じゃ何にも聞いてないのか？」

「審査って……うあっ！」

ずいっと急に距離を詰める。そして足払いが入り、僕は後ろ向きに倒れた。彼女はそのまま倒れた僕に覆い被さる。

「ほんと潰しがいいのある甘ったれた顔してるな、アンタ」

「なっ……やめっ」

両手を掴まれる。彼女の見下すような薄ら笑いに既視感を覚える。

「別に構わないだろ？ どうせ、アンタのこれからの回数に一回プラスされるだけなんだしさあ」

彼女の顔が逆光のせいで黒く染まる。

黒い怪人は捕らえた獲物の肉を喰らおうと息を荒くさせた。白い歯だけが黒いシルエツトの中にやりと笑う。

「……へえ、薄汚い男娼のくせにあたしをそんな目で睨むんだ。面

白いじゃん、ますます潰しがいがあるねえ。つかよく考えてみたらおかしい話じゃないの？ 呉葉に抱かれておいてあたしに抱かれるのは嫌なわけ？ それとも亮平ちゃんはあの“角砂糖”がないと駄目なのかな？」

それが何を指しているのか分かって僕はゾクゾクと鳥肌を立たせた。

嫌な圧迫感がこめかみを突く。

角砂糖。

あの注射。

喉がごとりと鳴る。汗がじつとりと額に滲んだ。

「おお、いい目になってきたな。いい子にしてたらあとで好きなだけ……」

「何してるんですか？ 瑞樹」

瑞樹さんは僕から飛び跳ねるようにして離れた。

「あたしが倒れたところにこいつがいてさ。いやあほんと、すまん」
そういつて彼女は倒れたままの僕ににこやかに笑いながら手を差し出した。優しそうな言葉と裏腹に弧を描く目の隙間からは黒い瞳が僕をじつと睨んでいた。

小さく口は喋るなど動き、次にニヤニヤしたものに変わった。

僕はその手を取るのが怖くて、あとずさるように自分で立った。

三十一粒

「……今のは不問にします」

「ありがたいね。で、その代わりについてことだろ？」

「ええ。交流会のことで少し話があります」

呉葉さんは僕をチラリと見ると、瑞樹さんの顔をもう一度見た。
静かなアイコンタクト。

彼女はポケットに手を突っ込んで笑った。小さくその場で首を振る。

「ここで離せばいいじゃん。それとも何、こいつには話せないことなのか？ あたしは彼にも知る権利、あると思うけどね」

「別にやましいことじゃありません」

「じゃあ、ここで話をして文句ないってわけだ。よし、じゃ早速聞かせてくれるかな、お姫様」

彼女は小さくため息をつく。そして真っ直ぐ瑞樹さんを見ていった。

「交流会の復活式と講師の話、あれを凍結します」

瑞樹さんは顔を上げて、目を見開いた。

「……………アンタ、それがどういう意味か分かってんのか？ いや……あんたがそれをいうってことの意味を分かってんのか？ 他の連中はどうする！ 普通の奴らはそれでいいかもしれない。だけでも、今まで辛い思いをして我慢していた奴らにお前はまだ苦しめていうのか？ 狂気の沙汰だぜ、そりゃ」

「いろいろ、反発もあるでしょう。だから代表である、あなたにまとめてほしいの」

言い終えると彼女は目を伏せた。

それを見た瑞樹さんは歯を剥き出しにして、呉葉さんを睨む。

永遠にも続くかと思われた沈黙の中、瑞樹さんが搾り出すように言葉を零した。

「……………やってやるよ。文句は全部あたしが引き受ける。でもよ、

自分の足であいつらに出向いて、自分の口であいつらに説明しろ！
当然、この甘ったれにも必要最低限のことを教えてやれ。それが
あたしの条件だ」

「元よりそのつもりです」

呉葉さんはそのまま、背を見せる。僕は置いていかれないように
彼女に追いかけた。

「おい、アンタ」

「な、なんですか？」

「忘れもんだ」

瑞樹さんはぽんと僕にモモを投げた。胸元にそれが飛び込む。

僕はしっかりとお辞儀をしてその場を後にした。

道を歩く彼女は物を言わさぬ迫力を持っていた。質問することを
許されないような重い空気。

下種の勘繰りという奴かもしれないけど、彼女は里のみんなと仲
がいいというわけでもないようだ。

僕らはそのまま果樹園を離れ、牧場に向かう。そこではぼんやり
とした感じの女の子が牛や羊の世話をしていた。

二匹のボーダーコリーが元気に農場を走り回っている。

「ああ、桐生さん。こんにちはー。んでそっちが亮平くんだね。よ
ろしくね」

「あ、はい。よろしく」

僕は両手で激しく上下に握手される。彼女はつなぎを来ていて、
一部が少し……いやかなり大きかった。

「今度の交流会ではあたしんところが作ったバター使うらしいから頑
張らないとねえ。チーズもあるですよ」

「そのことで少し話があるの……」

彼女と呉葉さんは奥に行き何かを話していた。牧場の彼女はあか
らさまに悲しそうな顔になり、うんうんと頷いている。

暫く話をすると呉葉さんは先ほどと同じような仏頂面で行きまし

ようと僕にいった。つなぎの彼女は元気なさそうに微笑んで僕に手を振っていた。

そんなようなことを繰り返す。

野菜畑で、川で、森で、彼女は何かを少女達に不幸を振りまいているようだった。

狩人らしい女性から別れを告げられ、僕らは森からあぜ道に戻り、歩いた。些か足が痛い。

「なにかしら、あれ」

「何が？」

「今の子にデレデレして、何ですか？　あなたは女なら誰でもいいのかしら？」

「何をそんなに苛ついてるの？」

「別に苛ついてなんか……。ああ、薰子の時も胸ばかり見ていたわね。あの子、胸大きいわよね。私と違って」

温もりの籠らない笑み。冷笑。

首だけ僕の方を向けて、彼女はそういう。

何だか妙に突っかかってくる。

きつとそれは何か嫌なことをしてるから、だろうと思う。

「……君は君のしなくちゃいけないことをしてるだけだ。君は何も悪くないよ」

「どういふことかしら？」

「どんなに辛いと思っても、後に繋がる幸せがあるならそれは決して間違いじゃない。僕はそう思う」

「あなた……」

「ちよつとクサかったかな……」

彼女は僕のその言葉にぴたりと足を止めて、振り向いた。そしてそのままタツクル。

肺の息をひねり出しながら僕は草むらに身を埋める。

「こほっ……なに？」

「あなたは、最高よ」

嬉しそうに微笑み、僕に頬擦りした。きっと彼女が犬なら尻尾が左右に振られているのだと思う。

「だからこそ私は、亮平さん……あなたを！」

そういいながら滑るように僕の服を脱がす。耳をちゃぷちゃぷとねぶり、首筋を舌でなぞる。

「ふあっ」

「切ないでしょう？ 何か物足りないでしょう？ 私はあなたと歩いている時からこんな気持ちだったのよ？ 体が熱くてしょうがない。そうでしょう？」

僕の弱点を知り尽くしているかのような動き。僕が横を向けば彼女は耳の裏を舐め、手で顔を覆うと脇の下を舐める。

獣のように息を荒くして、早々と服を脱がそうとする。彼女の啄ばむようなキスが体を走る。

「だ、れかに……みつか、るっ」

自分の息が熱い。喉が枯れる。

ここは一本道で、誰かがここを通れば直ぐに僕らは見つかってしまう。先ほどの別れた女の子が道を翻してきただけでアウトだ。

彼女は愛撫をやめず、目を三日月にさせながらの耳をなぞって囁いた。

「みんな知ってますよ、私たちがどういうことしてるくらい。こんなに私の匂いが染み付いていればそれは、もう。ほうら、キスマークもこんなにいっぱい」

そういつて指の腹で僕を首をつうつと撫でた。

「やめ、てください」

「どうしてもだめ？」

「どう……しても」

「なら、キスだけ……キスだけは許してちょうだい」

僕が返事をする前に彼女は僕に口付けをした。頭を両手で固定し、髪をくしゃくしゃと撫でてくる。

舌はくるくると僕の舌を撫で回し。熱く絡み合う。
汗のように互いは唾液を口から零し、熱に溺れる。酸欠が心地よい。

キスをしながら彼女は赤く充血した僕の耳を唾液のついた指で摩擦した。

何分経ったのか分からなくなった頃、僕は息苦しさから彼女の胸を押して、大きく息を吸った。

吐く息が彼女の匂いに染まっている。顔が必要以上に赤くなる。
少し唾液が器官に入ったのか咽た。

「……帰り、ましよう」

「続きは……？ そんなに美味しそうに実らせて、私の前にぶら下げておいて続きは無しとあなたはいうのかしら？」

「帰りましよう」

「……………そうね、帰りましようか」

僕は乱れた服を直しながらほっと息をついた。彼女の顔を見る。

獣の目だった。

熱に浮かされたような瞳。

瞳が笑い、僕に語りかけてくる。

続きは家でと。

僕は首を横に振る。そういう意味で言ったんじゃないと。

だけど彼女にはそれは伝わらない。

そして白く細い手が僕に差し出された。

「さあ、早く帰りましようか」

三十二粒

汗ばんだ手が僕の手を掴み、引っ張るようにして前へと勇み足で進む。

途中、人気の無い水車を指差して僕を見た。

ここはどうか、と。

僕は首を振って断る。

ああ既に、僕の中でも確定事項になりつつある。

彼女はじらされているとでも思ったのか顔を上気させて足を速めた。

今にも駆け出しそうなテンポ。

先ほどランシーバーのようなものであの黒服に布団と風呂の準備をさせていたのが遠い過去のことのようだ。

やっとのことで村の入り口に入った僕ら。彼女は握る手を強めて一歩一歩力強く前へと進む。

「あ、桐生さん……と亮平さん！」

「こんにちはー」

その言葉に彼女はぴたりと止まりその声の方を向いた。僕もそれに倣って振り向く。

学校の生徒さんだった。彼女達は黒っぽい学生鞆を持ち、僕らに近寄った。

「どこかの帰りですか？」

「ええ」

「二人つきりなんてアヤシイー」

そういつて僕らをからかう彼女達。僕はそれに困り顔を作り、呉葉さんは無表情で答えた。

「あの、ごめんなさい。私、これから亮平さんとセックスするため急に急いでいるの。もう、いいかしら？」

「……………」

その言葉に僕を合わせて三人が固まった。

彼女は三人の顔を一樣に眺めて、頭を下げてその場を離れた。

僕もそれに引きずられ、自分でもよく分からない顔で啞然と口を開いて佇んでいる少女達に手を振った。

さようならか、ごめんなさいかは僕にも分からない。

家に着き、ガラガラと引き戸を開ける。それを彼女は急かすようにぴしやりと閉じた。

靴を脱ごうとした矢先に彼女に後ろから突き飛ばされた。鼻は打ちまいと両手について防ぐ。

起き上がろうとしたら彼女が僕に覆い被さった。体は仰向けに転がる。

彼女は僕を見つめながらふうふうと息を切らし、帯をその場で緩める。汗ばんだ額と首筋から果物のような甘い香りが漂う。

緩めた着物の隙間へと僕の手を誘う。

彼女の体臭と熱気を感じ、その後に甘暖かいぬめり気。

小さく喘ぎ、彼女は手をきつく掴む。

それはドロドロに溶けた^{るっぽ}坩堝。

それはさながら生き物のように涎をほとばしらせ、ぬるぬると蠢く。

手を離そうと動かすると、指がそれに絡まり、望まない効果を生んでしまう。

「うふふふ」

「わわわわわわわわっ……」

熱い液体に手はドロドロに汚れ、ふやけ、雫はぼたぼたと僕のズボンの上に落ちた。

やっこのことで手を引き抜く。手はぬるりと光っていた。

それが何なのか、何故そうなったのかが分かってしまい頬がかあつと熱くなる。

呉葉さんは可愛いと微笑みながらキスを浴びせる。

「……せめて、あの、お風呂」

「私は亮平さんの匂い、好きよ。汗ばんだ肌の匂い、凄く興奮するわ」

僕の髪に鼻を押し付けてすうっと息を吸った。

彼女の着物は既に肩から腕にその支えを預けていて、僕の目の間にはどこかの裸婦像のような艶かしく鈍く光を反射する肢体が広がっていた。

鼻は僕的首筋に移り、それはキスに変わり、舌という名の愛撫に移る。

「……布団、で」

「いやとは言わないのね。いやと言ったところで止めはしないのだから」

ズボンも下着ごと脱がされ、唯一残っているシャツも無くなるのは時間の問題だ。

木の床は少し冷たくて硬くて痛い。

だから、という訳じゃないけどせめて布団の上がよかった。

だけど彼女はそんなことはお構いなしで、僕のそれを押し当て、そこに差し込んだ。

ざらざらした壁がぐるぐると擦り上げて伝えてくる快楽に既に目の前がチカチカする。

彼女は自分の口端に零れた唾液を腕で拭い、溶けた目で僕を見つめた。

お互いの呼吸がダイレクトに相手に伝わる。鼓動は重なり、血の脈動を早くする。

「……ふふふ、最高よ。本当にあなたは最高ですよ」

彼女はそういつてキスをせがみ、ゆっくりと腰を動かした。

彼女の一举一動が僕の呼吸、しいては思考すらも支配していくような恐怖。両手で顔を覆うけど、やっぱり彼女の手によってそれは遮られる。

溶け合うようにキスをして、溶け合うように肌を合わせ、溶け合うように僕は射精した。

頭をガンガンとバットで殴られているような射精。下半身が破裂したような射精。ぎゅうぎゅうと彼女の中は締め付け、最後の一滴まで絞り上げるかのように動く。変な薬は使われていないはずなのに、それに匹敵するほどの快楽。

全身が痙攣して、どうでもよくなる感覚。視界が霞む。

涎が口の端から零れ、彼女はそれを舌ですくう。子犬のようにぴちぴちと。

「あがつ……」

「……………ふう、あれほど薬を使って体に教え込んだんだもの。こうなってもらわなきゃ私も困るわ。これからは私の顔を見るたびに滾るようになるわよ」

髪を掻き上げて笑う。上品に。

僕はまだ終わらない快楽に鳥肌を立てて波が通り過ぎるのをただひたすら待った。

震えが治まると、何だか僕は酷く泣きたくなってその場で泣いた。快楽が怖くて泣くのか、その行為自体が悲しいのか、ただポロポロと目から涙を零す。

よく考えれば、僕はこうされる度に泣いている気がする。

「ああ、可愛い。可愛いわ！」

彼女は僕を胸の中に抱きしめ、僕の頭を撫でた。

「ぼ、ぼくは……辛いよ」

「あとで飴あげるわ。なんなら他のいいものあげましょうか？ 例えば絵の具と画用紙とか」

ぐずぐずと泣く僕の動きが少し弱まる。彼女はそれににんまりと微笑む。

「蔵にイーゼル……だったかしら？ あれと絵の具が残っているわ。筆も画用紙も確かあったと思う」

「……本当に？」

「ええ、だから今は私のことをご主人様、と呼んでいうことを聞いてちょうだい」

なにがだから、なのかはよく分からない。

でも気がつけば僕の涙は止まっていて、口は自然にその言葉を口走ろうとしていた。

「ごしゅじん……さま」

彼女は無言で僕に口付けをして、据わった目で僕を見た。
それから僕の記憶は飛んだ。

三十二・五粒

「まだ怒ってるんだ」

少女の帰りにも何の反応も示さず、彼女はじつとソファの方を向いていた。

スーパ―の袋を床に置き、少女はソファから顔を出して彼女の見つめているものを見た。

「亮平君に何かあったみたいだ」

その顔に笑みはなく、彼女は爪を噛みながらソファで膝を抱いていた。

ガラスの小さなテーブルには起動したノートブックが三台彼女を囲うようにして置かれている。

それぞれが別の何かを映し出していた。

「それで？」

「今日、亮平君が私に会いに来なかったんだ」

「用事があったとか」

「だとしても彼なら何らかのメッセージを私に伝えるはずだ。そう私は言い切れる」

「言い切れるんだ」

彼女は首をソファに仰け反るような形で少女をみた。髪の毛が床に流れる。

「彼は他人を傷つけることを恐れている。それはイコールで自分を傷つける行為だと知っているから」

「だから伝えないはずがないってこと？」

「それに彼の服に縫いつけた発信機が反応しない」

「かなり腹黒いんだよ」

「恋は戦争だよ」

悪びれる様子もなく彼女はそういう。少女はソファの側に移動し、腰掛ける。

「なんか動きはあった？」

「先ほど彼の戸籍に関するデータが消えた」

「随分と大掛かりなことするんだよ」

ノートブックの一つがアラートを鳴らす。彼女は即座に顔を起こし、それに向かう。

コマ送りにしたような写真が映し出される。黒塗りの車と三人の人間を頭上から捉えた写真。

「わざわざ、そんなプログラム組んだんだ」

「もっと早く気がつくべきだったんだ」

「何が？」

「彼は私に“両親は自殺したとは思えない”といったんだ。それで気になって調べていたら、幾つか奇妙なことが分かった」

「車で崖に向かって落っこちたんじゃ？」

「発表によると崖のカーブを曲がりきれず……ということになってるが、何故世間で注目されている時期にあんな死に方をしなくてはならなかったんだ？ それに何故、注目されいたのにも関わらず、その現場を目撃した人間が一人もいないんだ？ そして何故、運転手はハンドルを握らず、死んだんだ？」

自問自答のように呟く黒髪の彼女に少女は笑っていった。

「ようは、全てが彼を孤立させるようにできてたってことなんだ」

「うん、私もそう思う。明らかに他殺なもの、彼が施設に入ることになったのも全て、彼を孤立させるためにあるのだと思う。この世界に居場所が無いと感じている彼が、もしも意図的に作られた居場所を心地よいと思ったらどうなるか……」

「それか、辛いことをされても辛いと思わせないためかもね」

「どちらにせよ、彼に対して何らかの意図が介在しているのは確かだろうだ。それは今回の誘拐で確かなものになった」

彼女はキーを叩き、車の行方を追う。地図に浮かんだ黒点は飛び飛びに港のある方向へと流れていく。

少女は飽きたのか小さな欠伸をして買ってきた饅頭を頬張った。

「その彼はいまだどこにいるんだよ」

「それが途中まで追えたんだが、海上で船が消えてから行方がわからない」

「お手上げだ」

そういつて少女は手を上げた。表情は相変わらず無表情に固定されている。実際には笑っているのだがその表情を読み取ることのできる人間は今ここには居ない。

ポンと音を立てて別のノートブックがポップアップウィンドウを立ち上げた。彼女は画面を見る。

「……妙だな」

「妙だよ」

画面には彼のいた施設の職員数人が変死を遂げたという記事。

「彼がいたという事実を消しているのか……。いや、しかし意味が無い。彼は既に行方不明なのだから放っておけば風化して忘れ去られるはずだ」

「きっと、そうしたい人がいるんだ。彼の汚点を記憶を居場所を全部ひっくるめて消す。……捻じ曲がった愛だよ」

「君がそれを言うのか……」

「で、どうするの？ このままどとみんな死んじゃうよ」

「今、子供を助けるためのバスを送った。君の施設と名義を借りるよ」

「子供だけなんだ。施設員は？」

「……自分の施設の子供に手を出すクズなんて消えた方がいい」

そういつて彼女は即座に園長名義で旅行バスの手配をする。そのまま少女の息の掛かった施設でほとぼりが冷めるまで面倒を見てもらう。

「その怒りは自分に向けられたもの？ それとも施設の職員？ それとも彼？」

「……………分らない」

彼女は昨日、傘を受け取ろうと彼の後を追いかけた。それは彼と会うための口実だったのかもしれない。

ただ彼女は彼の後を追いかけて、施設で彼を見つけた。

窓から見える彼は子供と楽しそうに談笑していて、よく笑い、嬉しそうだった。自然と見ている自分の顔も綻んだ。

暫くして、彼は酷く脆そうな顔でフラフラとどこかの部屋に向かった。

その部屋に回りこんで窓から眺めた。カーテンの隙間から見えるのは怯えて震える彼と数人の女性。

彼女達は彼に乱暴をした。

ある者は誰かの悪口をいいながら彼を犯し、またあるもの黙り続ける彼が泣くまで殴って犯した。

それに彼女は何も言えなかった。助けることも叫ぶこともできず、その場で口を押さえながら固まり続け、ただ呆然とそれを見続けた。途中彼が暴れ、逃げようとしたが直ぐに叩きのめされ、もっと酷いことをされた。

「坂之上……ぼく、やっぱりだめだった」

小さく彼がそう呟いたのが聞こえた。

地面に頭を着け、涎と涙と鼻水で顔をくしゃくしゃにしながら彼は小さく小さくか細い声でそう呟いた。

その言葉に彼女はその場を離れ、走った。

草木を掻き分け、山の頂上についた頃、吐いた。月明かりと小さな街灯の元で嗚咽を堪えながら胃の中のを吐き出した。

自分は何て酷いことを彼に課してしまったのだろうと。

彼がどんなものを背負っているのかも知らず、簡単に抗えなどと言ってしまった。

私は何て浅はかだったんだ。

気がついたら携帯を握り締め、少女に電話をかけていた。

「私は無力だ。力なき者だ。何もできず、何も守れず、何が“抗え”だ。私はどうすれば……………」

「迎えに行くよ。今、どこ」

「私は……………明日彼と何をどう話せばいいのだろう」

「今、どこにいるんだよ」

「……………知らなかったんだ。彼が犯されて泣いて踏みにじられて、助けを呼べない状況だったなんて……………。反逆することも許されない、そう思うこともできない状況だったなんて……………！ 私は……………！」

「……………」

三十二・五粒（後書き）

もう死に至る病を超える話数に入ったのかと思うといろいろ感慨深いです。

追記…よくよく考えたら42話分も書いているってことは全然とどいていないんですね。うーん、我ながらよく書いたなあ。

三十三粒

もう夕暮れ時で僕らは風呂場にいた。

彼女は今まで満たされなかった気持ちを埋めるように飽きもせず僕を組み伏せ貪っていた。

僕もこれは画材を手に入れるためなのだと信じ、舌を返す。

彼女のキスは蛇のように執拗で、荒々しい。その上、全身にあわ立てた石鹸をつけて、僕の体に巻きついてくるのだ。

そのせいで自然に自分の息は荒くなって、彼女の息も荒くなって、互いに呼吸が追いつかず、酸欠気味だった。

「お腹のこれ……すごく熱い」

「あうっ……」

彼女は体の上を滑りながら位置を調整して、僕のそれを股の間に挟みこみ強く締め付け、動かした。

鉄火如く熱く滾った彼女の股はどろどろとしていて、石鹸とは違うぬめついた潤滑液を出していた。

笑いながら内股と腰を動かして、生暖かい息を吐く。

両手は既に彼女の両手に絡め取られていて、僕はそっぽを向いてそれに答えた。

「相変わらずいけずね」

彼女の液と石鹸が混ざり合い、ふにゃふにゃした彼女の太ももの間をそれが行き来する。時折、僕の表情を眺めながら彼女は力の入れ具合を変え、腰の動きも変えた。

深く息を吸ってそれに堪える。少しでも自分を保っていたかった。「うふふ、可愛い」

彼女は僕にキスをして、指でその口をくると撫でた。

僕にはそれが限界で、どんなに踏ん張ろうとしてもそれは溢れ出て、彼女の太ももと尻をぱたぱたと汚した。

「うーうー……」

「お漏らししちゃったのね、暖かいわ」

彼女は微笑み、それを指ですくって僕に見せ付けた。

湯船で僕はぐったりとして体の力を抜いた。彼女は横で肌をつるつると光らせてうんと唸りながら背筋を伸ばす。

「本当に……画材揃えてくれるんですね」

「えっ？ ええ……多分、蔵にあったと思うわ」
多分？

どういうことだ、話が違うといったかっただけけど今の僕にはそんなことをいう元気は無く、ただ休息を必要としていた。
できれば風呂上りはさっさと眠りたいと思う。

「この際、紙と鉛筆だけでもいいです……」

ふと両肩に手が乗せられる。ゆっくりとそれは僕の肩を解す。

「明日は気分転換に釣りでも行きませんか？ この時期、アユが美味しいのよ」

「あの……画材は」

「散歩と里の紹介を兼ねてどうかしら？ 綺麗な風景も沢山あるわよ」

その言葉に少し心が揺れ動く。

「外でするのも乙なものじゃないかしら？」

「それは断固拒否します」

翌日、僕は釣りに行くことになった。

叩き起こされ呉葉さんと一緒にオニギリを作った。彼女は綺麗な三角形で僕のは不恰好なシュルレアリスムを体現したかのような不ぞろいな形だった。

彼女は今日は着物じゃなくて、大き目のオーバーオールにグレーのシャツを着ていた。

「知り合いの子に借りたのだけど、何だか落ち着かないわ」

同じく借りてきたという自転車に僕は乗り込み、川辺に向かっ

た。

運転手は彼女で砂利道をふらふらと進んで、酷く不安だった。

「一度、自転車っていうものに乗ってみたかったのよ。これ、凄くスリルがあるのね」

「降りてもいいかな」

「泣くわよ？」

「じゃあ、やっぱり僕に運転させてほしいんだけど」

「お黙り」

「……………」

舗装された道は少なく、彼女の運転が安定するのも凄く遅くて、川辺に着いたのは三十分ほどしてからだった。

近代的な橋の隅では麦藁帽子に蒼い色のジャージを着た少女が水筒に入れたお茶を飲んで座っていた。横には竹で作ったと思わしき釣竿が立てかけられている。

呉葉さんはちりとベルを鳴らして彼女に到着を知らせる。

彼女は僕らを見てぎょっと目を丸くした。

「あら、私が運転するところそんなに珍しい？」

「お、おおひ、お姫様が……じ、自転車乗ってるなんて知ったら、みみみ、みんな普通驚く」

彼女はそういい、口を押さえて顔を赤くした。

「美代子、この人はあなたのことを笑ったりしない人よ。安心なさい」

「え、今彼女が何かしたの？」

美代子と呼ばれた彼女は口をぽかんと開けて、呉葉さんの顔を見た。

「こ、こいつ、ほほん、ほん本気で、いい言ってるのか。だ、大丈夫なの……なのか？ も、もしかかかかしてあた、あたしは馬鹿にされ、されてる……のか？」

「多分、亮平さんが馬鹿なだけよ」

「そ、そそこいつはいい」

二人はクスクスと笑い、呆然と立ち尽くす僕見て今度は大きく笑った。

呉葉さんの説明によると彼女は東美代子といって釣りの名人なのだという。服を貸してくれたのも東さんなのだといった。

二人は仲がよく、昔から一緒に遊ぶ仲なのだそうだ。

三十四粒（前書き）

あずま、です。そのうちルビ入れます。

三十四粒

早速僕らはデコボコした竹製の釣竿を持たされ、橋の下へ降りる。川辺の左右は森になっていて、青々とした木々が生い茂っている。

東さんは片手に工具箱のようなものを持ち、僕らの前を歩いた。背中には薄緑のリュック。

「きよ、今日は日差し強いから、たったた倒れるなよ」

「大丈夫よ、木陰で涼みながら釣るから」

「そっ、そっかそっか……そそそれなら大丈夫、だな」

少し進むと緩やかなこう配で流れの速い岩場に着いた。横には大きく肉厚の岩がどっしりと腰を据えている。

「こ、ここで釣る」

東さんはリュックの中からパック詰めされたイクラを渡した。おやつ、というわけではないだろう。

「これが餌？」

「ええ、今日日の魚はこんなものも食べるみたい。あら、美代子は何を釣るのかしら？」

「あた、あああたしは鮎釣る……ひゃあっ！」

急に彼女は叫びだし、その場で尻餅をついた。僕は受け取ったイクラを片手にその場でどうしたんだろうと彼女を窺った。

彼女は怯えた目でふるふるとその場で振るえ、顔を真っ赤にさせていた。

呉葉さんも不思議そうな顔で彼女の顔を覗く。

「美代子、どうしたの？」

「ああああああ赤ちゃん、で、できちゃう。おっ、男に触れたらにん、妊娠しちゃう」

そういつて彼女はどうしようどうしようと僕の手に触れた指先を目の前で掲げながら、その場で汗を噴出しながら震えた。

呉葉さんは美代子の人差し指を柔らかく両手で包み込み、真っ直

ぐ彼女の瞳を見つめる。

「美代子、また瑞樹達に変な嘘を教えられたのね。そんなことで子供ができるわけないでしょう」

「ででででも、もっもしできてたら」

「もしそうなら亮平さんに先ほどから触れ続けている私は大家族のお母さんよ」

僕の顔をちらりと見た後につこりと笑う。東さんは動悸を抑えて、何かに納得したような顔でうなずいた。

「こ、子供はでっ……できないのか」

「ええ、勿論。私が美代子に嘘を言ったことがあったかしら？」

「くっくくく呉葉はあたしに、う、嘘は言わないし……馬鹿にしない」

「ええ、そうよ」

彼女はほっと息をついて、僕の方を見る。僕はどうしていいか分からず、慣れない愛想笑いを浮かべた。

ゆっくりと手を差し出して東さんは僕の人差し指を掴む。じつとりと汗ばんだ手が柔らかい。

彼女なりの握手なのだと解釈した。

「……ええっと、東さんよろしく」

「ううううう……ひゃあ」

結局、苦手意識は直らなかつたのか直ぐに手を後ろに引っ込めて、瞳を帽子の奥に隠した。

「あらあら、美代子ったら」

呉葉さんは姉か母親のように慈愛の籠った微笑みを見せて、彼女の髪を撫でた。

木陰に吹き付ける風は川の飛沫を吸って冷たく心地よい。

川のせせらぎは絶え間なくアトランダムなミュージックを重ね続け、水の流れは周りの色合いと日の光を薄く乱反射し、ささやかなプリズムを見せた。

僕は全身が自然の中に溶けていくような錯覚に溺れ、目を閉じた。風の音、木々のざわめき、水のくぐもった音、全てが美しく調和が取れている。

「亮平さん、引いてますよ」

「え？ あ、嘘」

長い竹竿の先はついついと川に向かって何度もお辞儀していた。

僕は焦り、逃がしまいと強く竿を持ち上げる。

すぼっ。

そんな感触と共に針は水面から空中に顔を出し、残念でしたと僕をあざ笑った。

「へへへっ、下手糞」

大きな岩の上で座禅の如くぴくりとも動かない彼女は尻目がちにそういつて笑った。そしてそのまま釣竿を水から引き上げるかのように、流れるような動きで魚を釣り上げた。

恐らく十四目になるであろう魚をビクに入れながら、ちらりと麦藁帽子の隙間から僕の顔を窺う。

「美代子、亮平さんは確かにこっちの竿は駄目ですけど……」

「呉葉さん、黙ってくれるかな」

目で強く訴えかける。立派なセクハラだ。

「あんな感じに流れるようにやれば僕も……」

「ああ、あれは美代子にしかできない芸当ですから真似しない方がいいですよ」

彼女も以前に東さんの動きを真似て見たのだが、全く釣れず直ぐに諦めたと話してくれた。

呉葉さんが釣ったニジマス三匹以外、他に釣れた魚は無い。

何だか悔しくて、意識を集中させて挑むのだけど、そういう時にかぎって魚は僕を無視して、無駄に疲れてしまうという悪循環。

「……どうすれば釣れるんだろう」

「あら、私という大物を釣ったじゃない」

「そういうのじゃなくて、ちょっと真剣に」

そうね、と彼女は少し考え、僕にいった。

「……私は今日は別に釣れなくてもいい、それよりも亮平さんといちゃいちゃしたい、なんて釣り以外のことを考えていたら案外釣れたわ」

「おっ、おおおおお前、帰れ」

まったくだ。

ようは釣り以外のことを考えろってこと何だけど、釣りをしに来てるのにそれを意識しないというのも難しい話だと思う。

まるでマーフィーの法則だ。

傘を差したら雨が止むかの如く。

「あら、さっそく引いてるわよ」

「え？」

言ってる傍から。

今度は慎重に竿を持ち、魚を泳がせる為に少し力を抜いてみる。

そして少しずつ力を込めて水面に引っ張り上げる。

結果、あっさりと釣れた。いつの間にか後ろに立っていた東さんが網で魚をすくってくれた。

色鮮やかな肌に、黒い斑点と薄く透ける尾びれと背びれ。

「や、ヤマメだ。釣るのはけっ、結構……難しい」

彼女のその一言が何だか嬉しくて、苦労が報われたような気がして、恥ずかしいけど目頭がじんと熱くなった。

自分で掴み、僕が釣ったのだという実感に浸る。

素直に嬉しい。

ああ、僕は直ぐ泣くな。

「ちちち、丁度いいから……お昼」

「そうね、お昼にしましょうか。美代子、アレお願いね」

「う、うん。すすすす、墨は」

「リュックの中でしょう？ 分かってるわよ」

僕の魚を網に入れ、東さんは何か道具を準備し始めた。

「アレってどういうこと？」

「魚のワタを抜いたり、串刺しにするんですよ」

呉葉さんはそういうのが苦手で、ワタ抜きなどはいつも東さんに任せて、自分は火をつける役をしているのだといった。

僕もそういったグロテスクなのは苦手なので東さんに作業をお願いした。適材適所だ。

彼女は何も言わず笑みを作り、後ろの森へと消えていった。

三十四・五粒

東は既に魚の腸は抜き終わり、今は全体に塩を塗っているとこだった。次に波打つ形に串を刺す。

この時期の鮎は美味しい。

きっと二人は笑って美味しいと喜んでくれる。

そう思うと嬉しさが湧き上がり、この場で諸手を上げて小躍りしたい衝動に駆られた。

「よっ、釣り名人」

その声に彼女はくると後ろを向いて声の主を窺った。

健康的な日焼け跡にショートの髪、人懐っこそうな猫目。

全身作業服のようなモスグリーン調の服に身を包んでいる少女が誰か直ぐに東は理解した。

「みっ、みみ瑞樹」

「釣れてるか？」

彼女はこくりと頷いて、魚を見せた。

「大量じゃん。流石だな」

「なななな、何のよう？」

「ちよっとお願いがあってさ。今日この後、東んところで飲み会やってくれないか？ ほら、最近お姫様疲れてるみたいだし酒飲めるって聞いたら喜ぶと思うぞ。酒とかつまみはこっちで送っとくし、どうよ。たまにはさ」

喜ぶというワードに東の心は揺れ動く。

確かに最近の呉葉はどこか不安げで元気が無かった。

外で大仕事を終えてきたというし、苦労をねぎらう意味でもそれもいいのかもしれない。

そう思い彼女はそれに無言で頷いた。そもそも東は人が喜ぶ姿を見るのが好きだった。

他人の笑顔には元気の魔法が掛かっている。それが彼女の持論。

「あー。でも酒とかつまみ、あたしから渡したってこと内緒にしてくれるか？ ほら、うちと桐生んところって仲悪いだろ？ 本当はお疲れ様って言いたいけどそれができねーんだよ。ってことで東からあたしの気持ちを東なりのやり方で伝えてやってくれないか」
そういつて少女はにっこり笑い、真っ直ぐ東を見た。
特に断るつもりが無かった東は彼女の意外な一面を見れたことに内心驚いた。しかし、表情はあくまでも普段どおりのまま頷く。
もっとみんな仲良くできればいいのになぁと東。

串を刺し終わった東は瑞樹の件を了承し、その場を離れた。
瑞樹は一人ぼくそえみながら、雑木林から出る。

「お疲れ様です」

取り巻きの一人の少女がそういつて馬を引いた。彼女に手伝ってもらいながら後ろに乗る。

「ちよろいもんだよ。アイツ、やっぱ頭悪いな」

「東さんは……」

「さん、なんてつけなくていい」

そう冷えた声を発する。

「ですけど、私より家柄が……」

「そんなくだらないものは気にするな。それに桐生なんかと仲良くしてる奴にあたしらがへいこらする必要なんて元々ないんだ」

「そう、ですか」

少女は少し抵抗を感じながらも東は、と言い直す。

「彼女は先生が到着したことも、今回のことも何も知らされていないんだよ」

「知ったところで意味ないから知らされてないんだろ。黙ってアイツは釣りしてりゃいいんだよ」

そういつて鼻で笑う。

「あの、彼女、喋れるんですか？」

「あんまり喋りたがらないけど、一応な。まあ、喋ったところでド

そって何言ってるかわかんねーけど」

少女はお人好しの馬鹿と陰口を叩かれている東を内心、気の毒に思った。

もしかしたら彼女がこの里で一番清い存在なのかもしれない。

「あと少しだ。長かった……本当に」

「です、ね」

それは果たしていいことなのだろうか。

誰かを犠牲にして自分が幸福を得るということは。

少女には未だに答えが出ない。

あるマンションの玄関で一人の少女と女性が格闘していた。

「リボルバーはこうやって弾倉を固定されたら撃てないんだよ」

「はな……せつ」

背の高い少女は涙と鼻水で顔を濡らし、床に寝そべる形で銃を少女に向けている。しかしトリガーは硬く動かない。

傍らにいる髪の長い彼女は何があったのだろうと思い出していた。最初に来客を告げる音になり、彼女は扉に向かった。彼が自分を頼ってきたのだと思ったのだ。しかし、隣の少女にそれを止められた。少女は相手の顔を覗き窓で窺うと急に扉を開け、催涙スプレーを相手の顔にかけた。そして次に合気道のような動きで相手を床に転ばせた。

相手の女はゲホゲホと咽ながら、拳銃を出した。それを少女は弾倉部分を掴んで止めたのがさきほどのこと。

「な、何をしてるんだ。急に相手を襲うなんて」

「拳銃ぶら下げる奴に情けなんて掛けてる場合じゃないんだよ。そんなんだから大切な人が誘拐されたりするんだ。心を鬼にできないから、結局職員を助けようとしちゃうんだ。憎いなら殺すか叩きのめすかしないと駄目なんだよ。人間はそうするために生きているんだから」

そういつて少女は拳銃を外側に捻った。相手の指が不自然な方向に曲がり、相手は小さく悲鳴を上げながらそれを手放す。

爬虫類のような目で金髪の少女は奪った拳銃を手の中で遊ぶ。

「目的は？」

「亮平君を……あたしの亮平君を返してよ！ 返して返して返して返してっ！！ よりにもよってあんな奴らに売り渡すなんて……殺してやる！」

催涙ガスが目に染みるのか何度も瞼を瞬かせて、はあはあと息づく。涎と涙は顔を流れ、地面を汚す。

「カモネギ」

「……………」

ほらね、といった顔で少女は髪の長い彼女を見つめた。

鴨がネギを背負ってやってきた。

次はどうすればいいか分かる？

分かる、分かるが……。

「私には……できない。やはり相手がどんな人間でも見殺しにできないし、恨むことはできないのだ。私という人間はそうできてしまっている。君の領域にいくことはできない」

「あんた、弱くなったんだよ」

そういつて少女はリボルバーの撃鉄をカチリと下ろす。

彼女は背筋を伝う汗を感じて、目を見開いた。少女は表情を変えず、人形よりも表情に乏しい顔で拳銃を今ももがき苦しんでいる女性の頭に突きつけた。

自分に何をされようとしているのか分かっているのか女性はカタカタと震えている。

「バン！」

「ひっ」

「っ！！」

息が止まった。

「なーんちゃって」

少女は口の端を少し歪めて笑う。悪戯を成功させたような矮小な笑み。

本当に殺してもおかしくない彼女の冷えた瞳。機械的な表情。

「何か知ってるみたいだし、話聞こうか」

恐怖は植えつけた。

あとは従わせるのみ。

三十五粒

見よう見まね、記憶を頼りに石を囲んでそれらしき形を作った。そして炭に火を点ける。まだ少しばかり火が弱いのでそこら辺から集めた薪をくべた。

次第に炎は大きさを増し、パキパキと音を立てながら火の粉を散らす。

「こんな感じでいいのかな」

「いいと思いますよ」

そういつて彼女は少し離れた縁側で桶に入れた水に足を漬け、冷たい麦茶を口にする。

一度もこちらを見ないあたり、どうでもいいのかもしれない。

「東さん、これでいいのかな」

お盆を持って現れた東さんはうんと、首を縦に振った。

川でやれば幾分かは僕に向けられる赤外線的な熱は収まるのだろうけど、ここは生憎と東さんのお屋敷で暑い日照りが僕を照らす広い庭だった。

最初にこっちで魚を焼こうと言ったのは東さんだった。丁度家にいい酒があるから魚をつまみに一晩中飲み明かそうといったのだ。呉葉さんは酒と聞いて目を輝かせて、行きましよう行きましようと言った。僕としては折角作ったオニギリが無駄になってしまふと思ったけど、それは今こうして焚き火の火を見ながら済ましている。解決だ。

塩味のオニギリは暑さで疲労している僕にはとても嬉しい。

「も、もうそろそろ魚焼く」

東さんはそういいながらゴム草履で縁側に出て、地面に串を突き刺した。串はピサの斜塔よろしく斜めに添えられた。上手く地面に刺さらないものは石を枕にする形で火に近づける。

「お疲れ様」

「あ……ありがとう」

汗をひと拭きして、縁側に近づくとき呉葉さんは自分の飲みかけのグラスを僕に手渡した。僕は横に僕用のグラスがあるじゃないかと目で彼女に促すが彼女は首を横に傾けて笑った。

選択権はないようだ。

グラスを受け取り、ぐいっと空けた。冷たい液体が喉を刺し、胃に心地よい刺激となって流れ込むのが分かる。まだ十二分に冷たくて美味しい。

「隣どうぞ」

「あ、うん」

腰を下ろす。彼女は東さんから借りた浴衣のような薄手の着物を着ていて涼しげだ。

「楽しみです」

「釣ったばかりの魚を、それもあやうって食べるのは僕も初めてだから少しドキドキするよ」

「違います。お酒の話しよ」

「く、呉葉はしゅしゅしゅ酒豪。で、酒癖悪いか、から甚六に普段は止められてる」

「あら、私はいつでも私よ？」

「お前は酒飲むと……たた、タガが外れる」

手をパンパンと払い、近づきながら東さんはいった。

「そういえば甚六さんってこの村の人なの？」

「甚六は私が昔、外で拾ってきた子供。大丈夫よ、私の心も体も亮平さんのものですから」

「お、お前、よよよくそんな恥ずかしいこといえるな」

東さんは少し顔を赤らめて、身を引かせた。

それを見て、呉葉さんは東さんの手を引いて自分の胸元に滑り込ませる。

「あら、私美代子のこと大切に思っているわよ？ 同じくらいに」

「ばばばばばばか！ そ、そーゆーのやめろ」

顔と唇を撫でる彼女の手を払う。僕は何か見てはいけないものを見てしまったような気がして余所見しながら空のグラスを口に当てた。

「二人ともうぶね」

「そ、そーゆー問題じゃじゃ、ないっ」

僕もその意見に心から同意した。

三十分もしないうちに焼き魚のいい匂いが辺りに立ち込めた。大きなオニギリを食べたはずの僕のお腹は節操なくぐうつと音を鳴らす。

桐生さんは遂にきたかと庭に躍り出た。東さんは白く厚手の軍手で大きな目のお皿に串刺しの魚を移している。

「ああ、あついっ」

「ほら、こっちは私に任せなさい。美代子はお酒の準備をしてちょうだい。亮平さんをこき使って構わないわよ。だからお酒を早く！」

「どんだけ酒が好きなんですか……」

僕は無言で手招きする東さんに連れられてキッチンに向かう。少し冷たい床を歩き、大きな冷蔵庫の前に辿り着いた。中からビールやらチュウハイを取り出し庭に近い部屋に運ぶ。

四角いちゃぶ台を二枚並べてお酒を置いた。置き切れない分は畳の上に置く。

後から一升瓶を三つほど胸に抱えてよろよろと現れた東さんを見て僕は言った。

「……誰がこんなに飲むんですか？」

彼女は既に座って今か今かと待ちわびている桐生さんを無言で指差した。

「早く座りなさい、二人とも。早くしないと勝手に飲んじゃうわよ？」

手の中に既に飲みかけのビールの缶があるのはどうやら僕の気のせいらしい。

乾杯の音頭は何故か僕が取った。三人でビールをぐくりと飲む。塩味の利いた焼き立ての魚は身に染みるほど美味かった。皮はパリっとしていて中身はふわふわと柔らかい。鮎は腸を抜いていないのに苦味も臭味もなく、美味しい。桐生さんはビールが進むと喜び、僕は素直に美味しいと喜んだ。東さんはそれを見てニコニコと笑った。

東さんはどうやら僕と同じように酒はあまり飲める方ではないらしくチビチビと煽っていた。

桐生さんをふと見ると既に四本目の空き缶を積み上げていた。

「亮平さんも美代子もガンガン飲みましょーよー」

少し頬を赤く染め上気した呉葉さんは東さんにしな垂れかかる。

「美代子って、可愛いよね」

「よ、酔うの早いだろっ」

「キスしましょうか」

「ややや、やだ」

「キスしましょう」

「や、ちょ、離れろ！」

顔を無理やり近づけて呉葉さんは東さんににじり寄った。東さんも近づけまいと顔を遠ざけ、僕に目で助けを訴えた。

それを助けたら、次に自分が襲われることが明白だったので、魚を美味しいなあと一人呟き無視した。

「おおおおお、お前はあいつと、しし、してろよ」
余計なことを。

ぴたりと彼女の動きが止まり、にんまりと振り向く。

抗うことに疲れた東さんはぐったりと床に倒れる。倒れつつもスルメを噛んで憎々しげに僕を睨んだ。

因果応報だと言わんばかりの瞳。

「そうね、口移しでお酒飲ましてもらおうかしら」

「絶対に断る」

「……断ってみなさい。泣くわよ？」

その目は少し据わっていて、既に潤み始めていた。

つまりそれは僕の敗北であり、彼女の勝利が決まったということだった。

三十六粒

頭が痛い。そして重い。

意識は鈍くて、全てがどうでもいいことのように思える。

目の前で東さんがヒヒヒと笑いながら犬掻きの真似事のような踊りをしているのも、呉葉さんがもっとやれとはやし立てるのもどうでもいい気がする。

それじゃいけないんだと僕はもたれ掛かった壁からゆっくり体を起こす。周りが異常ならば自分だけは正常でありたい。

「ねえ、亮平さん。熱いわね」

「こんだけ飲んだからね……」

賽の河原の鬼もこの詰まれた空き缶やら空ビンを見たら驚くだろう。

「脱いでいいかしら」

「……それ脱いだら裸でしょ。駄目」

「そう、残念だわ。……ねえ、脱いでいいかしら？」

「今駄目って言ったじゃん」

「じゃあ、じゃあね。私を呉葉ちゃんって呼んでくれる？　もしくは

は呉葉、でもいいわ」

何がじゃあ、なのだろうか。

でもそれで脱ぐという選択肢がなくなるのならば。

「呉葉……ちゃん」

「なあに、亮平……君っ！」

「ぐあっ」

僕の胸に飛び込んで首を力いっぱい締め付ける。喉がひゅーひゅーと掠れた音を立てる。

「ふふふ、不順性交遊だっ！　い、いけないんだ！　いけないんだ！　そ、そんな奴はフィッシュオン！」

釣竿を振る仕草をしてゴクゴクと日本酒を煽る。そして据わった

目でカラカラと笑った。呉葉さんもそれに釣られて笑う。

正直何が面白いのか分からない。

「ねえ、あなた」

「……僕？」

「あら、ダーリンと呼ぶほうが亮平さんは好きなのかしら？」

「ああ、そっちのあなたか……」

「子供は何人がいいと思いますか？」

「今のところは必要としてないかな」

「もう、いけずね。じゃあ、私が亮平さんの子供になるわ。んむー、お父さんキスしてくださいさーい！」

「ろろろ、ロリコンだーっ！ き、きん……きんなんとかだーっ！」
スルメを咥えて叫ぶ東さん。呉葉さんの顔面を掴んで僕は冷静にそれを退ける。

何故避けるのか、と抗議の声を上げる彼女。

どこの世界に舌を出しながら父にキスをせがむ娘がいるんだ。

僕はキャンディの包み紙よろしく包まれたサラミをクルリと紐解いて口を含む。しつこい位の油と塩味に何故かほつとした。

少し喉が渴いて、飲み物を探すけど当然酒しかそこにはない。氷の溶け掛かったグラスの日本酒らしきものを飲む、いい感じに水っぽくなっていて飲みやすい。

「んー？ 亮平さん、顔赤いですよ。もしかして私に見とれてしまったとか？」

「あああああ、あたしかもしれないぞ」

「……………亮平さん、どっちなのかしら？」

「どっちでもない」

「他の女ってことかしら！？」

「ううう、うわ、浮気性だ！」

「アホどもめ……」

暫くそんなテンションで騒いでいて、東さんが落ちた辺りでお開

きになった。布団を出して彼女を寝かせ、部屋を掃除しておく。

その後、僕と呉葉さんはキッチンに向かい、ただの水を飲んだ。酔っ払った後の生ぬるい水は感動するほど美味しかった。

音を立てずに家を出て、彼女は薄手の着物のまま、僕は来る時と変わらない格好で外の砂利道を進んだ。

「寒いわね……」

「そうだね」

「少し、そっちいいかしら？」

「どうぞ」

「ありがとう」

彼女は僕のジャケットを捲り、自分の体に巻いて、笑った。

「まだちょっと寒いけれど、悪くないわ」

道は木製の電柱に備え付けられた街灯が稀にある程度で薄暗い。道を踏み外したりすれば水を張った田んぼに落っこちてしまうので慎重に歩く。

生暖かいはずの風は今は酷く冷たくて、僕らは必要以上に身を寄せ合った。

ふと、不意に明るくなった。

ゆっくりと雲は流れ、少し掛けた月が僕らにその顔を見せていた。足を止め、僕らは顔を少し持ち上げる。

「綺麗ね」

「……うん、本当に綺麗だ」

薄黄色の優しい光。夜の太陽。

ぽっかりと暗闇に浮かび、田んぼにその身を反射させて辺りを神秘的な色に染めている。

一枚の絵。日本が忘れた古き良き風景。

「ねえ、亮平さん。あなたはここが嫌い？　ここに連れてこられて後悔したのかしら？」

彼女は空から視線を動かさないまま髪を掻き上げ、そういった。

「どう……だろう。本当はさ、凄く嫌だったんだ。痛いことも“あ

あいうことも”何もかもが嫌なんだ。でも……でも今は分からない」
「……どういことかしら？」

不思議そうな顔で彼女は僕の顔を見た。今度は僕が空を見つめる番だった。

「適応なのか本当にそう思ってるのか分からないけど、楽しいと思う僕もここにいるんだ」

酒の力なのか、今日の釣りがあったおかげか、はたまたこの美しい風景のせいかはわからない。だけど僕は本当に心から楽しい思っている。思ってしまったっているんだ。

それが歪んだ過程から生まれた歪な答えだとしても。

元居た場所のことはいいのか、という葛藤は確かにある。だけどもはや僕にとっては過去のこと、死んだ人は甦らないのなら忘れてしまった方がずっと楽だと思えない。

辛いから忘れる。辛いから思い出さない。楽な方に逃げる。

誰がその生き方を否定できる？ 誰がそれを間違っているといえる？

誰が僕を責めて否定して拒絶するんだ？

彼女は全身を僕の方に向けて、視線を地面に落とす。

「……………私、あなたに謝らないといけないことがあるの。本当に酷いことで、最低のこと。許してくれなんて言わないし、憎んでくれてもいい。だから最後まで黙って聞いてちょうだい」

「あー、それは後にしてくれる？」

「え？」

「は？」

僕じゃない。

夜に声を上げたのは鬼。

青い法被に赤い鬼の面をつけた誰かが僕の後ろにいた。金色の瞳が月夜に照らされる。

夜叉は静かにこん棒を振り上げると、小さく笑った。

「モモ喰う？」

三十七粒（前書き）

誤字と厨二表現緩和しました。

三十七粒

横に避けようと動くが振り下ろされるそれを避けきることはできなくて、肩に重い一撃を喰らってしまう。

「ぐっ！」

バランスを崩しそうになるけど何とか、立て直して距離を取ろうとする。

「呉葉さん、後ろ！」

「っ！！！」

呉葉さんの後ろには別の鬼がいた。そいつはバチバチと青い光を放つスタンガンを彼女に向けて突っ込む。

彼女はひらりとそれを避けて、相手が進む方向に背を押した。相手はバランスを崩して地面に転ぶ。

それを皮切りに草むらに隠れていた何人かが音も立てずに影から現れた。一様にそれは鬼の面をしていて蒼い法被を着ている。

「呉葉、こっちにこい」

「これは……これは何のつもりですか？」

「分かっているだろう？ 里全体の総意だ。お前の独断は誰も望んでいないんだよ」

「……………瑞樹っ！」

呉葉さんは僕の手を引っ張って田んぼに駆けつけた。田と田の小道を小走りに進む。

「回り込め！ 抵抗すんならぶん殴ってふんじばれ。星熊は動きを止めろ」

何が起きているのかわからない。

けれど、とにかくその場の空気は最悪で、月はその空気に不釣合いなほど美しかった。

「な、何がっ」

「亮平さん、話はあとよ。今は足を動かして——」

彼女の足が一瞬止まりかける。見れば足には矢が刺さっていた。しかし、彼女は歯をぎりっとかみ締めて、足を進める。

今度はひゅんと耳音で音がして彼女の脇に矢が生えた。

「亮平さん、だけでも、逃げて……ちようだい」

「な、なんだよ。なんだよこれ、なんでこんな！　こんなことに……」

白い着物に黒点が滲み出る。それは暖かくて嫌な臭いだった。

田を抜けた大通りで彼女は前のめりに倒れる。後ろを見れば、走ってから五十メートルも離れていなかった。

鬼達はゆっくりと僕らににじり寄り、手にもった武器を見せた。

「君達、同じ里の人間なんだろ！　なのになんでこんな酷いことができるんだ！　苦しんでる人を見てなんとも思わないのか？」

僕は彼女に肩を貸しながら、あとずさる。

「はやく、いけっていつてるでしょう！？　このうつけ！」

どんと弱い力で突き飛ばされて僕はその場に転がった。

鬼の一人がゆっくりと近づいてくる。瑞樹さんだ。

「お前が逃げたら呉葉は殺す。どの道、この島からは逃げられないし、お前には不利だぞ」

「亮平さん！　お願いだから……走って！」

「黙れよ」

瑞樹さんは道端に落ちている小石を蹴るように彼女の溝を蹴った。どつと鈍い音がした。

呉葉さんは何かを口から吐いて、ぜいぜいと息を切らした。それが血なのかさつき飲んだ酒なのか分からない。ただ辛そうで苦しうだった。

「呉葉、よく考えろよ？　逃げても別にいいんだ。あたしらは絶対に捕まえられる自信があるからな。これは好意でいつてるんだ」

瑞樹さんは屈むと呉葉さんの長い髪を掴んで首を持ち上げた。

呉葉さんは鋭い視線で鬼の顔を見つめる。そして急に彼女は大きな声でいった。

「亮平さん！ あなたの両親を殺したのも、あなたを不幸にしたのも、あなたが不幸になるように仕向けたのも……あなたが不幸になるように弄んだのも私です！ だから私を置いて走………っ」

最後の言葉を言い切る前に瑞樹さんが腹を殴った。ぐうっと低く息を吐く音がした。

「耳元でうるせえな。ったくよ……」

ばくばくと心臓が割れるように踊る。言葉の意味がいまいち理解できない。それが事実だとしてもどう信用しろというんだ。

でも、もしもそれが事実ならこれほど滑稽なことはない。

親を殺した相手に誘拐されて、犯され馴れ合って、挙句の果てには相手を庇おうとしている自分。

逃げればいい。憎き相手だ。死のうが殴られようがどうなろうと関係ない。

だけど、僕は彼女の傍に寄って具合を見た。

「なんで……なんでなのよ」

「もう、誰かが……僕の知ってる誰かが死ぬのは嫌なんだ。君を恨んだって、死んだ人間は生き返らないし、世界や僕が変わるわけじゃないよ。……それに僕は君を憎めない」

「馬鹿ね、本当に……」

彼女はそういって大粒の涙を零した。

「そういう実直な態度は嫌いじゃないぜ」

「お願いですから、彼女にこれ以上酷いことも辛いこともしないであげて下さい」

「ああ、約束する。……の前に一ついいか？」

「え？」

ぶんと空気が震えたと思ったら、彼女の拳が僕の頬に突き刺さっていた。口の中が血に染まり頬の筋が熱く張る。

痛い痛い痛い。

大通りを少し飛び跳ねて、僕は田んぼの水に滑り落ちた。

「さっきお前なんていった？ ええ、おい。こんな酷いことがどうとかいったよな？ 辛くないわけないだろボケが」

よつんばいの僕の胴を蹴り、髪の毛を掴む。

「最初に呉葉に突っ込んだ八瀬やせは呉葉の幼馴染だ。呉葉に矢を射つた星熊ほしくまは昔、呉葉に世話になって様付けで奴を呼んでるほど慕ってる。他にもここには呉葉のことを好きだって奴は大勢いる。そいつらが何とも思っていないわけねーだろ！ 奴らだって散々悩んだ。死ぬほど悩みぬいて悩みぬいてこの選択をしたんだ！ 心を鬼にしてこの面を被っているんだ！ ……事情を何もしらねえ癖にふざけたこと言いやがって！」

泥水に無理やり顔を浸し、飽きたらまた僕を殴った。蹴り殴り何度も立ち上がらせる。

ギャラリーは松明を持ってじっと佇む法被の鬼達。

鬼達は悲しそうに笑い、金色の眼でじっとじっと僕らを見続けた。

三十七・五粒

初めての調教は小学生の男の子だった。

依頼者はどっかのお金持ちの人。クライアントのことはあんまり、触れちゃいけない決まりだけど多分女の人だと思う。だってその子、ずっとブルブル震えながら女の人の名前呼んでたから。

目隠し取ると、ここはどこっていったわ。きっと何も知らなかったんだと思う。自分がどっかの変態に売られて、調教師に渡されるなんてこと。

あたしは極力ヒールに徹した。殴ってしばいて、蹴り上げて。水攻め、薬剤投与なんでもやった。価値観や常識を一度ぶっ潰すのがセオリーって聞いてたから。

それでたまにクライアントに合わせてやるとね、すごい不思議なくらいその人に傾倒していくんだ。飴と鞭って奴なのかもしれない。でもおかしいよね、その優しくしてくれてるおねーさんが自分を調教師に送った人物だったのにあんなにバカップルになれるなんてさ。

そんなことを繰り返してたら、いつの間にかちよつと有名になってた。

普通の人はずぐ心が病んじゃうんだって。でもあたしは続けた。お金が欲しかったからね。うん、彼と暮らすためのお金。

裏の世界じゃ時給千二百円が馬鹿馬鹿しくなるようなお金が動くんだよ。たった数日で、見たこともないお金を手にできる。

ううん、辛くなかったわけじゃないよ。事実、心は結構限界で、もう仕事は嫌だった。泣き叫ぶ子供や薬で頭がオカシクなってく子供を見て何とも思わない人間なんていないって。それこそ人を殺しても何とも思わない人間じゃないと。

それで、パパがね。この仕事をしたら辞めていいっていったの。それがね、良平君の調教だった。

直ぐに探したけどどこにもいなくて、パパにどうしてって聞いた。でも答えてくれなかった。

当然、パパは知ってたんだよね。あたしが良平君と暮らすためにこの仕事してること。家を抜けて駆け落ちしようとしてること。

「で、その相手って誰なんだよ」

さあ？ クライアントのことはあたしは知らない。だけどね、決まって調教師にオーダーしてくる連中は独善的でとんでもない権力者で金持ちで他人のことをなんとも思っていない鬼畜だよ。これは絶対あつて。

てつきり、そっちの黒髪の子が売り渡したのかと思ったけど……違うんだ。そうだよ、変な離れ小島に来てなってるのに、本人がここに居るのはおかしいよね。

ああ、きつともうおしまい。この恋は。

だって逃げられない。逃げたって回収屋がいるし、あたしがこの仕事を断っても別の調教師が派遣されるだけだもん。それに絶海の孤島……どう逃げろって言うの？

好きにならなきゃよかった。こんな辛い思いするなら。

そういつて背の高い少女はわんわんと喚いた。大切な人が目の前で絞首刑にでも遭うかのよう。

「……君はそのことを知っていたのか？　こういう連中がいるってことを」

「あたしは知らないんだよ。きつとあたしよりもずっと上の人間が顧客なんだ。凄く興味深いんだよ」

そういつて少女はカタカタと指を動かして興味ありげにショートカットの女性を見る。

黒髪の彼女はじつと考えた。

相手である少女が知らないとなると自分では手が出しようのない存在だ。

では自分も目の前の女性のように泣き喚くしかないのか。

そんなのは、嫌だ。

「どうすれば……どうすればいい。この難問に対して君ならどう対処する!？」

「さっきいった座標の場所に島があるっていったけど、あたしの記憶じゃここ百年はその場所には何もないことになってるんだよ。でもね、不思議なことにそこは海保や中京、アメリカの原子力潜水艦なんかが頻繁に警戒してるルートなんだ。凄く興味深いんだよ」

「そんな眉唾な情報はどうでもいい。私が今ここで欲しているのは彼を助ける手立てはあるのか、ないのかということだ」

少女は無視するようにノートブックを叩き、何かのアプリケーションを動かす。画面にはいくつものキーワードが出た。

“東女国伝説について”というレポートや“鬼”というキーワードが交差する。

「あるよ」

その言葉に、彼女とぐずぐずと泣いていた女性が同じような表情で顔を上げた。

「……君はドラえもんか？」

「神様なんだよ」

「ほ、本当ですか？」

「うん。でも二人に聞きたいことがあるんだよ」

どんな結果になろうと後悔しないと誓えますか？

全てを投げ打ってでも彼を救うと誓えますか？

「そ、それはどうい……」

「誓えるか誓えないか、なんだよ。今聞してるのは」

二人は頷いた。しっかりと、はっきりと。

「コンポジションC4まだある？」

「もう学校計画の時に全て使ってしまった。今から精製しようにも時間も物資も……」

「じゃ、取り寄せよう」

「どこから？ 誰から？」

「武器商人に知り合いがいるんだよ」

「君は相変わらず私と住んでいる次元が違うのだね……」

彼女は呆れたようにため息をついた。

しかし、同時に妙な頼り強さも感じる。この難問を打開できるような力。

「そのノッポは拳銃使える？ 人殺せる？」

「ひ、必要であれば……」

「オーケー上出来なんだよ。じゃ、このマニュアル読んで」

プリントアウトした分厚い紙束を渡す。既に用意してあったところが憎らしいと彼女は思った。

「私は何を？」

「あんたはパズルの時間」

こちらにも分厚い紙束を受け取る。数枚、ぱらぱらと捲り、馬鹿馬鹿しいと顔を上げた。

「本気かい？ これを君は本当にする気かい？」

「答えは常に単純なんだよ。文句があるならあたしは手伝わない」

「わかった……」

半ば呆れたように笑い、真剣にその書類を読む。

非現実的な言葉の羅列。もっともらしい狂言。

そんな中で少女は一人呟く。

「問題は誰が———そう、誰が……」

その小さな嘆きは誰の耳にも入らなかった。

三十八粒

ぐったりとわだちに咲く、草花の上に投げ捨てられた。湿った頬に乾いた砂がついて生理的な嫌悪を運ぶ。

酔いはすっかりと覚めていて頭ははつきりしているのに、体は酷く重くて節々が痛む。水を吸った服が冷たくて気持ち悪い。

肉体的な疲労。

「あー、疲れた。……ええっと、そうだな、少し話をしようか。呉葉から何も聞いてないんだろ？」

「……………」

彼女は僕に昔話を聞かせた。

その島、というよりも国の名前は東女国。地図には載っていない仙境。その国の人々は独特な文化を持ち、日本古来の神々を崇めていた。

島では巫女が島でのあらゆる出来事を取り仕切っていた。巫女は島で実質的な支配権を得る代わりに神の為に生涯独身を通さなくてはならず、それは身に堪える苦行なのだという。

孤独で、恋人も許されずただひたすら神の傍らにいる存在。全ての巫女はそれを試練として耐え忍ぶ。

しかし、ある巫女はその掟を破り、恋人を作った。

恋人は彼女の弟だった。唯一、優しく接してくれるのは彼女だけで、彼女にとっては彼だけが世界だった。

巫女と彼は島を抜け出し、どこかで末永く暮らした。

しかし、残された人々は怒り狂った神に呪われた。女は老いることが無くなり、男はその反対に異常に早く老けた。

「まさか、とは思っただろ？ あたしも実際そー思う。十年二十年……もう年十年つう時間が過ぎてるのにあたし自身全然そう思わない。五分も一年も同じように感じる。まあ、それはいいか。伝説がどう

あれ、あたしらは十代で体内の時間が停止しちまう。そして男は生まれても“年老い”てる。生まれながらにしてヨボヨボの子供、ア
ンタみたことある？　かなりシヨッキングだぜ、あれ」

「瑞樹……やめてちょうだい！」

呉葉さんは近くの鬼に手当てされながら咳き込むように吼えた。
悲痛な叫び。

だけど瑞樹さんの言葉は止まらない。長年の憂さを晴らすかのよ
うに饒舌に口は動く。

「先代の巫女辺りからだったかな、これは祟りとかじゃなくて遺伝
的な問題だっていい始めたんだよ。里の中で近親婚をし続けた結果
だってな」

だからいろいろやった。どの遺伝子が原因か調べたり、外の人間
とこここの人間をまぐあわせたりな。

だけど妊娠率は異様に低くて、上手く男が生まれても年寄りで直
ぐに逝っちまう。偶に女が生まれることもあったが、確立が低くち
や意味がないし根本的な解決には至っていない。

まあその過程で分かったことだが、生物という意味であたし達は
外の人間といろいろ違うらしい。珍種つうのか？　故に同種族のオ
スと交配するかしないとまともな子供は生まれないんだと。

それはイコールで自然界よりしく突然変異が起こって男が生まれ
るのを待つしか道ってことだった。

じゃあ、このまま何世代も遺伝子異常が起こるまで孕み続ける
か？　それは無理だ。あたし達は母体に掛かる負担やリスクが通常
の人間よりも遥かに高い。とてもじゃないが耐えられない。

じゃあ、このまま緩やかに滅びるのを待つか？　ただ生まれて滅
びるなんて嫌だ。

で、誰かが考えたんだよ。

待てよ、一人いるじゃないか。私たちの遺伝子を持った者が外に。
数百年前にいなくなった奴の子孫はどうなっている？　そいつら

は子供を成さなかったのか？　ってな。

調べるのには随分時間が掛かったぜ。何せ、姫野って名前の奴は大抵が行方不明で大抵が生死不明だからな。

でも、ここにいます。

運良く、男だ。遺伝子の異常も見られない。

父親はどうする？　いろいろ面倒だから殺そう。

子供はどうする？　子供は先祖の罰を受ける為に辛い人生を送ってもらう。

「そう、お前は端から種馬としてここに連れてこられたわけ。ああ、ちなみに抜け出た奴を探すって案と辛い人生を味合わせよう案はこの呉葉嬢が考えたんだぜ？」

そういつて彼女はにっこりと笑う。清々しいほどの笑み。

それは醜悪で、禍々しくて、冷酷な笑みだった。

「瑞樹っ！！」

「何怒ってんだよ、さっき自分でもいったことだろ？」

「呉葉様、静まり下さい！　いつかは誰かが話さなくてはならなかったことです！」

「桐生さん、落ち着いて」

喉笛にかぶりつくのではないかという迫力。しかし、周りの人間に押さえ込まれそれは燻った。

「その閃きと考え方はあたしも尊敬するよ、ホント。だけどさうなら遊びを入れる必要なんてなかったし、手足をもいでも連れてくりゃよかったんだ。その上、情なんか持ちやがって……。はつきりいつてアンタには失望したぜ、桐生呉葉」

「情、なんか……」

「情なんじゃない？　嘘だな。なら復活式を取りやめるなんて案を出すべきじゃねえだろ。アンタはそれでいいかもしれない。……だけれどその為に苦渋の数百年を味わってきたあたしら姫野の一族はどうなるんだ！　望んでもいない子を無理やり産まされ、殺され消え

ていった者達はどうする！ あんたらの為に労働に従事している人間達はどうなる！？ ハッ、鬼の名家が桃を育ててる？ これほどの屈辱はねえよ！」

「……………」

「あんたはいいさ、あのまま行けば子供もできた。それが男なら否応なしに里での地位は上がるからな。でもあたし達は何も変わらないんだ。何も……何もな」

「地位なんてもの、私は興味ないっ」

「だから、お前らは不幸でいろって？」

「……………」

「ただ姫野の血を引いていたというだけで、あたし達は肩身の狭い思いをしてきたんだ。アンタは確かにそういう差別意識をなくすように努力してきたすげえ巫女だよ。尊敬に値する。でもな、それじゃ足りないんだ。真に自由を勝ち取るためにあたし達はあたし達の我俣を通させてもらう」

そうはつきりといい、今度は僕を睨んだ。鋭く酷薄そうな表情。家畜の豚を見るような冷えた表情。

「何をされるか分かったか？ お前は犯されるんだよ。死ぬまで種馬としてな」

「はっ……はっ……はっ……」

じっとりとした汗が吹き出てくる。震える手で起き上がろうにも膝が笑ってしまい、地面に転がってしまう。

「子供が生まれて、それが女ならお前とまぐあわせる。男ならあたし達が犯す。そうやって血を濃くしていけば、穢れた血はなくなり元来の高潔な姫野に戻るだろう。そうすれば止まった時間もきつと動き出す」

死ぬまで飼われる。それがどういう意味か。

嘘であってほしいと思う。全て嘘であってほしいと。

けどそう思うにはあまりにも救いがなくて、逆に多くの情報が現実を知らしめる。

他の鬼の面の法被は哀れんだ表情で僕を見つめる。それがより一層僕を焦燥に駆らせる。

まるでそれが確実な未来と決定付けられているかのようなその瞳が。

「そんな……そんな……」

「嘘だと思うか？ それとも怖いか？ どちらにしてもお前の人生はここで終わったんだ。恨むならあたしとお前の先祖を呪うんだな」
金色の鬼は嬉々としてこん棒を振り上げた。

三十八粒（後書き）

ある意味ファンタジー。

三十九粒（前書き）

非常に下品な表現があります。

三十九粒

目が覚めると真っ暗な部屋にいた。

もしかして、僕は長い夢を見ていたのだろうか？と疑問が沸いて出る。

下の階では両親がテレビを見ていて、僕はベットの上でまどろんでいるのではないかと。ささやかな現実逃避。そうであって欲しいという己が描く幻。

ずきりと手足が痛む。摩ってみると手足に手錠がしてあることが分かった。次に目が慣れてくるとそこがどこか分かってきた。

「窓がない……」

何もない真っ暗なコンクリートの四角い部屋。どこから微量の光が漏れてきているのか薄っすらと向かいの壁が見えた。

近くにはぼろい布切れ。掛け布団ということなんだろうか。

耳を澄ましてみると小さく風の流れる音がした。頭を上げると暗闇に三つほどの小さな赤い光点がついている。

天井はなかなか高いようだ。

カシャンと音がして急に部屋の明かりがつく。闇は白く照らされて、ドアノブのついていない黒い扉が蝶番を軋ませながらゆっくりと開いた。

女物のスーツ服を着たさやかさんがそこにいた。両手にはバケツが二つ。

「あたしの許可なく口を開くな。私の許可していないことをするな。排泄は隅の溝にしろ。水と餌は日に二回与える。それ以外はあたしの用があるまで寝ているのがお前の仕事だ」

彼女はそう言って隅の排水溝を指差した後、二つのポリバケツを見た。

中身を覗く。片方にはたっぷりに入った水、もう片方にはロールパンが二つ入っていた。

「あ……あのどういう——ぐあっ！」

彼女は冷たい表情で僕に拳を食らわす。そしてバケツの水を倒れた僕にかけた。

「あたしは今、お前に喋れといったか？　いつてないだろ？　水は抜きだ」

青いバケツが落ちて横たわった。

「お前はクズだ。どうしようもないクズ。生きているだけで他人に迷惑をかけるゴミ。それをまず理解しろ。そして自分がここにいるのはしょうがないと頭に刻み込め。理由はお前がどうしようもないゴミだからだ。わかったか？　わかったなら、私はクズですといえ」抑揚のない声で彼女はそういった。いつもの子供のような雰囲気は既に霧散していて、表情には感情が籠っていない。

「あ、あの」

つかつかと近寄るとさやかさんは僕の髪の毛を鷲掴みにして顔を近づける。

「聞こえてないのか？」

「い、いたっ……」

「もう一度いう。聞こえないのか？」

「あ……わ、私はクズです」

「それでいい」

ほっとした束の間掴んだままの頭に膝蹴りが舞い込む。次に僕の頭は地面に叩きつけられた。

目の奥がチカチカと光り、頭が割れるように痛む。

「あ……がっ……うう」

「あたしの手を煩わせるなゴミ」

胸ポケットから小さなメモ帳とペンを出して濡れている地面に落とす。

「次にあたしが来るまでに全ページ全部行に“私はゴミです。生きていてもしょうがないゴミクズです”と書いておけ。書けていなかったら飯抜きと罰だ」

そういつて彼女は元来た入り口に帰っていった。カシャンとまた音がして電気が消える。

まず、情報を整理しよう。

どうやら僕はどこかに監禁されていて、さやかさんがその監督役をやっているようだ。だけど、何故彼女が？

呉葉さんはどうなったんだろう。瑞樹さんは。

あれは本当に夢だったのだろうか。実は僕はずっとこんな生活をしていて今日たまたま正常に戻ったとか。

いや、そんなまさか。

だけど僕には確認する術がなかった。

ただ今しくはならないのはメモ帳にひたすら文字を書くこと。暗闇の中で感を頼りに。

一回目の訪問からそれは随分と長いような気がした。

音がして明かりがつく。僕はそれに飛び起きた。緊張と疲労から来る浅い眠りと喉の渇きのせいで全身が気だるい。

扉から現れた彼女は一回目と同じように両手にポリバケツを持っていた。

僕はまた水抜きになるのが恐ろしかったので、黙り込んで彼女が喋るのを待った。

「紙を見せろ」

「は、はい」

両手でおずおずと差し出す。彼女はそれを適当にパラパラと見ると笑った。

そしてゆっくりと力を込めてメモ帳を裂く。

「汚い字だな。いいか、勘違いするなよ？　こんなのはできて当たり前だ。褒められるとか思ってたんじゃないだろうな？」

パラパラと小さな紙は桜吹雪のように地面に落ちた。今までの苦労が台無しにされていくような妙なストレス。

彼女は僕の顔を見ながら卑屈に唇だけを歪めて笑った。

「餌だ。これが欲しいか？ 欲しかったらあたしに踊りを見せろ。そうすりゃくれてやる」

「あの……えっと、どういう……ぐっ」

押し付けるような蹴りが胸に入り、僕は咳き込みながら倒れる。乾いた口の中が酸っぱい唾液に染まった。

「服脱いでケツの穴広げながら踊る以外に今お前がしなくちゃいけないことはあるのか？ あるなら試ってみろ」

「え、あの」

「十秒後に開始」

彼女は袖をまくり時計を見た。僕はうろたえる。

どうしよう。早く服を脱がないと。

いや、そうじゃなくて。だけど。

「あと五秒」

自棄になって僕は服を脱ぎ捨て、彼女にお尻を向けた。

「始めろ」

彼女は手拍子で僕に踊りを施す。僕は自分で尻の谷間を開いて馬鹿みたいに尻を振って踊った。

彼女は口を押さえてクスクスと嘲笑した。その度に嫌な汗が額を走る。

顔が赤く染まり、涙で視界が歪んだ。

「お前の知っている人がこれを見たらどう思うんだろうな？」

屈辱。

それ以外で今この現状を指し示す言葉はなかった。

踊りが終わったあとも小ばかにするように僕を笑い、彼女はドアの向こう側に消えていった。

四十粒

食事の回数から換算して恐らく三日目。

暗闇の中で水を啜る。コップなんて上等なものはないので、両手で水をすくって口元に運ぶ。

パンをかじる。暗闇の中に住む怪物のように身を潜めながらもそもそと小さなパンを噛み千切る。

飢えと冷えたコンクリートの冷氣は僕に休むことを許さず、ゆっくりと時間をかけて肉体と精神を租借していく。

蛇に飲み込まれた鼠のように僕はただじっとしているしかなかった。

何時間寝たのか分からない。少ないようにも多いようにも感じる。時折聞こえてくるカシャンという幻聴は、眠りに落ちた意識を無理やりに覚醒させた。

目を開いてもあるのは暗闇。暗闇は何も語らない。

眠ることが苦痛。起きていることが苦痛。生きていることが……

苦痛。

白かったはずの壁は見続けるごとに奈落の底のように暗闇を広げ、ありもしない何かを喚起させていく。

それは子供の声。それは大人の声。それは両親の声。それは坂之上の声。

僕によって、僕のせいで、僕がいたせいで不幸に、あるいは死んでしまった人達。彼らは一様に僕の前に立って聞くのだ。

「お兄ちゃん痛かったよ」

「お前のせいで」

「お前なんて生まなければ」

「良平君、私に自分を重ねたのか？ 私は君ほど腐ってないさ」
そして僕。

「本当に子供なんていたのか？ お前に酷いことをしていた大人も、

両親も、坂之上も。お前が現実逃避のために作ったキャラクターじゃないのか？」

「違う違う違うっ！」

「どうしてそういう切れる？ ……ようく考えろ、お前はいいかもしれないもう一人の自分と話しをしてるじゃないか」

「お前だけが幻想だ！」

耳を塞ぎ、目を瞑り、小さな怪物はうずくまる。

「違う、僕だけが現実なんだよ。お前はずっと一人孤独に隔離病棟に收容されてたのさ。その方がある意味、お前にとっちゃ救いかな？」

「嘘だ……」

「嘘だといいな」

「……消えろっ！」

周りを歩く亡霊は、手で触れようとするとこうやって消えていく。ふと静寂が包み込み、急激な孤独に見舞われる。左右を見回しても何も無い。

だけど耳を澄ますと誰かがクスクスっているような声が聞こえる。それは段々大きなものになって、耳をつんざくほどの笑いに変わる。「——煩いっ！」

静寂。煩いほどの、騒がしいほどの静寂。

明らかに僕の頭はイカれ始めていた。いや、ずっと前からそうだったのかもしれない。そういう気すらしてくる。

全てに現実感がなく、全てがあやふやで、全てが軽いまま僕は目を閉じた。

この夢という名の現実から目を覚ますように。

この現実という名の夢から眠りにつくように。

川のせせらぎの音。鳥のさえずり。芝生の感触。

目が覚めるとそこは森の中だった。白銀色の眩しい光が僕の頬を撫でた。

「お、目覚めたか？」

「ここは……？」

「森の中って答えじゃだめか？」

そういつて法被姿の瑞樹さんは笑った。手の中には薄紅色の桃。

「そんなきよどるなよ。なに、とって喰うわけじゃねえよ」

「僕は……あれ？ 確かどこかの部屋にいて、これも夢？」

「さあな。そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない」

さわやかな森の臭い。久しぶりに嗅ぐ自分以外の何か。

彼女は無言で桃を差し出しす。僕はそれをゆっくりとした手つきで受け取った。

柔らかな産毛と握れば直ぐ押しつぶされてしまうだろう儂く脆い果実。

鼻に運んでその香りを確かめ、次に探るようにして皮ごとかじった。零れ落ちるほどの汁気と久々に味わう甘さに体が喜ぶのがわかった。

次からはただ食った。

「おおー、もう喰っちまったのかよ。まだあるけど喰う？」

「……………」

無言で頷く。早くと目で訴える。

「んー、ただあげるだけじゃつまらねーから、ちょっとゲームしようか」

「ゲーム？」

「あたしにキスするんだ。恋人にするような、ドロドロのベタベタな奴」

「え、でも」

「早くしないと、夢が覚めちゃうぜ？ また喰らい闇の底に逆戻りでもいい……うおっ」

僕は彼女を押し倒す。鼻を近づけて、唇を合わせた。

鈍く光を反射するざらついた舌は相手の柔らかな肉を割り、うねりながら粘膜に触れた。ぬめついた液体が互いの口を汚すが気にし

ない。

彼女も僕もお互いを抱きしめ合う。足を絡め、舌を絡め、全てを一つに集約させる。

それはまるで蛇のように、樹木に絡みつくツタのように、相手を縛り、自身を束縛する。

彼女の肩を押す力に初めて僕は体を離した。互いに深く息を吸う。「さ、盛ってんなぁ……。そんなに桃が喰いたいのか？ それとも夢が覚めるのが怖かった？ まあ、どっちでもいいか」

「……………あ」

今度は僕が押し倒される。容易に抵抗できるほどの力加減。

「このまま進めば夢が覚めない。お前が嫌だと思うならあたしをどければいい。ただ目が覚めるだけだ」

僕は。

僕はどうしたいんだろう。

「で、どうする？」

するってそれは。

セックス。

「僕は……」

目が覚める。

そこは暗く冷たい小さな世界。音の無い孤独な世界。時間が止まった世界。

手に違和感を感じて、僕はそれを鼻に近づける。

暗闇には不釣り合いな柔らかい香り。産毛の手触り。

瑞々しい桃。

僕は泣きながら隠すようにしてそれを口に運んだ。

四十一粒

白いワイシャツ姿の彼女は右手の親指の爪を何度も何度も噛む。どこかの店の事務室のような場所に彼女はいた。室内にはシャワールームや簡易ベッドなど一通りの生活スペースがあった。

テーブルの上には四台のモニターが並べられている。三つは俯瞰の位置からある一室を様々な角度から捉えていて、最後のモニターは彼女がその席を離れていた時の録画映像を映し出していた。

今現在を映し出す三台のモニターは狂った少年の歪み^{ひず}を捉えていた。

白黒に映る少年はぼんやりとした目で虚空を眺め、小さく何かを口走っている。先ほどは大きな叫び声を上げていたのだが、今はそのなりも潜めている。

「おつかれ。どう、アイツの様子は？」

肩を掴む感触に彼女ははっとなって振り返った。挨拶をしようと席を立とうとするが彼女はそのままいいと笑った。

ラフな甚平姿。スポーツでもするような短い髪。

自分とどこか似ている、と少し思った。

「……元々心が強い方ではなかったのでしょうか。四日目にしてもう限界のようです」

「へえ、人間って隔離するだけでこんなに簡単に壊れるもんなんだ。……あれ、四日目？ その紙には飯の回数が十回になってるけどさ。日に二回の食事じゃ計算合わないんじゃないかねえの？」

「食事の回数、及びタイミングによって彼は一日を判断しています。それを不規則にすることによって彼の中の時間を崩すことができるのです」

「なるほど、確かにこんな状況で日に何度も食事ができたら体内時間はオカシクなりそーだ」

モニターの横に置かれた小さなメモ帳には食事の回数、睡眠時間、

暴力の内容、異常行動の強弱や食事に投与された薬の内容などが事細かに記されていた。

少女はその紙を手に取り、興味深そうに微笑んだ。

「……変わるとは聞いてたけどあそこまで様変わりするとはな」

「え？」

「昨日のことだよ。直ぐにお開きになっちゃったけど、あたしとしてはかなり面白かった。昨日の続きはまだできないわけ？」

なんのことだろうと思い、昨日の“飴”の部分だということに彼女はすぐに気がついた。

拘束された人間は自由を覚えると、翼をもがれる事を極端に恐れる。

そして自由に執着する。

小鳥が籠の外に憧れるように。

「……ああ、もう少し状況が進んだら、です。もう数回、屈辱と羞恥と暴力を与えて“夢”の方が自分に優しいと認識させれば完成です」

猫のように喉を鳴らして日焼け顔の少女は笑った。目じりに涙を浮かべる。

歯を食いしばって必死に笑いを堪えるが、声が漏れる。

「くはは、あの企画書の奴ほんとにやるつもりなのかよ。てっきり大げさに言ってるのかと思ったけど違うのか。いいね、それ中継して里中で放送してもいい？」

「ええ、どうぞ。支障は何もありませんから」

私の計画に、仕事に狂いはない。

「いやー、流石高い金払って呼んだだけあるわ。アンタ最高だね」
「ありがとうございます」

彼女は席を立て、隅に置かれた旅行鞆の元にいく。鞆は二つあり、ひとつは彼女の衣服や必要なものが。もう一つは様々な“器具”がケースいっぱい押し込まれていた。

「今直ぐ、遣いの者にビデオカメラ持ってこさせるよ」

「分かりました。それまでお待ちしております」
少女は笑い、軽い足取りで扉の向こう側に消えていった。

携帯電話も衛星電話も通じない。それは自分でどうにかしなくてはならないということ。

宝物は直ぐ目の前。手で触れられる距離。触り愛でることのできる距離。

しかし、今はそれをじっと見ていることしかできない。爪を立てて傷をつけることしかできない。他人のために傷をつけ、磨きまた傷をつける。

「血……」

手の甲についた彼の鼻血。目が合ったからという理由で殴ったときの血。

べろりと愛しむように舐め、沸々と湧き上がる思いを彼に馳せる。

「下種め」

彼を意思のない人形に変えるだと？

選択権をなくすだと？

そののどが彼なのだと彼女は静かに憤慨する。

自我のなくなった人は人ではないのだ。

人の形をした人形。

「下種どもめ！」

テーブルを力強く彼女は叩く。怒り苛立ちそして嫉妬。

あたしなら。

あたしならもっと上手に彼を壊してみせる。

あたしを恋焦がれるように調教してみせる。

幻覚剤の投与など邪道だ。

真の調教とは肉体と心に刻み込むものだ。

彼女は強く爪を噛みながら白黒のモニターに映る彼を指の腹でなぞった。

「ああ……」

愛しい、いとおいしい、狂おしいとすら思う。

本当ならあたしと一緒に今頃どこか遠くへいていたはずなのに。
今頃あたしがあの肢体を貪っていたはずなのに。

暗闇の中で溶け合うようにして、互いの肉を喰らっていたはずなのに。

「最初に見つけたのはあたしなんだ……。あたしに、あたしが、あたしこそが」

背の高い彼女は親指から零れる血の滴にも気がつかず、一人じつと呟き続けていた。

四十一粒（後書き）

次はハードなエロになると思います。痛い方向にハードかもしれない。

四十二粒（前書き）

エロ注意。変態です。

四十二粒

カシャンと重々しい音に彼は目を開いた。本当に聞こえているのかどうか分らない。

しかし、無気質な眩しい光は藤岡さやかの訪問を告げていた。

彼は飛び跳ねるようにして起き上がる。遅いという理由で何かされるのでは、という恐怖があった。

「……………」

彼女は亮平を無視して三脚を置き、その上に大きなビデオカメラを置いた。次に黒い旅行鞆がガラガラと音を立てて室内に運ばれる。今までとは違う奇妙な圧迫感に彼の体は震えた。

何か、嫌な予感がする。

さやかは床にビニールシートを敷き、その上にパイプイスを置くと、つかつかと隅で怯えている彼の元に寄り、拳を振り上げ殴った。理由もなく行使される暴力に彼の頭は混乱した。

何故、自分はこんな酷い目に遭っているのだろうか。

何か気に喰わないことをしただろうか。

きつとそうだ、僕が気に喰わないことをしたから彼女は。

抵抗する気も自分を守る気力もなく、彼は成されるがまま暴力に耐えた。

服を無理やり脱がせると、さやかは髪を掴みシートの上に彼を寝かせた。体をヒモで縛り上げ、カメラの前に晒す。

「あ……あのっ」

ぱんと風船の割れるような音がして、彼は黙り込む。緊縛縛りの亮平に彼女は一本の注射器を見せた。

「そ、それは……いやだいやだいやだいやだいやだいやだ！」

その薬だけはいやだ！」

何の薬で、それが何の時に使われるのか彼は理解していた。ゾクゾクと鳥肌が背筋を穿ち、涙腺を緩ませる。

彼女はそれを見て、注射器を床に置くと、彼の股に足をスイングさせた。睾丸が強く圧縮され、頭先从股にかけて真っ二つされるような激痛。

口を開けて、硬く動かなくなった彼に無言で注射器の液体を血管に滑らせる。次に飲み薬をお湯で無理やり彼に流し込む。

声を殺して彼は静かに泣いた。

僕が一体何をしたというのだろう、と。

消沈した意思とは対照的に彼の股座は大きくそそり立つ。体は熱を持ち始め、すすり泣く声も甘さが混じった吐息に変わった。

彼女はカメラに向かって亮平の尻を向けさせる。弛緩剤と覚せい剤を混ぜたローションを肛門に塗りたくり、穴を指で広げて笑う。

次に鞆から薄手のゴム手袋を取り出し装着すると、今度は黒光りする男性器を模したバイヴを取り出した。

彼は朦朧とする意識の中、息を呑んだ。今かされることについてもそうだが、鞆に押し込まれた奇妙な器具の数々が自分に向けられたものだと思ふと恐ろしくてしやがなかった。

冷えた表情のまま、さやかは黒いそれを亮平の口に運びしやぶらせる。つるりとした硬い感触。

丹念にしやぶらせると彼女はそれを彼の肛門にぐうっと押し入れた。彼の肛門は異物を吐き出そうとパクパクと魚の口のように震え、赤々とした内臓をカメラに見せた。

「あがつ……はあふ……ああぐ」

呼吸に合わせて彼女もその入れ具合を調節する。押し進めれば進めるほど、ローションが愛液のように溢れ出る。

半分ほど入ったところでさやかは彼の太ももを持ち上げるとパイプ椅子の上で止まった。

「あ………ああ、あの」

ふるふると亮平は首を横に振って、拒否を示す。しかし彼女は侮蔑を含んだ冷笑を浮かべながら彼を椅子の上に落とした。

「あ………が———っ！」

椅子の軋む音と共に彼の肛門に黒いそれは見事に飲み込まれた。痛く苦しい筈なのに、彼の具足は赤くそり立ち、鈴口から透明の液体を零す。

彼女はカメラに戻り、放心しつつある亮平の顔と肛門を映した。口を開き、肩で息をする無様な表情。

次に彼女は数珠の連なりのような一本の棒出した。先端は小さく細いが手前に来れば来るほど数珠の玉は大きくなっている。

スイッチを入れるとそれはぶうんと音を立てて細かく震えた。彼女は無言で亮平の具足にそれをあてがう。

「もう……やだよお………」

「黙れ」

「痛いのもそういうのももう嫌だ……。家に……帰して」

彼女は睾丸を掴むと力を入れて手を握った。

彼は小さく悲鳴を上げながらぼとぼと涎を自分の胸にだらしく垂らす。彼女はボールギグを口に咥えさせ、嘲笑した。

「嫌だ嫌だというわりに、お前のここは嬉しそうに泣いているぞ。クズだクズだといってはいたが本当にクズだったとは。生きていて恥ずかしくないのか？」

穴の開いたボールギグから垂涎しながら彼はうーうーと犬のように泣いた。しかし、泣いたところでさやか of 行動は止まらない。

彼女は数珠を口に含み、唾液をつけると彼のそれを掴み、尿道に狙いを定める。振るえる振動が鈴口をくすぐりそれだけで彼の具足は赤く膨張した。

「いーち………にーのっ！」

の、で彼女はそれを尿道に突き入れた。スイッチを強にして抜けないようにぐっと押した。ついではばかりに肛門のモノにもスイッチを入れる。

彼のそれは赤々と晴れ上がり、精を撒き散らそうと震える。しかし、数珠が栓となってそれを許さずビクビクと痙攣させるだけ。

「んんんんんんんんんんんんんんんっ！」

彼女は何度も上下にピストンさせながら、数珠をギリギリまで引き抜き、また入れるという作業をした。尿道の端からは白濁とした液が漏れた。

永遠に続く絶頂。収縮する肛門と睪丸。焼きついてしまいそうな脳髓。

体が椅子をがくがくと揺する。足の指はぎゅっと握られ、体の筋は張った。全身から汗が零れ、口は閉まりの悪い蛇口のように涎を零し続けた。

さやかは冷静にそれをカメラで拡大させたり、彼の表情をしつかりと映し、デジカメで画像を保存した。

朦朧とする意識の中で彼はただ自分に向けられたフラッシュを見続けた。

一通り撮影を終えた彼女は懷から一枚の写真を見せた。泣き腫らし、色の失われた彼の瞳に光が戻る。

それは両親の写真。彼にとってここでの唯一の現実。唯一確かな物。

さやかは小さく彼の膝の辺りに屈み、その写真を彼の具足の前に掲げた。そしてもう一方の手で数珠を引き抜こうと動かす。

彼は唾液交じりに唸り、叫び、懇願した。

どうかそれだけは、と。両親の写真だけは、と。おねがいです、と。

しかし、彼女は笑った。あるいは侮蔑。

「ちゃんと喋れ、クズ」

勢い良く引き抜かれ、白乳色の液体はパタパタと音を立てて微笑む写真の男女に降り注がれる。

永遠に続くような絶頂。気絶しそうなほどの射精量。

永遠に続くような喪失。気絶しそうなほどの罪悪感。

涙は頬を走り、彼は子供のように泣く。

そんな彼を彼女は髪を掴んで殴った。はずみでギグが取れ、泣き

声が室内に木霊する。

彼女の顔には彼の精液がべっとりついていていた。髪と頬を生臭い液体が汚している。

「……汚い物つけやがって！」

彼女は彼が動かなくなるまで殴り、蹴り上げ、壁に押し付けた。

「この写真が大切なんだろ？ ほら、くれてやるから自分で汚したのを自分で舐め取って綺麗しろよ。ほら」

唇の近くにそれを近づけて彼女という。

栗の花のような香り。まだ生暖かく熱を感じるそれ。

「……………えう」

「あははは、ちゃんと飲み込むんだぞ？ 自分で汚したんだからな。どうだ美味いか？ それともクズの味がするのか？」

彼は小さく震えながらゆっくりと自分の精液を舐め取り、唾液を飲む要領で無理やり胃に落とした。

苦く、臭みの強いそれに頭痛がする。耐え難い苦痛と屈辱に胃液がこみ上げてくる。

しかし、必死に丹念にそれを舐める。

たった一枚の写真の為に。泣きながら。震えながら。幸せの残りをかき集めるように。

「闇の中で目を凝らして眺めるんだな。……礼はどうした？ 写真、取り上げてほしいのか？」

「あ、ありがとうございます」

荷物はそのままに、彼女はまた扉の向こうに消えた。

四十三粒

部屋に戻ると彼女は終了の連絡を入れた。壁に備え付けられた白い無線電話を手取る。

「ええ、その後の処理は……はい、そのように。……反響、ですか？　みなさまが？　それは調教師明利に尽きる言葉ですね。……はあ、そんな目的が。いえ、私はこれでこの仕事が終わりののでゆっくり休憩を、と思っていまして……ええ、そうしていただけると幸いです。はい、では迎えのその日までゆっくりさせていただきますね。はい、ありがとうございました」

受話器を置く。上着を机に脱ぎ捨て、ズボンも豪快に下着と脱いだ。直ぐに全裸になり、シャワー室に向かった。

今頃、彼は部屋に放射されたガスによって眠り、外に運び出されているだろう。

そしてその後あの部屋で過ごすか、外の住民の性欲の捌け口になるか問われる。

いや、今はそれよりも。

「熱い」

燃えるように、焼けるように体が熱い。

「亮平君のせーえき……せーえきだ」

それも絞りたての特濃。

頬についたそれを指ですくって口元に運んだ。まだそれは熱を持っている、液体というには些か硬かった。

指の端まで舐めとり唇を舌で拭いた。

口の上で転がし、唾に混ぜる。その後、舌の腹で潰すように広げて風味を楽しんだ。

「もう……もう、随分と良平君としてない」

透明の液体が股からゆっくりと太ももを駆けた。髪の毛についた子種を指でかき集め、鼻の下に塗る。

鼻腔をくすぐる生臭い性臭に彼女の脳みそは包まれる。

「我慢……我慢しないと、でも欲しい」

今日の放送の目的は里のみなが亮平に対する抵抗をなくという意味がある。彼女が語った。つまり、あそこまで壊されかけているのだから自分がちよつとくらい犯したところで彼の心は痛まないだろうとみなに思わせるための措置なのだ。

ちよつとくらい虐めても、壊しても大丈夫だろうという措置。

馬鹿らしい。

彼を虐めていいのはあたしだけだ。

彼を犯して殺して壊していいのはあたしだけ。

「何が鬼の末裔だ。下種どもめ」

天才、仙境、特権階級。

ご大層なお前らにここまで効果的に彼を壊せたか？　いいやできはしないだろう。

相手を本当に壊すということ、それはつまるところ愛情表現だ。いとおしくて狂おしすぎて、壊したいほどに愛している。

自分の手で愛する人が変わっていく美しい様。

愛のないお前らにそんなことはできはしない。

「鬼は毒酒を煽る。そして寝首をかかれて、怒り狂う」

シャワーを流しながら彼女は精液を小さく噛み千切り、丁寧に飲み込む。そして自慰に耽った。

「どうよこれ？」

そう姫野瑞樹は笑った。小さな地下牢に繋がれた着物姿の少女は壁から生える手かせに自由を奪われていた。

柵ごしには先ほどまで何かを映し出していたらう液晶テレビ。

「……殺してやる、殺してやるわ！　彼にこんな……こんな酷いことをするなんて」

鎖は重い音を立てて、引っ張られるがそれは彼女の手首を痛めるだけにしかない。

強く睨みつけ、咆哮を彼女は上げた。しかし瑞樹は別段恐れた様子もなく笑う。

「ぷはっ！ 面白いこというんだな。これが本来のシナリオだったはずだろ。何が不満なんだ？ 自分がこれをできなかったことが不満なのか？」

「私はあるなことっ！」

「くはは、当日早々アイツを犯した奴のいうことかよ。笑わせるね」

「お前なんか、お前なんかこの鎖がなければ！」

「流石、呉葉の名前を貰ってるだけあるな。目がマジだ。臆病なあたしはアンタに呪いを貰う前にさっさと退散しようかね。……ああ、ちなみにこの後はお前の大好きな良平君を抱いてくる予定なんだ。じゃあな」

「みずきいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！」

嫉妬に狂った女は叫ぶ。嫉妬された女はその叫びを心地よさそうに聞き、一度も振り返らず去った。

小さな扉は音を立てて閉じられた。

「で、どうする？」

髪の短い少女は聞いた。そこは森の中で彼女の横にはどこか暗い瞳の少年。

「どうすれば……いいんだろう」

「それは自分で決めろよ。あの暗い部屋に戻るか、夢の続きを見ることを選ぶのか」

彼は露骨に俯き、肩を寄せた。

戻ればきつと屈辱の続きが待っているのだ。あそこにあるのは親の写真一枚。それだけは何もない。

それに比べてこちらは溢れるほどの自由がある。少なくとも美しい自然と綺麗な空気は味わえる。

「僕は……ゆ、夢を見続けたい、です」

「じゃあ、自分からあたしを抱くんのだ。優しく、丁寧にな」

いわれるがまま、彼は小さく頷いて伏目がちに彼女に手を伸ばした。熱した鉄に手を差し出すようにそれは戦々恐々としていて、脆く今にも壊れそうだった。

彼女の触れて、驚く。

「ご、ごめんなさい。ごめんなさい」

「興が覚める。黙ってやってくれ」

「……はい」

その謝罪はどこの誰に向けられたものなのだろうか、と彼女は笑った。

自慰の終えた藤岡さやかはディールドやバイブレータを分解して、機械やプラスチックの隙間にある粘土の塊を集める。

ぱっと見ればそれはただの黒い粘土。しかしそれは然るべき手段を用いれば恐ろしい爆薬になるものだった。

あまり数が多いとはいえないがそれでも十分な量。

次に大きめのプラスチックの箱を開ける。内面に特殊なコーティングが施されていて金属探知機や赤外線を回避できるようになっていた。

中から出てきたのは単眼用の小型暗視スコープと分解された自動拳銃。弾薬は箱と同じコーティングがされたカメラのフィルムケースに入っていた。

何度も何度も練習したそれを頭に思い描きながら組み立てる。弾倉を装填しないままスライドを引き、引き金を引いてしっかりと動作するか確認する。

「問題なし」

これで奴らを殺せる。

彼女は静かに爆薬の準備に掛かった。

四十三粒（後書き）

無駄に長くなるので少し物語りを加速させます。
ちなみに上の特殊コーティングは実際にあります。

四十四粒

目が覚める。室内は和室で横には茶色の花瓶に綺麗な花が飾られていた。ここはどこだろう。

暗闇が全てのあの部屋でもなければ、僕が果てた森の中でもない。服は薄手の着物に変わっていた。

起き上がりとうして手がずきりと痛み、何でだろうと手首を見た。ら包帯が巻かれていた。長時間手錠をつけていたから腕がうっ血していたのか、それとも擦り切れていたのかよく分からないが何らかの手当ての跡。

もしかしたら別の要因かもしれない。言ってしまうばここまた僕の夢である可能性も捨てきれないのだ。

「よお、起きたか」

襖が雑に開かれ、青みがかったオレンジ色の夕闇の風景が目に入る。あまりの美しさと懐かしさに言葉を失う。

当たり前の景色、ただの沈みつつある夕日。それだけなのにこうも心に響く。

夢だというならこれはいい夢だと思った。

「おい、きいてんのか？」

「あ、はい」

「なんだよ、その道に迷った子供みたいな顔」

「あの、ここは夢の世界なんですか？ それとも現実？」

「はっ、相変わらずくだらねえこというのな。どっちにしたって関係ねえだろ。それを知って何か変わるのか？ お前はこっち側を取った、それだけを覚えていればいい」

彼女はお盆に乗せた温いお茶と二つ粒の菓を僕に飲ませた。胃にゆっくりと温めの液体が零れ落ちるのが分かった。

「飲んだか。じゃあ、行くぞ」

「はい」

僕には拒否権はない。そんな気がする。

それに少なからずあの部屋から僕を出してくれたという恩みみたいなものが漠然とあって、逆らえないような呪縛を感じた。

ここの屋敷は彼女の家なのだという。歴史を感じさせる古く手入れのされた家だった。

不安げな僕の表情を読み取ったのか、彼女は今から祭りのようなものあり、僕たちはその会場に向かっているのだと教えてくれた。

「その為に寝てるお前を苦勞して風呂にいれてやったんだ。ありがたく思えよ」

「あ、ありがとうございます」

そうまでして起きなかった僕ってなんだろう。

祭りの会場というのは公民館のようなところで、木造のためか年季を感じさせる。玄関では靴箱に収まりきれないほどの履物が溢れていて、人の多さが窺えた。

中に入る。室内は畳の敷かれた和室で生ぬるい人の湿気を感じた。壁際にはバイキングよろしく料理が並べられていて、みなそれを自分の食器に盛って食事を楽しんでいた。

扉が開くのと同時にみんなが僕らに注目して動きを止めた。なんだかその眼差しに居心地の悪いものを感じる。

瑞樹さんは僕に食事を取るようにいうとどこかに消えた。僕は纏わりつく視線に耐えながら食器を取り、自分の皿に盛り付ける。

少し頭がぼんやりとして、手が上手く動かない。何度もおたまを落としそうになる。

一人の少女が僕の元に訪れて盛り付けを手伝ってくれる。表情は酷く慌てていて額に汗が張り付いていた。

「ごごごご、ごめん。こっ、こんなことになるなんてししし知らないかった」

「すみません……どこかでお会いしましたか？」

その言葉に彼女は絶句した。

「おおおお前、何いって……。もももしかして、瑞樹に変なもの飲まされしてないか？」

「ええっと、そういえばさっき瑞樹さんに……」

不意に瑞樹さんが現れて、彼女の手をとった。

「おい、東。こっちにこい」

東と呼ばれた少女は何か言いたげな顔で僕を一瞥するとシュンとうなだれてそのまま人ごみに消えていった。

ああ、そうだ。彼女は東さんというんだっけ。でもどこで会ったんだろう。いまいち思い出せない。あとで聞こう。

その大広間は座る場所、というものが特に決まっていならしく、みんなそれぞれ好きな場所に陣を取っていて、僕もそれに倣って隅に腰を下ろした。

割り箸を割ろうするが、手の痛みのせいにか力が入らず足元に落ちた。

「あれ？」

「あ、あたしがやる」

後ろを見ると先程連れていかれた少女が立っていた。名前は……思い出せない。

彼女は寂しそうな顔で僕の手から箸を受け取り、二つに割った。ありがとうと僕はいつて軽く頭を下げた。

ご飯を箸ですくう。しかし、何故かぼろりと膝の上に落ちた。

彼女は泣きそうな顔で先程と同じことをいった。流石に恥ずかしいと思っただけど有無を言わさぬその迫力に僕は首を縦に振った。

煮物やだし巻き卵を口に運んでもらう。気分は雛鳥の親子。

食事が終わるとすることもなくなり、僕らは呆然と隅っこで人々を眺めた。みなここににいる女性は同世代の子が多い気がする。

みな一様に品のある喋り方と笑いで、どこか瞳の奥はギラついていた。時折、彼女たちは僕をチラリと見ているような気がした。

プレゼントを待ちわびている子供の表情だと思った。

「お、お前はこここここの世に神様っていると思うか」

「君……だれだっけ？」

彼女は顔をクシャクシャに歪めて、もう一度同じ質問をした。ぼんやりとした頭をなんとか動かしてその質問の答えを模索する。

「どうだろうね、いたら素敵だと思うけど」

「あああ、あたしはおおお母様に毎日祈ってれば、正しく生きれば神様それを見てて、幸せを授けてくれると教えられた」

「いいお母さんだね」

「あ、あたしもそのとおりに生きてきた。だだだだっけどそれは、あたしだけを幸せにするものなのか？　なら、あたしはちっとも幸せじゃじゃない」

そういつて彼女は膝を胸に抱えて、俯いた。小さく何度も呟く。神様酷すぎます、彼女たちが何をしたのでしょう、と。

僕は何となくそうすることが正しいように感じて、彼女の頭を撫で続けた。

「みんな、そろそろ始めようか」

瑞樹さんが一番前の席で立ち上がり、声を上げた。

四十五粒

その表情はどこか固く、またどこか晴々としていた。彼女の言葉に皆、黙りそして注目した。

「長かった。実に長かった。……あたしたちには特別時間という概念はない。ただある日、死期が訪れ朽ちていくだけだ。いつてしまえばもういくつの家が没したのか、曖昧ですらある。だがそれを今一度深く思い出してみると、やはり長かったという言葉に行き着く。この瞬間、この一刻をあたしたちは……あたしたちが生まれる前の者たちはずっと望んでいたんだ。あたしたちはそれを忘れてはいけない。そして後世に伝えよう。この日から、再び鬼は闇から這い出したのだと」

そういつて彼女は懷から鬼の面を取り出して顔に被る。金色の瞳、燃え盛る赤い肌。

「始めよう」

それが合図だったかのようになみなそれぞれが隠し持っていた古めかしい面を顔につける。亮平は何が起こるのだろうとぼんやりとした頭で彼女を見た。

彼女たちはぐると亮平を取り囲む。東が亮平を後ろに隠すがすぐに剥がされた。

「さあ、おいで」

そう瑞樹はいつて手を差し出した。彼は恐る恐るその手を掴み、彼女の引っ張る方向へと進む。周りの鬼は道を明け渡し、部屋の中央へと二人をいざなった。

中央にはいつの間にか敷かれている布団。側に置かれた注射器と器具。亮平の足が錘をつけたかのように動かなくなる。

「どうした、お前はこっちを選んだんじゃないかったのか？」

「そう……ですけど」

「なら、お前がしなくちゃいけないことはわかるだろ」

ふわりと背中を押され、彼は布団に横たわった。周りの鬼が手足を掴み、また別の鬼がぎらついた瞳で彼を裸に剥く。股を広げ、睾丸の下の辺りに何かを注射した。

「うあっ……かあっあああ」

亮平のそれはすぐに大きく怒張し、赤々と打ち震える。先端から透明な液体をダラダラと零し鬼たちの感嘆を誘った。

次に首筋に注射。刺された血管は流れ込む液体に小さく震え、皮膚は汗ばんだ。

それが終わると、鬼たちは亮平の手を離し、掴んでいた者達から服を脱ぎ始めた。

残りのものは近くで酒を煽りながらそれを見る。肉を喰らいながら人を喰らうのを見た。人を苦しむ様を肴に酒を飲む。

「まあ、多くて一度に三人ってところか」

そう瑞樹は笑う。鬼は笑う。

彼は自分に何が起こっているのか思考が追いつかず、ただぼう々と自分に起こるできごとに身を任せる。

「おいおい、亮平。男がマグロじゃ、だめだろ？ どうすればいいか、わかるよな？」

「うー……」

亮平は自分の上で艶かしく腰を動かす少女に性を放出する。出して萎えるどころか、それは硬くなる一方だった。

瑞樹は髪の毛をつかんで頬を叩く。亮平は迫り来る絶頂に耐えているのか、発情中の猫のようにうーうーと唸った。

「だめだ、葉が効き過ぎてぶっとなでら。ま、みんな好き勝手犯していいよ」

ある女性はペニバンをつけ亮平を熱い視線で見ながら、まだかまだかと待ちわびる。ある女性は頬を赤らめ、行為を見つめる。またある女性はその行為に泣いて首を振った。

泣いた、東は泣いていた。

酷過ぎると、これがみんなが望んでいたことなのかと。

呉葉が思い止まった理由がよく分かった。

瑞樹はどこからかビデオカメラを持ち出し、亮平の痴態をそれに納める。横には一人の少女が映ったモニタ。

「亮平、ほら笑って。呉葉ちゃんがお前の喘いであるところ見てくれるんだからさ」

画面の向こうの少女は強く何かを叫ぶが音声がミュートになっているのかその声は彼に届かない。亮平はクシヤクシヤの顔でそれを眺め、ゆっくりと口を開く。

「あ……あ、ごはんちゃんと食べてる？」

やせ細った少女は小さく首を振る。切れ目の瞳からは大粒の涙がぼろぼろとこぼれ落ちた。

「ちゃんと食べないと大きくなれない……よ」

口は馬鹿と形作る。

「すぐ終わる……から。すぐ行くから。だから……約束さ、忘れないで。うん、画材。僕は……」

続きは語られず、瑞樹の足蹴りによって遮られた。

「つまんねえ。すげーつまんねえ！そこはお馬鹿にたお前の顔を見て呉葉が泣きわめくところだろ。何、感動のシーンに変えてるんだよ。おい、もっと薬打ち込め」

「これ以上は……」

「構わねえよ。最悪、壊れちまってもこいつの体が生きていればいいんだからさ。種作るボディがあればいいわけだ。わかる、呉葉ちゃん？」

彼女はカメラにそう語り、微笑む。モニターの電源は既に切った。亮平は新たに打たれた薬に完全に自我を失った。瞳孔は開ききり、ふうふうと息を切らしている。それに覆いかぶさる里の人間。

東美代子は外に駆け出した。

東美代子は思う。

みな助けることも、罪悪を感じるわけでもなくただひたすらにそ

の肉を食うだけ。

可哀想だとか酷いことをしてるだとかいう気持ちはそこにはない。外で見張りをしていた少女の「どうでした？」という意味ありげな表情がそれを物語っていた。

彼女は夜道を駆ける。夏ということもあってか、全身は直ぐに汗で濡れた。彼女は家の前で立ち止まり、思った。

何もできない自分も彼女たちとは大して変わらないのだ、と。

亮平を陵辱する人間たちと何も代わりはしないのだ、と。

「なな、なにかしなくちゃ」

では何を？

そして思い立つ。

この里では銃の持つことを許可されている家が二つある。一つは桐生の家、もう一つは自分の家だ。

更に自分の家は里の中でも唯一、武器の保管を許された高貴な家だった。これは桐生の家ですら、許されていない。

そうだ、みんなを銃で脅して二人を開放させよう。

必要なら撃たなくちゃいけないかもしれない。

だけど、彼女たちはそうなくても仕方ないことをしている。

二人を逃がしたら、最後に自分の頭を吹き飛ばして死のう。

それが自分のけじめのつけ方、先祖に対する謝罪。

二人のために今宵はあたしも鬼になろう。

血をすすり、肉を喰らう鬼に。

彼女は自宅の扉の鍵を開けて、中には入ろうと手をかける。

ドンッと何かが自分にぶつかったかと思うと、ずきりとした痛みを背中に覚えた。何か口走る前に口元は手で覆われる。

「……鬼退治、鬼退治なんだ。これは」

月明かりに相手の姿が浮かぶ。スーツ姿の背の高い女性がそこにいた。瞳は到底尋常とは思えない輝きをしていて、口元には笑が張り付いている。

月は隠れ、直ぐにその姿は闇に消えた。ただ声がする。

「み、みんな殺さないと、りょーへー君に酷いことする奴はみんな」
「ああ……あっ」

離れようとするが彼女の刃物は深々と刺さるばかりで、意味を成さない。抵抗を試みるが力が入らない。無理に動こうとすると冷たい刃が力を削ぐように何度も何度も前後する。

抑えられた口からはコポコポという音を伴いながら血と混じった唾液が泡になってこぼれ落ちた。

手は希望を失ったかのように虚空を掴む。

そのまま締りの悪い蛇口のように血液は地面を濡らし、彼女は生き絶えた。

「ざまーみろ」

東の死体を家の中に引き入れて彼女はもう一度ざまあみろと言った。

四十六粒

死体を玄関に寝かせて、血を水道で流す。

血というものは案外、どろどろとしていてベタつくものだと言わ
は思った。

スーツについた血はどうせ目立たないのでそのままにしておく。
手を拭い、何か使えそうなものはないかと家の中を物色する。

明かりをつけていいものか一瞬悩むが、殺した相手がここに帰っ
てきたということになっているのだと思い、明かりをつけた。幸い
まだこの家には罨は仕掛けていない。

手がブルブルと震えていることに気がつき、頭を強く振った。

あたしは悪くないあたしは悪くないあたしは悪くない。

罨を仕掛けているところに来た彼女が悪いんだ。

「お、鬼退治。鬼退治」

強く自分に言い聞かせる。タンスの上に殺した少女と髪の毛の長い女
性が酔っ払っている写真があった。奇妙な焦燥に駆られて写真を伏
せる。

家中を探るが着物なんかの衣類が見つかるばかりで特に何も見つ
からなかった。

家の裏にある蔵には釣具やアウトドア用品が押し込まれていた。

その中のサバイバルナイフを貰い、彼女の家に爆弾を仕掛けた。明
かりをつけた瞬間、電流が雷管を伝い、爆弾がその家を吹き飛ばす。

あたしは悪くないあたしは悪くないあたしは悪くない。

運が悪かったそいつが悪い。

これを計画した、これを命令したあの少女が悪い。

亮平君をさらったこいつらが悪い。

あたしは悪くないあたしは悪くないあたしは悪くない。

彼女はそう呪文を唱えて、草むらを歩き次の家に向かった。

一人の少女は執拗に彼の後ろを犯した。男性器を摸したバンドを腰につけて何度も腰を前後させる。亮平は腰だけ起こして獣のような唸り声を上げる。

周りの女性は酒を飲みながら休憩がてらその光景を眺めた。

亮平は体中に青痣を作り、腕の血管部分には大量の注射痕ができている。

「ほら、亮平。氣失っちゃだめだろ？　呉葉に絵描いてやるために頑張らないと。ほら」

そういつて瑞樹は彼の頭にコップの水をかけた。

「う……」

「おお、本当に目が覚めるなんてな。絵に対する執念？　それとも呉葉のためか？　まあどっちにしろ、お前の手の腱切ってあるから絵なんて二度と描けないだろうけど」

憔悴しきった呉葉が今どんな顔をしているかと思うとおかしくてしやうがなかった。

亮平はこの先、二度と筆を持つことはできない。そういう処置を彼女は施した。

本当は両手両足をもいで、その姿を彼女は呉葉に見せてやりたかったのだが、それは周りに止められた。

瑞樹は本当に呉葉を尊敬していた。素晴らしい姫巫女だと思っていた。常に冷静で至極合理的。家同士の問題もあって表立ってはいえなかったが里のことを誰よりも考えるその行動理念に若干のあこがれすら抱いてた。しかし、それも亮平という男と出会ってから滅茶苦茶になった。毎日恋焦がれる少女のように溜息をつくようになり、彼の管理を全て自分でやると言い出し、復活式を取りやめるという所までいきかけた。

瑞樹はそこではつきりと失望した。恋などという幻想に浸り、里全体を危険に晒している行為に怒りを覚えた。

捕獲したら腹を捌いて、精子を保管するといっていたあの冷酷な彼女はどこにいったのかと。

里には優秀な指導者が必要だと彼女は思う。自分のような非力なものではなく、圧倒的なカリスマ性と知性を兼ね揃えた長が必要だと。

それを取り戻すため、そして呉葉をおかしくさせた男に罰を与えるため彼女は笑いながら亮平を壊す。

大切なものを全て取り上げ、自殺するまで陵辱し続ける。痛みと快楽を与えて、自我を崩壊させる。

男が壊れたとき、呉葉がどういう道を進むのか。それだけが気になった。

不意に空が白く光った。間髪入れず、届く轟音。里のものはみな、窓に近づいて様子を伺う。

ひとつの家が木っ端微塵に吹っ飛んでいた。炎がゆらゆらと踊っているのが見える。

瑞樹はそれを見て、全体に指示を送る。

「とりあえず一時中断。甚六の奴がついにおっぱじめやがった。お前らは直ぐに東の家について武器調達してこい。あいつの家は見通しがいいからって油断するなよ。武器をこっちが取りに行くのは甚六だって想定しているはずだ。それに東のことだ、妙な正義感出して甚六に加担してる可能性も否めない。十分気をつける。他の者はそれぞれ地下牢の呉葉のところに行く者と火消しに回る者に別れる。外の若い連中はここに入れて、指示を待つように伝えてくれ」

彼女の言葉にみな頷き、早々に準備にかかる。瑞樹は呉葉の元に、つまり自分の家の地下牢に向かった。数人を家の中に入れる。

途中で無線が入り、応対する。

「あの瑞樹さん、東さんが……東さんが」

「どうしたはつきり言え」

「東さんが……死んでます。背中が、その……酷いことに」

「……………そうか。それで武器を奪われた形跡は？ 蔵の地下室は？」

「いえ、あのどうやらそれは大丈——」

瞬間、雑音が無線に乗り東の家の方角が白く光った。直ぐに近くの者に様子を見に行かせる。

武器を渡すことを拒否して東は殺されたのか。

漠然とした奇妙な違和感を感じた。東に理由を話せば、武器を得ることは容易だったろうし、そうでなくても殺す必要性もないはずだ。

そして何故背中を刺したのか、という疑問が湧いて出た。甚六という男は何事も合理的にやる人間だったと彼女は記憶していた。

なのに、その殺し方は酷くお粗末だ。

「一応、来客の方にも人を回そう」

四十七粒

そろそろ電気系統を利用した罠だとバレル頃だ。

「それで、それで……ええっと」

目の前の少女はいろいろな情報を教えてくれた。瑞樹という名の女の家の地下に監禁されている女性の話から亮平君がどういう経緯でここに来たかということも。

何のことはない、亮平君は逆恨みされたのだ。自分たちが不幸で外に出た仲間が幸福なのが許せなかっただけなのだ。

少女は取り繕うように次の話題を考えているが、もう話すことも尽きたのか涙目で震えていた。

「誰かがこの扉を開けた瞬間、この忌々しい地下は吹き飛ぶようにしといたから安心して死んでいーよ。無線電話が来てもアウトだから、頑張ってねー」

手足に亮平君の使っていた手錠をかけた少女は、目隠しをすると恐怖のあまりに失禁し始めた。黄ばんだ液体がコンクリートの地面を濡らす。

あたしは巻き込まれないように早々にそこを出た。地下の外は美しい森になっていて、少し歩くと小高い場所から里を一瞥できた。

「もう、後には引けない」

大広間に集まっている人間が十人。数が多すぎる。

「また、退治しないと……」

森を回り込み、学校に向かう。ひと気のないそれに火を点けた。古いせいか、よく乾いていて簡単に火が広がった。これで人は大分こっちに削がれるだろう。

集会所と呼ばれるホールに向かう。

一人の少女が玄関付近で見張りをしていた。それ以外の人はどこにも見えない。

いけるか？　いけるだろう、いかないとだめ。やらないと、殺さないとだめ。

汗ばんだ手を握り締め、あたしは普通のペースでその少女に挨拶をして近づいた。

「あの、こちらに来るように瑞樹さんに言われて来ました」

「あ、えっとあなたは外の人でしたっけ。ああ、どうぞ中へお入り下さい」

よかった、どうやら大丈夫そうだ。

別の人間が真犯人と思われているというのはどうやら本当らしい。あたしはそのまま彼女の後ろを通り、中に入るふりをして彼女を後ろから襲う。手で口元を覆い、首に何度もナイフを突き立てる。

「死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ねっ！」

「—————っ！！」

少女は体をビクビクと体を震わすと、直ぐに動かなくなった。建物の裏の林に死体を隠す。

バクバクと心臓が高鳴り、罪悪感が全身を襲う。まるで自分自身が醜悪な魔物になってしまったかのような錯覚。汗でびっしりと濡れた手が自分の垂涎にすら見えた。殺すことに喜びを見出しているように見えた。

「亮平君のため」

そう、亮平君のため。

亮平君のため亮平君のため亮平君のため亮平君のため亮平君のため亮平君のため亮平君のため亮平君のため亮平君のため

そう自分に言い聞かせ、あたしは室内に土足のまま入った。

中では亮平君が数人の女に悪戯されていた。非常時だということにこいつらは盛ることしか脳がないのか。

彼女の一人があたしに近寄ると怪我をしたのかと聞いてきた。そこで自分の顔や白いシャツに血がついていることに気がついた。

「ああ、これは表の女の子を殺した時の血」

「え？」

拳銃を出し、ぼうっとしているその頭に向けて引き金を引いた。バンと安っぽい音がしてその少女の右目に穴が空き、脳みそが後頭部から飛び散った。

まだ状況を認識し切れていない他の三人にも同じように引き金を引いた。冷静に両手で構え、撃つ。

一人二発。それだけで彼女たちは動きを止める。

何発かミスはしたが幸い亮平君には当たっていない。亮平君に近寄ると顔をのぞき込んだ。

彼は小さく震えていて、ふうふうと息を切らしている。瞳はどことも焦点があっていなくて、酷く酷く酷く美しかった。

「かわいい」

むしろぶりつきたい衝動に駆られるが、舌を嚙んでそれを耐えた。彼の柔らかい頬を叩いて意識を覚醒させる。

「大丈夫？」

「あ、呉葉さん……助けないと、約束。じゃないと、僕は」

彼はよく分からないことを口走った。あたしは彼を窓際に連れて行って、そこから見える一つの家を指さした。

久しぶりに彼のために笑う。

「呉葉ってあの家の地下室に入れられてる人でしょ？　なんで亮平君をさらった人をそんなに心配してるわけ？」

「やくそく、やくそくがあるんだ」

「それそんなに大切？」

「とっても大切だよ、だから……」

「じゃあ、あたしがそれ助けてあげたら……あたしと結婚してくれる？」

力ない肢体を覗き込む。瞳の奥は正誤の判断などできるような輝きではなく、当然断ることもできないだろうという顔だった。

だからこそ、そこに付け入る隙があるとあたしは思った。恥ずかしながらも、そうでもないとその言葉を彼に直接いうなどあたしには到底できなかった。

彼は少しぼうつとしながら、うんと首肯した。

それが彼の本当の意志から来るものじゃないことはわかっている。だけど、それでもあたしは嬉しくて泣きそうだった。

だから、あたしは嫉妬に狂う。

そうまでして、守りたいものがあそこにあるのか、と。そんなに大切なものがそこにあるのか、と。

そんなものが消えてしまえ。全部全部消えてしまえ。全て塵に、ゴミに、灰に変わってしまえ。

あたしはポケットから起爆装置を取り出すと、全てのスイッチをオンにした。

四十八粒

両手に昔の携帯電話のようなものを握った背の高い女性。横にはどこか痩せこけた雰囲気少年。

窓の外は大きく光と轟音を伴いながら、少し幻想的な様を見せていた。

地上から空に落ちる流れ星のような、それ。朝日が地上から昇るような、それ。

「壊れる壊れる、全て終わってしまえ！」

少女の狂気の歌声に亮平はどこかぼんやりとした気持ちだった。現実感の消失。

いままで何が違うんだ？

また、僕のせいで誰かが死んだだけじゃないか。

夢か現実かも定かじゃない。

いや、そうじゃなくて。

「夢だったらいいのに」

分かっている、それが現実逃避だって。

でも、辛いことから逃げて何が悪い？

「亮平君、一緒にあそこへ行こうよっ。どうせ、みんな混乱であたしたちのことなんて気づかないよ」

「うん」

彼は自分は人形なのだと思った。持ち主のオナニーのためにいる存在なのだと。

選択権はなくて、意志は求められていなくて、答えは既に決まっている。

裸足で外に連れ出される。辺りは騒然としていた。

家の破片が水田に刺さり、家具が道端に転がっていた。爆心地である家は大きな松明のようにパチパチと音を立てて燃えていた。

横を慌てふためく里の人間が通り過ぎて行く。

瑞樹の家。瓦を敷いた平屋のそれは半壊していた。

「ごめんなさい……ごめんなさい」

「なんで亮平君が謝るのー？　ねえ、なんでー？　おかしい、あはは、おかしー」

吐きそうになる。

頭の中をスプーンでぐちゃぐちゃに混ぜられたかのような気持ちの悪さ。

ごめんなさい。

辺りに飛びった肉片、それらしき破片に彼は頭を垂れる。

生まれてきてごめんなさい。

僕と関わって、ごめんなさい。

たまたま、瑞樹の家はトラップタイプの爆弾ではなかった。いくつかのそれと同じようにそこには注意を向けるための遠隔操作型の爆弾が仕掛けられていた。

桐生呉葉と瑞樹と彼女の取り巻きがいた。三人は啞然とした面持ちで一台モニターを眺めていた。

ある場所の中継。

黒いスーツ姿の女性。

「そうか、甚六じゃなくて……コイツが」

「様ないわね、瑞樹」

ニヒルに笑う彼女に瑞樹は構わない。構っている暇がない。

「ということは、つまりどこかに爆弾があるはずだ！　鍵は掛かっていたか!？」

「は、はい」

「じゃ、どこに置けば効率的にここは壊せる？　床下だ」

彼女はそういうと地下から一気に駆け上がり、畳を外し、床を外しそれを見つける。パイプを切ったような形のそれは赤いLEDを発光させながら静かにそこに佇んでいた。

瑞樹はそれを取り、そこで固まった。

これをどうする？

避難できる時間は恐らくない。

誰かがこれを外に捨てないといけない。

「瑞樹さん、私が」

「お前は分かったことをみんなに伝えろ。あたしがいなくなっても最低、呉葉さえ生きてればこの里はなんとかなる」

「ですけど！」

「後は頼む！」

襖を開けて外に出た。駆けて、遠くにそれを投げ捨て様とした瞬間、彼女は吹き飛んだ。

真後ろの母屋の一回部分はそれに巻き込まれる形で吹き飛んだ。

腕は裂かれ、体は破れ、首は落ちた。

肉は繊維を引きずり、内蔵は血生臭さを放ち、小さな紙切れのようになつて彼女は死んだ。

彼女は死んだ。

地面を掘り起こす。過去を掘り返すように。

家の破片をどける。自分の心を空にするように。

自分の寝ていた場所が一体どこだったのか分からなくなるほどの破壊に胸が詰まる。家の片側半分にダンプカーが突っ込んだかのような壊滅。

家の骨組みだけが唯一、元の形のままそこに停滞していて、それ以外はドミノ倒しの跡のようにそこらかしこに倒れていた。

「おかしいなー、もっと跡形も残らないようにやったつもりなんだけどねー」

そういつて彼女は笑った。僕を、僕の気持ちを笑った。

僕は必死にそれを探す。さやかさんはそれを興味深そうに見ていた。

小さな希望にすぎる僕をおかしそうに。

みんな死んでいるんだとでもいいたそうな顔で。

僕はその表情を認めることが僕の中の決定的な何を決めてしまうような気がして、手を黒くススだらけにしながら探し回る。

死んだという結果だとしても僕は彼女を一生懸命さがしたのだと自分に言い聞かせるかのように。

だから、その地下の階段を見つけた時は酷く嬉しかった。

それは重い蓋がされていて、少し内側に凹んでいながらも十分に生きた感触のするものだった。

「よかったねー、無事みたいで」

蓋に触れる僕の手を真上から踏みつける。

「あ……ああああの」

足をどけて下さい。

それが喉から出ない。それをいうことで恐ろしいことが起こるような恐怖。

薬の残った体は彼女を前にしてガタガタと震え始め、息がつまりそうになった。

「どんなことがあってもあたしを愛するっていつてくれる？ あたしとこのまま先まで生きていくっていつてくれる？ そうしたらこの足どけてあげる」

「う……あ、う」

「言える……でしょ？ 大切なんだよねー、その子を救いたいんだよねー？ じゃあ、それくらい別にいいよね？」

「ううあが」

「あたしの目を見て」

薄暗い、仄暗い、どろどろしたマグマのような瞳。

闇夜に光る瞳。黒い光を放ち続ける笑み。

「愛しています、ほら」

「あいし……てます」

「あなたにどこまでもついていきます、はい」

「ついて……いき、ます」

「あはははは、すっごく腹が立つなーうん。うん、いいよほら」

四十九粒

土埃の漂う室内はまだ明かりが生きていて、蒸せる人の咳声が聞こえた。

人の声。

僕はゆっくりと階段を下り、一番隅の座敷牢に彼女を見つけた。気だるそうどこか痩せた雰囲気彼女はそこにいた。

僕も彼女も互いが互いに瞳を丸くする。互いが互いに口ごもる。鍵を探し、檻の鍵を開け、彼女の手錠も外す。手首が青く痣になっていた。

「亮平さん、無事で何よりです」

「あ、の……」

「亮平君、もういくよ。お別れの言葉を早くいいってよ」

その言葉に呉葉さんは眉をひそめ、そして悟ったようにうなづいた。

「別れの言葉、ね」

「そう、お別れの言葉」

少し沈黙が場を覆う。そして呉葉さんは僕を抱きしめた。

汗ばんだ匂いと、布団の中でお風呂場で縁側で東さんの家を感じたその香りがふわりと鼻をくすぐった。

白百合にも似たその香り。僕は牢獄の壁を眺めながら彼女を抱きしめた。

彼女は大粒の涙を流し、唇と唇を合わせるだけの簡素なキスをする。

「……後悔しているわ、あなたをここに連れてきたこと」

「……後悔はしていないよ、君と出会えたこと。でもいつかきっと」
彼女は僕が言葉を重ねる前に、もう一度キスをして、僕を突き飛ばした。

瞬間バンという音。

愛の言葉。

「……うわあああああああああああああああああああああ
あああああああああ！」

「み、みんな死んじゃえ！ あたしとりよーへくん以外はみんな全部」

ふうふうと獣のように息を切らして彼女は齒を軋ませる。口は怒りにねじ曲がり、目尻は笑いに歪曲される。

「ううあああああつ……あああああ！ いやだいやだよ！ そんな……うううううっ」

しにましたしにましたしにました。
ひとがじゅうでうたれてしにました。

海に向けて、歩く。森と森の間にあるわだちを引き摺られるように歩く。

暫く歩いていると塩の香りがして、木々は少なくなり、剥き出しの岩が多くなった。

夜の海は暗くて、ライトなしじゃ酷く危なかった。僕を引きずるようにして彼女は船を探し乗り込んだ。

彼女は呟く。

「あいづらは悪い奴なんだよ。あたしから亮平君を誘拐して、洗脳してき、犯したんだからさー」

呉葉さんは僕が酷いことに遭わないように一生懸命、頑張ってくれていた。

「きつとあそこで暮らしていたらずっと奴らにゴミみたいな目で見られてた、ひどい目に遭ってたよ。死んで当然なんだよー。抜け出してよかったんだよー」

東さんのような優しい人もいた。

さやかさんは船の鍵を銃で撃ちぬいて何か弄る。直ぐにエンジンが動き、船も動いた。

「きっとあたしといった方が幸せだって。あいづらよりもあたしは優

しいよー。子供だっていっぱい産んであげるし、欲しいものは何でも買ってあげる。どう、嬉しいでしょ？」

「……………はい」

船は水しぶきを上げて、夜の水上を走る。潮を巻き上げ、霧を抜ける。

直ぐに外は白んだ朝に変わった。不意にどこかで携帯電話が鳴る。船の部屋にあった僕の携帯だと分かった。

「もしもし？ 亮平君か？」

「はい」

「おお！ 無事だったのか、それは何よりだ！ 直ちに港に車を用意させるよ！」

「はい」

「……………どうしたんだい？ 何か覇気が無いが」

「何かあったら、また連絡下さい」

電話の向こう側の誰かが声を上げたのを無視して僕は通話を切った。

幻想は僕に坂之上の夢を見せる。

ふふふふふ、いいぞ。僕はどんどん狂っていつている。

このまま全てが分からなくなるまで狂ってしまえ。

「何だって？」

「港に車を手配するそうです」

「ふうん」

静寂。朝日が眩しい。

静寂。心が苦しい。

狂え狂ってしまえ、僕なんて。

「あのさ、このまま……………どっか二人で消えちゃおうか？ だってあの子、信用できないしあたしから亮平君取り上げそうだし、あたしも、もう元の生活に戻りたいなんてこれっぽっちも思っていないし、丁度いいかなってさー」

「そうですか」

「あたしの稼いだお金で、どっかで暮らそう。うん、それがいいよ。そうしよう」

「はい」

現実感の喪失。心の喪失。感情の欠落。

「楽しみだなー。エッチなこと毎日してさ、何もせずずっと暮らして生きていくんだー。食べて寝てそれ以外は全部ずっと肌を合わせてくの。どう？」

「ええ」

「聞ってるー？」

「聞いてますよ」

陸地が見える。碇を落として、僕らは陸地に上がった。

コンクリートの地面が僕にはどこか不安定に見えた。空気が汚れているような気がする。

「車、まだ来てないねー。逃げるチャンスだよ」

そこで携帯が鳴った。僕はポケットから出してそれにでる。

「はい」

「一発は一発だからな」

野太い男の声で、年季のさせる声色。それだけを伝えたと通話は切れた。

不意に頬の横を何かが空気を切る。後ろを振り返るとさやかさんが胸を抑えていた。

「あ、あれ？」

そして遅れて聞こえる低く伸びた音。バウンと空気を震わせる低い咆哮。

またビュンと空気を切る音がして彼女の手が吹き飛ぶ。今度は背中に穴が開いて、歯を砕き、最後に彼女の脳天を吹き飛ばした。

赤い花が風に流れた。薄灰色の脳みそが砕け散ったゼリーのよう

に地面に撒かれ、穴の開いた脇腹から向こう側の景色が見えた。人の死は嫌でも現実感を見せる。喪失した心と感情を掘り起こす。だけど既にそれは意味がなくて、僕を苦しめるだけで。

僕は喉が酸っぱくなって地面に胃の中の物をぶちまけた。これでもかというほど苦酸っぱい液体を吐き出させる。

血の匂いと死の形は僕を苦しめ、泣かせた。

痛い。心が頭が目が心臓が口が喉が痛くて痛くて冷たくて熱い。

死は痛い。

「ぐううううううううっ、もう……うえ……もういやだ！　こんなやつてこんなやつて！　あああああああああああ！」

神様。

僕が何かしたんでしょうか。何故、僕じゃなくて、僕以外の誰かなのでしょうか。

神様神様。

もしも、あなたが本当にいるのなら、僕はあなたを恨み続けます。憎み続けます。

神様神様神様。

五十粒

白い壁。白い廊下。消毒液の匂い。

私は黒いスーツを着た長身の男の横を通り過ぎる。扉の前で止まり、ネームプレートを確認する。

三回扉を叩く。反応はないと分かっているし、それがあゝ種の暗黙の了解のような気がした。

引き戸の扉を引くと、白い可視光線に照らされた少年が窓の外に目を向けていた。

暗闇、つまりダークマターというものは存在が確認されていない。それが何なのかすら分かっていない。本当にそんなものがあるのかすら不明だ。

だがしかし、人の闇という存在の確かさを私はそこで感じた。

「起きていたんだね」

「蝉の声が聞こえないんだ」

「夏の終わりがかもしれないね。季節の移り変わりは悲しくも美しくもあると私は思う」

「蝉の声が……聞こえない」

私は退屈を紛らわせればと思い、本を持ってきた。それは絵本だったり、小説だったり学術書であつたり千差万別だ。

彼の好みが分からなかったというものもある。

私はセンダックの『かいじゅうたちのいるところ』開く、彼は『はらぺこあおむし』を手に取りうとして落とした。

自分の手を目の前でかざし、彼は自嘲的に笑った。

「僕ね、もう絵が描けないんだ。握力がない。二度とピアノの鍵盤を叩くことも、筆を持ってこの西日を描くこともできないんだ」

「……泣く時というのはそういう表情をするものじゃない。顔を歪めて声を上げるものだ。それじゃチグハグだよ、亮平君」

笑いながら泣くというのは嬉しい時にするものだ、と私は思う。

彼はそうかもしれないといってまた景色を眺めた。心をなくした人の残骸。

私を私と認識してくれない彼。私は既に彼の中では死んだ人間だった。

多くは語らない彼からはあまり情報は得られなかった。

当初彼は港の側で声を上げて狂っていて、側には藤岡さやか射殺体があった。状況から遠くから狙撃されたものだと分かった。

彼らが乗ってきた船というものはどこにもなく、藤岡を射殺した犯人がそれを持っていたことが分かる。精神的なものも含め傷が多かった彼を病院に入院させたのがこの前のこと。

握力はもう二度と回復しないだろうというのが医師の判断。精神的なものは時間に委ねるしかないそう。

里というものがどういうもので、こういうことが起こったのかは私は知らないし知ったところで意味のないことだ。彼が無事ならそれで……。

「蝉の声が聞こえない。もう二度と」

「……………きつと来年にはまた聞こえるさ」

「じゃあ、また明日」

「……………」

これもまた暗黙の了解。私は静かに部屋を去る。

扉の横には金色の髪の少女がいた。

「どうだったんだよ」

「まあ、これといって。そっちは？」

「情報が少なすぎるよ。何も分からない。何が起こったかすら分からないから、当然といえば当然なんだ。一応、報復とか気を付けた方がいいよ」

「それを伝えに来てくれたのか？」

「ちよっと、別のようもあったんだよ」

「そうか」

例の彼氏だろう。

彼女は私をじっと見つめていたので私は歩を進めようとしてそこで止まる。そして彼女に振り向いた。

「何で子どもたちが生きているって教えてあげないんだよ。そうすれば、いくら彼があんたのこと忘れてるっていつても思い出さざるを得ないし、現実を認識するはずだよ」

「まだ早い。彼に責任や原因を思い出させるべきじゃない。………
…それに救えなかった命もある」

私は半ば意識的に彼女から視線を外す。彼女はその言葉の意味を分かっていてか、あえて言葉を発しなかった。

定期的に許された散歩の日。彼を車椅子に移動させる。

「鬼が来る」

「どうしたんだい？」

彼は何か口走り、それ以降何も言わなかった。

病院の近くにはちよつとした自然公園のようなものがあり、多くの病院関係者や町の住人が利用していた。

私は何回目になるか分からない、植物の説明を彼にする。彼はそれをぼうつと聞く。

きつと歩こうとすれば歩けるのだろう。でも彼はそれを必要としていない。

心がそれを求めている。

リュックサックからペットボトルを出して彼に水分補給させる。

少し汗ばんだ額をハンカチで拭うと、少し木陰で休んだ。

まだ日差しは高く、半袖でも熱い。きつと町中はコンクリートに漂う陽炎がゆらゆらと蠢いているのだろうと思う。

植物特有の青い香りが胸に広がり、私は少し落ち着くことができた。

「すみません」

不意に学生風の女性二人が私達に声をかけた。片方はパステル調

の女性らしい服装で、片方は顔に変わったお面をして亮平君の顔を覗き込んでいた。

「……………というところまで行くにはどうすればいいんでしょうか？」

「それならここから真っ直ぐいった辺りです」

「んー……、ちょっと分からないんで紙に書いてもらってもいいですか？」

「構いませんよ」

丁寧な口調の女性は洒落た手提げの中を探り、紙を探す。お面をした女性は相変わらず、亮平君の顔を無言で覗いていた。

面を顔に固定している紐の質、白のくすみ具合からなかなか古いお面だということが分かる。だがしかし、何故こんなところで？

私はちらりと亮平君を窺う。彼の手は小刻みに震えていた。

「亮平君？」

瞬間、シュウっという音がして私の顔にスプレーが吹き付けられた。呼吸ができなくなる。

目が痛み、鼻水が出る。声を上げようとする前に猿ぐつわを噛まされた。手錠が手と足につけられる。

手馴れた作業。目的は？

「荷物も運ぶ？」

「公になっても困るし、そうしましうか」

涙で歪む視界では亮平君に女性が近づいていた。顔が全体が熱く痛い。なんとか講義の声を上げようとするが、片方の人間が押し付けるナイフに否が応でも黙ざるを得なかった。

今ここでは非常に不味い。近くは植物が邪魔をしていて、人がいない。それに何より近すぎる。

「亮平さん、お久しぶり……なんででしょうかね？ 私達は相変わらず時間の感覚が曖昧なんで、今があれからどれくらい経ったのかいまいち分からないんですよ。覚えてますか？ 私のこと。ま、それはいいですね。あの方ね、生きてらっしゃるんですよ。ああ、そん

なに震えなくても大丈夫ですよ。あなたを殺しに来たわけじゃないので」

「でも昔は里を抜け出した奴は何があらうと殺すっていう掟もあったって聞くよね。姫野事件以降のことだっけ？」

お面の女がそこで初めて喋った。

いや、それよりも“里”だと？

「ま、で私達は何しにこんな空気の淀んだ下界まで足を運んだか、というんですね。あの方の命なんですよ。里の者に逆らったものに罰を与えよってことですね。ま、本当は里の多数決で決まったことなんですけど。ええ、そうですそうです。あなたの目線の彼女、つまりそこで寝ている彼女を殺しに来たんです」

「藤岡さやかは甚六にブツ殺されてたから、最近まで誰がアイツに協力してたか分かってなかったんだよ。ありゃ、一人で考えてできることじゃないからね。明らかにアイツは鉄砲玉で小細工の準備は別の人間の考えだ、普通に考えてね」

鬼の面の女ともう一人が交互に喋る。

目的は私の処刑か。

どうする。

だがしかし。

「あれで、結構な数の者が死んだんですよ。ま、里全体から見た数なんであなたには多いとは思えないかもしれませんが。ああ、ちなみにおかげさまで里の者は私を含め“順調”ですよ。あなたとできなかつたもの、そして死んでしまった者には悪いですけどね」

「あああああ……あっあああ——っ！」

彼は即座に口を塞がれる。

「ここでは何ですから移動しましょうか。あなたにも懐かしい……という場所かな？ ま、とにかく行きましょう」

丁寧な口調の女は車椅子を引き、私はお面をつけた女に担がれた。

五十一粒

正規の舗装した道を外れ、彼女たちは草むらを掻き分け無理やり公園を抜けた。公園の駐車場にはエンジンの温められた黒いセダン車があった。

車椅子は折りたたまれ、亮平君と私は車の中に放り込まれた。運転席にお面を外した女性が座り、後部座席に私と亮平君、それにパステル調の女性が座った。

車はどこかに向けて動き出す。

「亮平さん、桃食べます？ あの時二人でやってたんですけど、今はなんか私一人で任されちゃってて毎日てんてこ舞いなんですよ」「どうでもいいけど、煙草吸っていい？」

「ダメです」

運転席の女性は大きく息を吐いた。パステル調の女性は瑞々しい桃を齧った。果汁をすすする音。

「他に協力者はいらっしゃるんですか？」

彼女の問い掛け。それが私に向けられた言葉だとそこで理解した。「少なくとも見積もってもあと、二人はいるだろうというのが我々の見解なんです。計画を練るの一人、物資調達に一人、あなたは工作員ですよ？ いろいろ調べさせていただきました。工学関係や爆発物にお詳しいんですよね？ なんでも危険物取り扱いの免許を小学生の時に取得したとか」

「……………」

問いに私はただ目を瞑って黙る。下手な動きを見せるべきではない。

彼女は桃を齧りながら、じっと私を見続けた。陽だまりの下のような雰囲気できて、その実カミソリのような笑み。

一番危険なのはこの女だ。場数を踏んでいる空気もある。

「ま、いいでしょう。直ぐに聞けると思います。亮平さんは……知

るわけないですよ。あの時、あそこにいたんですし、何よりあなたの行動は常に私達も知っていることですし。ああ、そんなに震えなくていいですよ。ちよつと痛い目にあるかもしれませんが、あなたの命までは取りません」

そういつて彼女は朗らかに笑う。手のひらが艶かしくパジャマ姿の彼の太ももを撫でた。

「あの夜のことは忘れられません。それは勿論いろいろ変わってしまったという意味でもそうなんです、亮平さんと肌を合わせたということが私の中に強烈な何かを残してるんですよ」

彼はぶるぶると震えて、ただ真っ直ぐフロントガラスを見つめている。私は静かに彼の手を握った。

「私ね、あれから外でお仕事があつてですね。ほら、私達のことを調べてる人がいるっていうじゃないですか。だから私達を知る人を……ま、あつたわけですよ。それで時間が余つたから、そこら辺の子供をさらつていろいろ仕込んで、みんなで輪姦したんですよ。小学三年生って何歳なんですかね？　ま、それで最初のうちはわーわー煩く泣いていたんですけど、そのうち“放し飼ひ”でも何とかいけるようになったんです。でも、すぐに死んじゃつたんですよ。窒息死だから畳とかすごく汚れちゃつて、もう掃除が……ま、亮平さん見たく上手くないかいて話なんです。どうすれば亮平さんみたくなるんでしょう？　他の子も薬を打ち過ぎるとダメになっちゃうし……難しいですよ」

馬鹿げてる。なんだそれは、なんだなんだそれは。

その胸糞悪い話には吐き気を覚えた。その朗らかな言い方がその狂った出来事と相まって怒りを湧かせる。

こんな奴らがいたところが彼にいい影響を与えていたはずがない。彼がどういう目に遭つていた知らない。だが確実に望まれるべき状況ではなかったことははっきりと理解できた。

バックミラーに映る運転席の女性は眉間にしわを寄せて、煙草の煙をくゆらせていた。とても不愉快そうだ。

私はそこでなんとあなしに彼女はこのパステル調の女の監視役ではないのかというものを感じた。好き勝手に何かするこの女を止める役割がお面の女性の役割なのではないだろうか。

「もう、その話はいいだろ。そろそろ着くよ」

「あら、本当ですね」

窓の外は既に港町で海鳥が声を上げながらフラフラと宙を漂っているのが見える。立ち並ぶ錆びた倉庫に車は静かに横付けされた。

私は汗ばんだ彼の手のひらを剥がし、唾を飲み込んだ。

倉庫らしい場所は大きなライトが剥き出しの鉄筋に規則的にぶら下げられているのが見えた。嵌め込まれた窓は黒いスモークがかけられている。室内を照らす真っ白な光に閉塞的な空気を私は感じた。息苦しい。

部屋の中央には薄茶色、木製の大きな十字架が置かれている。側には簡易的なテーブルが置かれていて、その上には奇妙な道具があった。

それを見た瞬間、私は自分がここで死ぬのだと悟った。私が何か話さなくても話しても結局は殺されるのだろう。

圧倒的な死を目の前にして、何故か意識ははっきりとした。悟りにも似た覚醒。

私のすることは一つ。

盛大に笑うのみ。

お面の女はハンディカメラのビデオカメラを三脚に乗せ、コードをノートブックに繋げて何かを操作していた。

パステル女はゴム手袋や、注射器をテーブルに置く。炭に火を点けて鉄の棒をその囲炉裏の中に突っ込んだ。

猿ぐつわを外され、その場に座らされる。

「もう、スプレーの痛みは引けているんじゃないんですか？ いいですよ、喋っても」

「……………ふむ。なにかね、ここは魔女を処刑する場所なのか？

それともナザレ出身の聖職者を殺す場所か？ 茨の王冠はどこだね？ 君は私の為に首を括って腸を地面にぶちまけてくれるのかい？

先にそうしてくれると私としてはありがたいね」

「うふふふふ、活きがいいんですね。ここで何人か処刑してきたんですけど、ここまで元気なのはあなたが初めてです」

「好きな男の前だ。ビクビク泣き喚いていたら女が廃る」

「あら素敵。それがどこまで持つか、楽しみです。最初は目玉を刳り抜いて、舌を引きちぎろうかしら？ うふふふふ、どうしよう迷っています」

まるで天気を喜ぶ少女のように彼女は笑う。私はそれにぞっとしたものを感じざるを得なかった。

この女は処刑人としてかなり優秀なのだろう。だからこそ道がある。

正しき道が。

「どうかね、私とゲームをしないかい？」

五十二粒

「あー、そういうの駄目ですよ。駄目駄目。漫画じゃないんですから、そんなこと私達が聞いてあげるわけじゃないですか。ましてやあなたのような頭のいい人間の企みなんて」

私は構わず続ける。相手に目的が伝わればどうとでもなる。

「ルールは単純だ。私が弱音を吐いたら私の負け、私が死んでも弱音を吐かなかったら、私の勝ちだ。どうだね？」

「どうぞご勝手にやって下さい」

「私が勝ったら、亮平君には指一本触れないで欲しい。それだけだ。君らはアレだろう、私を殺したあとは亮平君を連れて行くなりするんだろう？ 私が勝ったらそれをしないでほしい」

「……それ、アンタのプラスになってないぞ」

「ああ、無論だ。どうせ私はここで死ぬんだろう？ それは確定されたこと。なら、せめて大切な人は助けたいと私は思うのだよ」

「ふうん、自己犠牲ね。かっこいいじゃん。あたしはそういうの好きだよ」

お面の女は煙草を靴でもみ消し、笑う。それにパステル女は眉間にしわを寄せて少し怒った。

「齋藤さん、無視して下さい。話を聞いたら否が応でも言葉を意識せざるを得なくなります。私達は私達のすべきことを行えばそれでいいんです。ゲームだのなんだのは無視して下さい」

「別にいいんじゃないの？ どっちみち、コイツを連れて行くのって里で決まったことじゃないし。第一、リスクが高い」

そういつてサイトウと呼ばれた彼女は車椅子の亮平君の顔を覗く。彼は伏し目がちにずっと自分の靴の先を見ていた。

そう、それでいい。

君はそれで。

「あたしはコイツらの仲間がはっきりしない以上は連れて行くのは

反対だ。それは向こうの方々も内心そう思ってるんじゃないかな」
「全部吐かせればいいことでしょう？　彼は里に持ち帰ります。絶対です」

いいぞ、いいぞ。いい空気だ。

彼女は私を十字架に縛り付けると、その十字架を歯車のようなものを回して横に寝かした。手術台に寝かせられたモルモットはこんな感覚なのだろうか。

「撮影開始」

「もう、さつきから回してる」

この十字架は綺麗に洗われてはいるが、微かな血の匂いがした。マジックテープで止められた手は動きそうにもない。

横の簡易テーブルに置かれた器具の中に私のリュックがあった。

反対側では彼が暗い瞳で私を見ている。

逆さにパステル調の女の顔がこちらを覗く。

「なんだねこれは、私は悪人でもなければ聖人でもない。至極まともな一般市民だね」

「黙りなさい。あなたが藤岡さやかに指示を出していたのは確定していることです。私達が聞きたいのは、別の協力者の話です」

彼女は金槌と質の悪そうな、くすんだ色の大きな釘を取り出した。「そんなに私に聞きたいことがあるなら、自白剤でも何でも使えばいい。それか私に頭を下げるんだね。頭を垂れて崇め奉れば私も何かいうかもしれない」

「お元気ですね」

十円玉ほどの太さの釘が私の手のひらに添えられる。釘が白く無機質な光を反射して鈍く光る。手足が冷たい汗にじっと滲み、指先から血の気が失せていった。

肺の空気を入れ替える。瞼を一度閉じてもう一回開いた。

「痛いですよ、これ」

「痛みは生きている証拠というからね、普段から生きた心地のしな

い私には待ち遠しいさ」

「じゃあ、どうぞ」

金槌はふわりと高く持ち上げられ、釘は一気に打たれた。

カンと心地よい音。

冷たい鉄が肉と神経を掻き分け、手の中心を穿った。指先が異物に痙攣を始める。

カン。

カンカンカンカンカンカンカン。

「ふっ——————」がああああああああ!!」

「女の子らしくない声ですね。どうです、優しく死にたかったら全て話して下さい。ゲームがどうだとか強がりはいいんですよ?」

痛い痛い痛い痛い痛い。

だがその痛みが意識をクリアにする。迷いを打ち砕く。道を教えてくれる。

自分の道を。

鼻水を啜り、息を吐くように笑う。

「な、なあに、ちょっとびっくりしただけさ。こんなもの、亮平君が来なかったあの夜のあの時間に比べればまだまだ!　なあ、そうだろう亮平君!　あれから星空は見たかい?　私はね、君と見ると決めているからね、夜は下を向いて歩いているのさ!　かははははははははは」

「……………」

彼女は新しい釘を反対側の手に添え、また金槌を強く振り下ろした。

カンッ。

カンカンカンカンカンカンカン。

カンッ。

汗が一打ごとに噴き出る。涙が滲み、歯茎が力強く噛み締められた。

「くははははははははは、痛いね、痛いよ。……でも、でも亮平

骨は？

鼻の奥が血で息苦しい。背中を貫いているのか、これは。

動くな呼吸をするな、痛みが血が傷が広がる広がる。まず息をして、耐えろ。

いや第二波が。

ずぶり。

ぶすぶすぶすぶす。

「ふっ——あっ……はあっ……かつ！」

目が強制的に開かれる。開かれている。

痛みが意識を支配する。阻害する。感情を阻害する。

ずぶり。

ずぶり。ずぶり。ずぶり。ずぶり。ずぶり。

血が出血が、私を痛みと死に染める。

落ち着け。

3 1 4 1 5 9 2 6 5 3 5 8 9 7 9 3 2 3 8 4 6 2 6 4 3 3 8 3 2
7 9 5 0 2 8 8 4 1 9 7 1……。

下を見る。私の皮膚から細長い銀色の管が生えていた。それは浅黒い液体を内側から引き上げながら、冷たくそこにあった。

血なのか唾液なのか分からないものを飲み込む。血の味。

天井の光がとても眩しい。天使の羽のような白く全てを暴く光が。

私は正しいのか？ 私は何だった？

全てが薄っぺらく見えて、周りの自己欺瞞や偽善が許せなくて、この街を世直ししようと彼女の口車に乗ってせつせと爆弾を作って、この世に私と対等に話してできるのは彼女だけで、同じレベルで話せる人間との言い争いや、しょうもない殴り合いをして。だけど楽しかった。だけど彼女は好きな男に傾倒していつてまた一人ぼっちになって。

一人ぼっちな私は一人ぼっちな彼を見つけて……いつから好きになっっていたんだ？ 美しかったからか？ 儚げだったからか？ ああ、キスがしたいな、白百合のような彼ともう一度。

視界が端からゆっくりと沈んでゆく。奈落の底に落ちるように命が痛みに消えかけている。

なんだか、どうして、これはとても眠い。寒い朝、布団でまどろむような、なんとも耐え難い、この眠気……。

ガラス越しに何か言われているような音の沈殿した分厚さが心地いい。

誰だ、私に話しかけているのは。私に。

「もう、やめて下さい……！」

ああ、なるほど。

私としたことが、君の声が聞こえていなかったなんてね。

五十三粒

君が立った。君が泣いている。

赤ん坊のように、生まれたての小鹿のように震える足で。

私のせいだということを抜けば嬉しいことだ。

ならば私はもう少し踊らないといけないね。アンコールに答えてもう少し。

「人は……人は死によって」

「坂之上、もう喋るな。喋っちゃ、駄目だ！ あ、僕はもう全てが嫌で、無くなるのが嫌でだから自分から自分の時も止めて、全てを拒絶して」

知ってる知ってるさ、知ってるとも。君のことは、君の心は。

「死によって絶望し、心を凍てつかせる。なら、その氷を溶かすにはどうすればいい？ わ、私は来る日も来る日も考えた。答えは単純だ、人は人の死によって意識を覚醒させる。痛みによって痛みを恐れるように」

血の混じった咳に若干のストレス。こうも清々しいのだ。私の喉よ、もっと頑張ってくれ。

「……あなた本当に凄いですね。泣き言を言わず笑ってられるなんて尊敬に値します。こんな出会いじゃなければ是非ともお話を聞きたかったですね」

彼がポロポロと光輝く涙を床に流す。ああ、なんと美しいのだろう。

人とは美しい。うん、なんとも美しい。

「でも、どんなに全てを拒絶しても大切なものが消えるのは耐えられない！ もう誰かが、僕の知っている誰かが死ぬのは嫌なんだよ！ だから坂之上、もう……」

「それが今証明された！ ああ、あいつにいつて自慢したい。私の理論は正しかったと！ でもきっとお前は人形のような顔でそれが

どうしたというのだろうか」

それが彼女らしい。自分を神と信じて疑わない彼女らしい。

視界では朗らかな笑みの女がどこか化物を見ているかのように冷や汗を浮かべて銀色の串を私に掲げていた。

私はドラキュラか？ ふふ、面白い。

「亮平君、私がいなくてもちゃんと一人で生きていくんだよ？ フフフフフフ、あああの景色、あの山で君が絵を描いて私が横で茶々を入れて……それで最後にキスをして、遊園地に行こうと約束する。そんな世界をもう一度だけ……見たかった」

「行こうよ坂之上！ 何度でもキスをする！ この手で何度でも描くよ！ もっと坂之上にありがとうって言わなきゃ、好きだっていわなきゃだから！」

ああ、残念だけどね。もう君の声は聞こえないんだ。

君の口が好きだと動いたのだけ見ればもう満足。君の精一杯の優しさを心に刻んで私はタンパク質の塊になろう。

「ふふふ、――……落っこちた。王様の馬みんなど、王様の家来みんなども――……元に戻せなかった。………ふむ、塀之上という名前にすべきだった、か」
ぶすり。

胸に突き立てられた細い銀色のトゲは彼女の左胸を突いて、彼女を不適な笑みのまま停止させた。

「他にもいろいろあったんですけど、結局使わなくなっちゃいましたね。ま、これでも十分満足されるでしょう」

「あー、後味わる……」

亮平は声も出ず、ただそこで膝をついて、手をついて、神に懺悔するようになだれて、体の中身が全てなくなったかのようなぽっかりと開いた心の空洞に、嗚咽した。

不意に奇妙な電子音。

「おい、何だこの音」

「え、なんででしょう」

二人の女はそこで沈黙している亮平に目もくれず、音のする場所を探る。真後ろのテーブルからではなく、まだ暖かい坂之上の上腕につけられた奇妙なバンドから音は発せられていた。

小さなボックスについた赤い点灯がぼうつと光を放っていた。

「……あー、クソ。道連れかよ」

「え？ なんー」

齋藤は自分の真後ろのテーブルに置かれたリュックに目を向けて煙草に手を伸ばした。

カッと白い光が空気を瞬いて、強い衝撃波を出しながら炎を上げた。二人の女性は爆炎に巻かれ、一瞬で絶命した。

坂之上と名乗った少女の鼓動が停止した瞬間、作動するように作られた爆弾は、ガラスを破り、炎を上げながら全てを飲み込んでいった。

亮平は吹き飛びはするが二人の女性、坂之上の十字架が盾の役割を、そしてしゃがんでいたことが功を奏して死を免れた。

ぼんやりとした意識の中、彼は頭をさする。血がべっとりついていて、それが自分の血以外のものも含まれているということに気がつく。火傷の傷や耳鳴りに苛まれながら前を見た。

全てが赤く染まっていた。全てが混ざり合い、生焼けた死臭を巻き上げながらその肉の破片は花びらのように点在していた。

呼吸が止まる。

目が、胸が、頭が、心が。

痛い。

人が人じゃなくなったあの感覚。

大切な、それもよく知った人が死んだという旧知の感覚。

鼓膜が破れているのか亮平は自分の叫び声がいまいち聞こえなかった。坂之上と叫ぶも、もうその人物は言葉や記憶、世界からも消えてしまったかのように耳に届かない。

世界は静寂と狂気に支配され、彼女という形が本当に世界から消

えた。

彼は意識を失った。

五十四粒

「もう、何ヶ月になりますかね」

「この子はもう三ヶ月になるんだよ」

「いえ……そうじゃなくて」

彼は何か物言いたげな顔で微笑んだ。彼女は子供を抱いて、カフエから流れゆく景色を眺める。多くの人間がどこかへ流れるように歩いていた。

狭い店内には彼と彼女、そして従業員しか見えない。

「今は孤児院やってるって聞いたんだよ」

「ええ、おかげさまで。院長になるために勉強とかもしたりしてます」

「孤児院を運営できるってお金だけは沢山あるから？」

彼は一度コーヒーを口に運び、口の渇きを潤した。

心の傷を水で誤魔化す。

「……ええ、まあ」

「芸術家になるのかと思ってたんだよ。彼女もそれを望んでいたし、そうなるっていったから」

「僕のこの手じゃ、もうそういうことは……。まあ、その代わりに苦しんでいる子供を世話しようなんて夢ができました」

「今でも悪夢を見る？ あの時のこと、あの里のこと」

「いいえ、もうこれが全く」

そういつて笑う。彼の頬が無意識に痙攣をするのを見て彼女はそれが嘘なのだと分かった。

今でもいろいろ苦しんでいるのだろう。

それでも社会復帰ができたのは目標のため、そして坂之上のおかげなのだろうと彼女は思った。

「里の人間はどうしてあれからコンタクトを取ってこないんだよ。それがあたしには分からない」

ケーキをフォークで崩し、口に運ぶ。

柔らかいスポンジと生クリームの甘さが舌に広がった。彼は彼女が口に運ぶのを見てから、言葉を発する。

「リスクがどうか言っていましたけど、そういうことなんだと思います」

「……あたしはそうは思わない。何か誰かの意志を感じるんだよ。

例えばあんたのことを庇っている人間が里にいたりとか、そういうの」「どうなんでしょう、僕には思いつきませんね」

頬が動く。彼女の膝の上で赤ん坊が彼の頬を指さした。

子供も分かっている。

そして彼も自分の嘘を理解している。

では一体彼は何に、誰に嘘をついているのだろうか。

「ま、いいや。本題に入るんだよ。彼女の本当の名前、知りたくない？」

「いえ別に」

頬は動かない。

「何でなんだよ。正直彼女もそれを望んでいたと思うんだよ。それが彼女にとっても……」

「——知ってますか？ アリスに出てくるハンプティ・ダンプティってキャラクター」

割り込むように彼は言葉を発した。彼女は無言で彼を見つめる。

彼はコーヒーを口に運んで、ゆっくりと話した。

「塀の上にいる彼はある日、落っこちてハンプティ・ダンプティからハンプティになってしまふんですよ。この歌ってなぞなぞになっ
ていてですね、彼が何者なのかということを考えさせる歌になって
いるんです」

焦るような言葉のまとまらないそれに彼女はじつと彼の目を見た。
それが狂気からなのか、恐怖からくるものなのかじつと目の奥を
見つめて探る。

答えは。

「ふうん、で答えは見つかったの？」

「それが、ずっとずっと考えているんですけど、分からないんです。きっと僕は死ぬまでこのなぞなぞに囚われ続けるんでしょうね。でもそれもいいと思うんです」

「答えは知りたくないんだ」

またコーヒ―を口に運ぼうとして、カップが空なことに彼は気がついた。

「そうじゃなくてですね。なんていうか、それを知ってしまったら彼のしてきた事、彼の人生、彼の全てを知ってしまうような気がして怖いんですよ。生前、どんな人間だったのか知ってしまうのが、すごく恐ろしい」

「結果、どんな人間であってでも自分のせいで死んでしまったという事実に関心を向けなくてはならないから？ それを知ること罪悪感が増して襲ってくるから？」

「これは、物語の話ですよ？」

「……そうだったんだよ」

彼女は大雑把にケーキをフォークでひとつきして口に放り込んだ。携帯をつけて、あるものの現在地を探る。

どうやら彼は狙い通りここに向かっているようだ。

紅茶でケーキを流し込むと席を立った。

「もう行かれるんですか？ フライト時間？」

「この子の父親がここに来てるんだよ」

「……………なるほど。ではまた」

「さようなら」

彼女はあった時と変わらない人形のような顔で店を出た。変わった色合いの目をした赤ん坊が指をくわえながら彼をぼうつと見ていた。

彼は懷から消印の押されていない茶封筒を取り出す。逆さにした封筒から桃の種と笹の葉が音もなく手のひらに転がり落ちた。

「彼女かと思っただけど、やっぱり違うか」

では誰が。

どちらが。

本当に彼女は、彼女たちは死んだのか。

「一生……僕は忘れることができないんだろうな」

彼は汗ばんだ額を拭うと喫茶店の中にあるトイレに向かった。

ある一人のウェイトレスはそれを見ると、店に掛かったオープン
の札をクローズに変え、店のシャッターを下ろした。

店に笑い声がこだました。

五十四粒（後書き）

厨二病をこじらせたような物語を長らく見てくださったことにまず感謝の意を。

これにて終了です。

手癖で書いていたせいで超展開、ありえない物語設計になってしまったことを皆様にお詫び致します。

また何か私が作品を作ることがありましたら、薄汚いゴミが何か作ってるから見てやるかという優しい気持ちで見てやって下さい。

有難う御座いました。そしてお疲れ様でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8875h/>

相互不認知

2010年10月8日13時29分発行